

靈界物語 第二七卷 海洋萬里 寅の卷

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第二七卷』愛善世界社

1998(平成10)年09月02日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

～
～
～
～
～
～
～
～
～
～

目次

序文 じよぶん

凡例 はんれい

總説歌 そうせつか

第一篇 せいち
聖地の秋 あき

第一章 たかひめやかた
高姫館〔七八三〕

第二章

清潔法せいけつはふ〔七八四〕

第三章

魚水心ぎよすゐしん〔七八五〕

第二篇

千差萬別せんさばんべつ

第四章

教主殿けうしゆでん〔七八六〕

第五章

玉調たましらべ〔七八七〕

第六章

玉亂たまらん〔七八八〕

第七章

猫ねこの戀こひ〔七八九〕

第三篇

神仙靈境しんせんれいきやう

第八章

琉りうと球きう〔七九〇〕

第九章

女神めがみの託宣たくせん〔七九一〕

第一〇章 太平柿たいへいがき〔七九二〕

第一章 茶目式ちやめしき〔七九三〕

第四篇 龍神昇天りゅうじんしょうてん

第二章 湖上の怪物こじやう くわいぶつ〔七九四〕

第三章 龍の解脱りゆう げだつ〔七九五〕

第四章 草枕くさまくら〔七九六〕

第五章 情意投合じやういとうがふ〔七九七〕

第五篇 清泉靈沼せいせんれいせう

第六章 琉球の神りゅうきう かみ〔七九八〕

第七章 沼の女神ぬま めがみ〔七九九〕

第一八章 神格化「八〇〇」

序文 じよぶん

一、靈界物語もいよいよ二十七卷まで口述を終りました。一部の役員信者の間には、教祖の筆先をのみ偏信するの餘り、靈界物語に對しては、殆ど眼も呉れない人が偶にある様だ。否目も觸れないのならば少しも差支へ無しとするも、頻りに其含蓄せる主要點をも極めず、何故か蟲が好かぬとか言つて、無暗やたらと貶す人があるさうだ。併し乍ら私は斷言しておく。大本の教理を眞解せむと欲せば、どうしても本書を繙かねば成らない事を。

一、私は單なる現今の大本教信者のみの爲に口述したのでは無い。現幽神即ち三千世界の神佛、人類及び禽獸、蟲魚、草木などに安息を與へ、天國淨土を地上に建設せん爲に惟神的に三才の童子の耳にも解し易からしめむと、卑近な語を用ひ

て述べた神書である。神は智者、學者、強者のみに眞理を諭し玉はず、誠の神恵は愚者、弱者をして克く其福音を味はしめ玉ふものである。此物語も亦右の御神慮に出でさせ玉ひたるものであります。一讀すれば必ず何等かの光明に接する事は、私の深く信じて疑はない所であります。

大正十一年七月二十八日（舊六月五日）

於龍宮館 王仁識

凡例

一、物語に屢「ナイス」といふ語が出て來ますが、これは「美人」とか「別嬪」といふ意味です。例へば、本巻第一篇「聖地の秋」第二章「清潔法」五十頁六行目に「古今無雙のナイスをば」とあるのはそれです。

一、第二章「清潔法」の下の括弧の中の七八四の數字は、第一卷よりの章數の累計を示したものです。

大正十二年五月 編者識

總説歌

顯幽神の三界を
守らせ玉ふ國の祖

國治立大神が
再びここに現れまして

五六七の神代を建て玉ふ
空前絶後の御經綸

凡ゆる思想の惡風を
根本的に改革し

天壤無窮の神國を
堅きが上にも堅めまし

神の御裔の大君の
稜威を宇内に擴充し

臣たり民たる大道を
導き諭す大本を

我の心に照り合はし
色々雑多と批評する

似而非忠臣のあらはれて
誠の神の御教を

傷つけ破る忌々しさよ
心次第に何事も

鏡にうつる人の身の
如何で神意の解るべき

小心翼々しなからも 廣大無邊の神の道

批評の權威は何處にある 頑迷固陋の邪神魂

君と臣との道明かき 我靈の源泉の御神政

瑞の御靈の説き諭す 教の旨が分らねば

眞の忠臣義士でない 自己の心を省みよ

何れも偽善の凝まりぞ 人の事をば言ふよりも

第一自分を省みよ 心恥かし事計り

神にお詫をせにやならぬ 誠心誠意に立歸り

ねぢけ心を除却して 圓満清朗日月の

輝き渡る神國魂 海の内外に示しみよ

神の心も白波の 邪の道の曲人が

神の憑りて作りたる 奇しき靈界物語

お耳に觸るも是非なけれ 是も靈魂の因縁で

變性女子を先入的に 誤解し切つた世迷言

この物語分らねば
大正神諭の眞解は
いつになつても付きはせぬ
あゝ惟神々々
御靈幸はひましまして
理智に墮したる迷信を
拂ひ玉ひて實相の
眞如の光與へませ
世の悉は隈もなく
口ある限り説き諭す
體主靈從の人々の
御氣に入らない事ばかり
言はねばならぬ我身魂
皇大神も見そなはし
迷へる人の目を覺し
我神界の奉仕をば
篤く守らせ給へかし。

大正十一年七月

於龍宮館

第一篇 聖地の秋

第一章 高姫館（七八三）

五六七の神世の經綸地 青垣山を繞らせる

靈山會場の蓮華臺 桶伏山の東麓に

旭を受けて小雲川 清き流れを瞰下する

風景絶佳の岩が根に 丸木柱に笹の屋根

厚く葺いたる神館 静かに建てる冠木門

天然石を敷き竝べ 梅と松との庭園を

可なりに広く繞らして 建てる館は四間造り

奥の離れの棟は 高姫さまが書齋の間

萩はぎの小柴こしばを編あみ立たてて 造つくり上あげたる文机ふみつくゑ

天然石てんねんいしの硯すずりをば お鍋なべが味噌みそを摺する様やうに

焼木杭やけぼくくひをクリクリと 連木れんぎの樣やうに摺すり減へらし

竹たけの籠へらにて造つくりたる 筆ふでに墨すみをば染そませつつ

青あをく乾かわきし芭蕉葉ばせうばに 何なにか知しらねどスラスラと

書かき記しるし居をる時ときもあれ 門もんを開ひらいて入いり來きたる

高山彦たかやまひこや黒姫くろひめの 姿眺すがたながめて下男しもをとこ

勝公かつこう安公やすこう兩人りやうにんは 龍宮りゅうぐう様の御入來ごじゆらいと

いと丁寧ていねいに腰屈こしかがめ 敬意けいを表へうせば黒姫くろひめは

高姫たかひめ様さまは在宅ざいたくか 高山彦たかやまひこの夫婦連ふうふづれ

参まゐりましたと奥おくの間まへ 傳つたへてお呉くれと促うながせば

ハイハイと答こたへて勝公かつこうは コレコレ安公やすこう門もんの番ばん

しつかり頼たのむと言いひ捨すてて いそいそ奥おくへ驅かけて行ゆく

暫しばくありて勝公かつこうは 二人ふたりの前まへに腰屈こしかがめ

高姫さまの仰せには

待兼山の時鳥

お二人共に奥の間へ

早くお進み下さんせ

以ての外御機嫌と

話せば黒姫羽撃きし

高山彦も教服の

塵打拂ひ悠々と

細き廊下を傳ひつつ

奥の間さして忍び入る

高姫は別棟の書齋から廊下傳ひに袴も着けず、板縁をめきめき云はせ乍ら、稍

空向き氣味になつて奥の間に現はれ、木の株を切抜いた火鉢を前に据ゑ、煎餅の

様な薄い座蒲團の上に四角張つて、

高姫「コレハコレハ高山彦さまに黒姫さま、お仲の良いこと。獨身者の高姫の前

にそんなお目出度いとこを展開して貰ひますと、堪りませぬワ。オホ、、、ま

あまあ御遠慮は要りませぬ。ズツと奥へ御通り下さい。……さう遠慮をして貰

うと、肝心要の話も見えず、お顔も聞えず、大變に都合がよくありませぬワ」

と態とに顔が聞えぬの、話が見えぬのと、脱線振を發揮して、高山彦夫婦に對し

大日の照るのに、晝日中氣樂相に夫婦連れでやつて來たのは、チツト脱線ぢやないかとの意味を仄かして居る。

黒姫の顔はサツと變り、高山彦の袂をチヨイチヨイと引張り、早く氣を利かして貴方はお歸りと云ふ意味を私かに示した。

高山彦「コレ黒姫、お前は何時も人の袂をチヨイチヨイ引張るが、唾でもあるまいに、何故明瞭と言はないのだ。わしはそんな、狐鼠々と手眞似や仕方ので以心傳心の使分けは嫌ひだからなア」

黒姫「エー氣の利かぬ……瓢六爺だなア。高姫さまが最前の御言葉、貴方は何と聞きましたか。竹生島でも仰有つた通り、夫婦ありては御用の出來ぬ御道なのに、

高山さまを貰うてから、私の間が抜けたとキツパリ仰有りましたでせう」
高山彦「オホ、いやもう恐れ入りました。此高山彦も高姫様の御精神に、

大賛成です」

黒姫目に角を立て、少しく口角より泡を滲ませ乍ら、
黒姫「それ程何々さまがお氣に入りますれば、どうぞ御好きな様になさいませ。

何と云つても何時も貴方の仰有る通り、色の黒い鳥の嫁に、首や手足の長い鶴の
婿さまは釣合ひませぬ。へん……此頃の空と男の心、折角御邪魔を致しましたが、
私は是で御免を蒙ります。高山彦に鷹鳥姫様、高と鷹との情意投合、私も是にて
断念致します。こんな厄介な爺を誰が好き好んでハズバンドにしたい者が御座い
ませうか。高姫さまの御紹介だと思つてお道の爲、國家の爲に今迄辛抱して参り
ました。男鰥に蛆が湧く、女鰥夫に花が咲く、へん……濟まないが私だつて……へー
ん」

高山彦「大變な所へ鋒銃を向けるのだなア。ここを何と心得てる」

黒姫「へん、仰有いますな、そんな事の分らぬ様な黒姫ですかいな。擬ふ方なき

高姫さまの御館、桶伏山の朝日の直刺す景勝の地、小雲川の畔で御座んすぞえ」

高姫「オホ、随分御氣樂なことですな。私等は春の花も仲秋の月も、樂し

む暇は無く、何だか神様の爲にかうチツとして居ても、氣が焦々し、忙しくつて

なりませぬワ。小心者の高姫に比べては、餘裕綽々たる御夫婦仲、實にお羨まし

う御座います。ホッホ、」

黒姫「今日は左様な貴女の嘲罵的御話を聞きに参つたのぢや御座いませぬ。國依別が高姫さまに進上して呉れと云つて、妙な物を持つて來ました。開けて見れば大變な立派な重の内、上に一つの短冊が載つてゐる。其文面には………鮒「もろこ」、鮎「からかぎ」鯉に鱒、酒の肴に鱧ニヨロニヨロ、「ふんぞくらしい」に砂「くぐり」、石食ひ魚に釜掴み、直におあがり下さらねば、直に石に變化する虞あり………と書いてありました。こら妙だと開けて見れば、不思議も不思議、上の重も中の重も下の重も残らず石ばかり、何程國依別が惡戯好きだと云つても、まさか石を初から持つては來ますまい。貴女に怒られると大變だと思ひ、一寸私の宅に其儘預つておきました。どう致しませうかな」

高姫俄に面を膨らし、

高姫「黒姫サン」

と言葉尻をピンと撥ね、

高姫「お前さまは餘程良い馬鹿ですね」

黒姫「へー………」

高山彦「何分にも龍宮の乙姫様が一つ島とやらへ、御旅行遊ばした不在宅のガラン洞ですからなア、アハ、ハ、ハ、」

黒姫「情意投合のお二人様、どうなつと仰有りませ。あなたは何時も「サカナ」理屈を言うてお「イシ」が悪いから、意趣返しに團子理屈……オツトドツコイ團子石を國依別が態と持つて來たのでせう。そんな事の氣の付かぬ様な黒姫ぢや御座りませぬ。金剛不壞の寶珠でさへも御呑み遊ばす高姫さまだから、今度はお生憎様、堅い玉がないから、これなつと御あがり遊ばして、腹の蟲を御癒やしなされと云ふ、國依別の皮肉な謎ですよ」

高姫「免も角國依別を招んで來ませうか。本人に直接承はれば一番近道だから……コレコレ安公さま、お前ちよつと御苦勞だが、空助館の隣の豚小屋の様なおさい家に、國依別が今頃は晝寢の夢でも見て居るに違ひないから、高姫さまが此間の御禮に御馳走をあげたい。就いては折入つて御頼みしたい事があるから、最

大急行で御出で下さいと、呼んで來るのだよ」
安公「ハイ、さう御注文通り、國依別さまが來て呉れませうかな」

高姫「おいでかい。もし来なかつたら……系統の生宮の命令を何故聞かないか、日の出神を何と心得て御座る……と一本、槍を突つ込んでおくのだ。さうすると國依別は取るものも取り敢ず、スタスタとやつて来るよ。サア早く往つてお呉れ」
安公「アイ」

と一聲後に残り、國依別の矮屋の前に走り着いた。

安公「もしもし、國の大將さま、大變だ。高姫さまの御居間で高山彦と黒姫が夫婦喧嘩をおつ始め、組んず組まれつ、亂癡氣騒ぎ、イヤもう大變な事ですよ。それに就て、國依別が愚圖々々吐すと、日の出神の生宮だ、系統の身魂を何と心得てる……と云うて劍突を……ドツコイ違うた。槍を一本突つ込んで歸れと仰有つた。もう邪魔臭いから何も彼も一緒に申し上げますワ」
國依別「アハ、ハ、ハ、夫婦喧嘩ぢやあるまい、石の問題だらう、此頃は陽氣が悪いで、早く料理するか、煮しめん事にや、石に變化して了ふさうだ。山の芋が鰻になつたり、鮎が化石したり、青雲山ぢやないが、木の枝に魚が實つたり、川の瀬に兔が泳いだりする例しもあるからなア」

安公やすこう「國くにさま、最大急行さいだいきんかうだよ。早はやう來きて貰もらはないと、高姫館たかひめやかたは地震雷火ぢしんかみなりひの車くるま、地ち異天變いてんべんのガラガラ、ドタンバタンの幕まくが下おりる。急行きんかう々々きんかう」

と國依別くによりわけの手てを取りとて無理むりに表おもてへ引摺ひきずり出だす。

國依別くによりわけ「オイ安公やすこう、手てを放はなせ。コレから往いつてやらう」

と先さきに立たち高姫たかひめの館やかたに行ゆかんとする時とき、秋彦あきひこは後あとより走はしり寄よつて、

秋彦あきひこ「國依別くによりわけさま、どこへ御出おいで遊あそばす、高姫館たかひめやかたぢやありませんか」

國依別くによりわけ「オウさうだ。これから一談判ひとだんぱん始はじまる所ところだ。お前まへも來こぬか、隨分ずぶん面白おもしろいぞ」

秋彦あきひこ「有難ありがたう、サア参まゐりませう。……オイ安公やすこう、しつかり案内あんないせいよ。何分なにぶん天地てんち

暗澹あんたん、黒姫くろひめの世よの中なかですから、道路だうろの石いしの高姫たかひめに躓つまづいて、鼻はなの高山彦たかやまひこを臺だい無しに

しちや堪たまらないからなア、アツハ、ハ、ハ、」

と嘲笑あざわらひ乍ながら、スタスタと高姫たかひめの門前もんぜん迄まで立たち向むかうた。秋彦あきひこは形計かたちばかりの門もんを開ひらいて先さき

へ飛とび込こみ、少すこしく腰こしを曲まげ、右みぎの手て指ゆびを固かためて細ほそくし乍ながら、

秋彦あきひこ「コレハコレハ國依別くによりわけの宣傳使せんでんし様さま、妾わらはが如ごとき見窄みすぼらしき茅屋あはらやへよくこそ御入ごしゆら

來下いくださいました。日ひの出神でのかみの生宮いきみや、心こころの底そこより光榮くわうえいに存ぞんじます。又また先達せんだつては黒姫くろひめ

様の御手を通し、結構な結構な堅いお魚を澤山に頂戴致しまして有難うムいます。
何か御返禮をしたいと思ひましても、御存じの通り貧家に暮す高姫、御禮の仕様
もムいませぬ。併し乍ら折釘の「かます」子に、最後屁の「かます」、手製の左
巻き、「かいちう」蟲の餛飩、雪隠蟲の汁の子、青菜に鹽の蛭の素麵、蛇の蒲焼、
蛙の吸物、「なめくじ」の胡瓜揉み、どうぞ御遠慮なく、サア奥へチヤツと行つ
て腹一杯おあがり下さいませ。ホツホ、、、あのマア國依別さまの御迷惑相な
御顔付……」

國依別「コレコレ鹿さま……ではない……お鹿さま。いい加減に戲談仰有いませ
秋彦「お鹿さまが申すのではムいませぬ。高姫さまの副守護神が此門に入るや否
や神憑りされまして、斯様な事を仰有ります。決して秋彦のお鹿が言うたとは思
つて下さいませすな、オホ、、、」
と出齒の口を無理にオチヨボ口にしようと努むる可笑しさ。
國依別「左様ならば、遠慮なしに罷り通るツ。出齒鹿殿、案内召され」
安公「アハ、、、門芝居がお上手な事、高姫さまが御覽になつたら嘸御笑ひで

せう…イヤ腮を外してひつくり返り、又もや外科醫者を頼みに行かねばならない様なことが突發したら、又候…安公さま、御苦勞乍ら、お前一寸外科醫の山井養仙さま所へ、最大急行で頼みに往つて呉れ…なんて仰有るのは目のあたりだ、腮阿呆らしい。ワツハ、ハ、ハ、

國依別「汝安公とやら、今日只今より國依別が直接の家來となし、名を安彦と授くる。其積りで國依別に隨いて來るがよからう」

安公「コレハコレハ思ひもよらぬ御恩命、安彦の宣傳使、確かに御恩命を拜しませぬ、アタ阿呆らしい、言依別神様から頂くのなら、結構だが、巡禮上りの胸の悪い宗彦に宣傳使を任命されて堪らうかい」

秋彦「どうでも良いぢやないか。兔も角頂戴しておけ。お前は松鷹彦になるのだよ。さうしておれはお勝になつて、此宗彦さまと巡禮に歩くのだ。少し川は届かぬけれど、あの小雲川を宇都山川と見做し、高姫館を松鷹彦の茅屋に擬し、茲で一つ面白い芝居をやるのだな」

安公「そんな事言つたつて、松鷹彦がどうするのか、ちつとも分らぬだないか」

國依別くによりわけ「そこは臨機應變りんきおうへんだ。そこは……此方こちから言ふのに應じて答へればよいのだ。お前は靈界物語れいかいものがたりの如意寶珠にようほうしゆの末ひつじの巻まきを讀んで居ないから、其間そのかんの消息せうそくが分るまいが、其時そのときは又其時またそのときの繪ゑを書かくのだ」

安公やすこう「よし、棹さが無いが、茲ここにチツと太ふといけれど物干し竿ざがある、これでマア鷹たかや鴉からすを釣つることにしようかい。サア早く巡禮御夫婦じゆんらいごふうふ、やつて來なさいや」

國依別くによりわけ「よし、ここを川邊かはべと見做みなし、向ふから宣傳歌せんでんかを歌うたひつつやつて來るから、お前は太公望氣取りたいこうぼうきどりで竿ざを垂たれて居るのだ」

と云いひ乍ながら國依別くによりわけ、秋彦あきひこは門もんを出でて一二丁後返りいちにちやうあとがへをなし、出鱈目でたらめの歌うたを歌うたひ乍ながら進すすんで來る。

安公やすこうは庭先にはさきの飛石とびいしを川かはの瀬せと見做みなし、物干し竿ざの先さきに藤蔓ふぢづるを絲いとの代かはりに付け、太公望氣取りたいこうぼうきどりで魚釣うをつりの眞似まねをして居る。そこへ勝公かつこうが飛とんで來て、勝公かつこう「オイ安やす、貴様きさま何なにして居るのだ。最前さいぜんから高姫たかひめさまが大變たいへんに御待兼おまちかねだ、まだ使つかひに行かぬのか」

安公やすこう「喧やかましく云いふない、無聲靈話むせいれいわをかけて招よんであるのだ。俺おれは武志たけしの宮みやの松鷹まつたか

彦だぞ。まあグズグズして居るより見てをれ、かうして居れば國依別や秋彦が引つかかつて来るのだよ。俺が此竿を振るや否や、妙な宣傳歌を歌つてツルツルツルと引摺られて来るのだ」

勝公「そんな馬鹿な事があるものか。是から高姫様に注進するぞ」

と云ひすてて、屋内に隠れた。國依別はどこで寄せて来たか、蓑笠を被り、俄作りの金剛杖を突き、

國依別「嬬が表に現はれて 善ぢや惡ぢやと立騒ぐ

此世の困つた娑婆塞ぎ 乞食心の高姫が

只玉々と朝夕に 心を焦つ氣の毒さ

われは宗彦バラモンの 神の教の修驗者

殺生するのは善くないと 高姫さまが言うた故

小雲の川におり立つて 生物擁護の實行と

無心無靈の團子石 魚と見做して釣り上げる

手閒暇要らぬ漁りは 經濟上の大便利

刃物も要らねば煮る世話も 一寸も要らぬ石の魚

さざれ石さへ年経れば 巖となりて苔が蒸す

瓢箪からも駒が出る 團子石とて馬鹿にはならぬ

如意の寶珠や紫の 玉に變るか分らない

サア是からは是からは 宇都の河原の川邊に

松鷹彦の庵を訪ひ 一つ談判してやらう

秋公來れ早來れ オツと違つた妻お勝

教の道の兄弟が 夫婦氣取で面白く

高姫川の川堤 やつて來たのは安公が

芝居氣取の太公望 もうし もうしお爺さま

お前は古い年をして 水なき川に竿を垂れ

何を釣るのか氣が知れぬ 諸行無常や生滅法

高姫さまの目的は 寂滅爲樂となるである

黒姫さまや高山の

女大黒福祿壽面

欲の川原に竿たれて

金剛不壞の玉の魚

釣らむとするも辛からう

欲につられて高姫が

南洋三界駆け巡り

黒くなつたる面の皮

つらつら思ひ廻らせば

熏り返つた釣られ鯛

睨み合うたる二人仲

恵比須でさへも尾を巻いて

跣足でサツサと逃げて行く

あゝ氣の毒や氣の毒や

安公までが國さまの

言葉に釣られて欲の川

物干竿に綱をつけ

宗彦お勝の巡禮が

茲に来るを待暮す

あゝ惟神々々

叶はん事が出来て来た

高姫さまが腹を立て

コレコレ國よ國公よ

日の出神の生宮を

馬鹿にするのも程がある

何程呑み込みよい妾も

齒節の立たぬ團子石

團子理屈を捏ねやうと

二重三重に封をして 持つて来たのが憎らしい

此因縁を聞かうかと 面ふくらしして飛びかかり

胸倉とつて一騒ぎ おつ始まるに違ない

スワ一大事と言ふ時に 逃げる用意をしておかう

秋公横門開けておけ まさか廁の股げ穴

脱け出す譯にも行かうまい 太公望の安公よ

もう釣竿は流すのだ 是から釣るのは高姫ぢや

もうし もうし高山の 福祿壽爺と黒さまは

當家におゐで遊ばすか 一寸お尋ね致します

此聲聞いて勝公は 戸口をガラリ引あけて

『賤しき巡禮の二人連 國依別や秋彦に 瞞しに來てもそりやあかぬ

よう似た聲を出しやがつて 早く歸つて下さんせ

スツカリ駄目だと諦めて 出て來る場所ではない程に

巡禮なぞのノソノソと

高姫さまが見付けたら

長い柄杓に水汲んで

頭の上からザブザブと

熱吹きかけるに違ない

犬ぢやなけれど尾を振つて

一時も早く「イヌ」がよい

ワンワンワンと「いが」み合ひ

喧譁をされては堪らない

巡禮に化けた國さまや

秋さま二人の宣傳使

危険区域を逸早く

逃れてお歸り下さんせ

奥に高姫黒姫が

額の靜脈血を充たし

青筋立てて控へ居る

早く早くと手を擴げ

つき出す様な眞似をする。

高姫は門口の怪しき聲に、黒姫、高山彦を奥の間に残り、自ら茲に現はれ、

高姫「勝公さま、お前今何を言つて居たの、どこに私が青筋を立てて居ますか」

勝公「イイ工滅相もない、そんな事は申した覚えはテンでムいませぬ。今そんな

男が一寸やつて來ましたので、高姫さまのお目にかけたら、嘸お笑ひ遊ばすだら

うと云つて居たのでムいます……それ、そこに乞食巡禮が二人立つて居ませうが
なア。一人は宗彦、一人はお勝、もう一人は松鷹彦、欲の川で竿をたれ、鷹とか
鴉とか【つる】とか言つて居ました。……へーまあ、何でムいます、ザツと此通
りで」

とモチモチして頭を搔く。

高姫「お前は國依別さま、秋彦の兩人でせう。大それた悪戯をなさつて、此高姫
に合す顔がなくなり、蓑笠を被つて元の宗彦時代に立返り、心の底から改心を致
しました、と云ふ證據でやつて來たのだらう。そんな藝當は世界の見え透く日の
出神の前では通用致しませぬぞえ。サアサア早く正體を現はして這入つて下さい」

國依別「幽靈の正體見たり枯尾花。

たそがれて山低う見る薄かな」

高姫「俄に風流人めいた事を言つて、誤魔化さうと思つてもあきませぬぞや。サ

アサアとつとと這入つて下さい。お前さまに尋ねたい因縁があるのだから……」

國依別「因縁の玉を集むる此館……因縁つける高姫大根……」

旅役者大根と聞いて顔しかめ。

大根役者どこやらとなく魂が脱け。

玉おちのラムネぶつぶつ泡を吹き。

今抜いたラムネの泡や高姫……オツト高く飛び。

黒姫の様な葡萄酒菘の茶屋。

高山も低う見ゆるや萩の花。

如意寶珠空に輝く秋の月。

秋彦の空高くして馬は肥え」

高姫「コレコレ、國さま、何を愚圖々々言つて居るのだ。這入れと云つたら、這

入りなさい」

國くに依より別わけ「這はい入れよと言いはれて躊躇ためらふ熱あつい風呂風呂。

風呂風呂吹ふきを喰くはぬ役者やくしゃの子供こども哉かな。

大根だいこんの役者やくしゃの芝居しばいチヨボ葱ねぎ」

高姫たかひめ「エー、辛氣しんき臭くさい。氣きが咎とがめて鬨しきひが高たかいのだな」

國くに依より別わけ「高姫たかひめの敷居しきいの欲よくに股またが裂さけ。

股裂またさけた五いつつの玉たまは不在るすの閒まに。

黒姫くろひめは酒さけより男をとこ好きすと言いひ。

高山たかやまに黒雲くろくも起おこり日ひは隠かくれ。

東天とうてんに日ひの出での光暗ひかりやみは晴はれ。

堂々だうだうと國くに依より別わけは進すすみ入いり」

と言いひ乍ながら秋彦あきひこを伴ともなひ、高姫たかひめに先立さきだつて奥おくの閒まに進すすみ入いる。

高姫、黒姫、高山彦、國依別、秋彦の五つの頭は火鉢を中に置いて、五辨の梅の花の開いた様に行儀よく竝んだ。

國依別「明月や高山頭に照り渡り。」

高山を透かして見れば星低し」

高姫「國依別さま、此間は御心を籠められた澤山な魚を頂戴致しまして、有難う御座います。これには何か御意趣のあることで御座いませう。サア其因縁から包まず隠さず聞かして下さい」

國依別「和知川に洗ひ曝した石の玉、我は尊き人に捧げつ。」

身魂相應堅くなつたる石の玉。

石よりも堅い決心感じ入り。

激流に揉まれて石は圓くなり。

瀬を早み岩に堰かれて石の魚

高姫「エーもどかしい。そんなむつかしい事を言いつて分りますかいな。救世軍のブース大將が言つた事を知つて居ますか。例へば一軒の家でも一番小さい三つ兒か、無學な下女に分る言葉でなければ名語ぢやありませんぞ。俳人氣取りで何を駄句るのだ。お前さまチツト此頃はどうかしとりますねえ。小雲川で一つ顔を冷し目を醒まして來なさい」

國依別「底までも澄みきりにけり秋の水。

秋の水腐つて居れどいと清し。

清らかな水には棲まぬ鮒もろこ。

濁江の深きに魚は潛むとも など川蝉の取らでおくべき」

高姫「おきなさんせ、大石内藏之助の眞似をしたり、何も知らぬと言へば調子に

乗つて、人の歌まで自分が作った様な顔をしようと思つて……
坊だ^{ばう} 本當にお前は歌泥^{ほんたう まへ うたどろ}

國依別^{くによりわけ} 床の下深きに玉は隠すとも^{ゆか したふか たま かく}

など高姫の取らでおくべき。アツハ、^{たかひめ と}

高姫^{たかひめ} コレ國さま、どこまでも人を馬鹿にするのかい^{くに}

國依別^{くによりわけ} 馬鹿野郎夜這の晨狼狽し^{ばかやろう よばひ あしたらうばい}
所。 ゆき詰りては胸も高姫。
…… 動悸は玉の置^{どうき たま おきと}

龍宮へおと姫したかと氣を焦ち^{りうぐう ひめ} 世界隈なく探す馬鹿者^{せかいくま さが ばかもの}

高姫^{たかひめ} コレ黒姫さま、國さまに是丈馬鹿にされてお前さま何ともありませんか。^{くろひめ くに これだけ ばか}

チツト日頃の辨舌をお使なさつたらどうですかい^{ひじろろ べんぜつ つかひ}

黒姫^{くろひめ} 何だか人間らしいないので、話の仕様がありませんか。^{なん じんげん はなし しゃう}

國依別くによりわけ 人間にんげんを超越てうえつしたり神司かむつかさ。

黒雲くろくもに包つつまれ星ほしは影かげ潜ひそめ。

高山たかやまに黒雲くろくも懸かがり雨あめは降ふり。

涙なみだがはたちま 濁にごる玉たまの雨あめ」

黒姫くろひめ「コレ高山たかやまさま、今いま國くにさまがどうやらお前まへさまや妾わたしの事ことを、俳句はいくとやらで罵ばた倒ふして居ゐるやうだ。お前まへさまも立派りつぱな男をとこでないか、何なんとか一ひとつ言靈ことたまで遣やり返かへし、國くにを遣やり込こめて了しまふ丈だけの甲斐かひ性は無ないのかい」

高山彦たかやまひこ「苦くにするな國依別くによりわけて大切たいせつな

げぼう頭あたまは如意寶珠にょいほうしゆ……光ひかりは玉たまの如ごとくなりけり」

黒姫くろひめ「高山たかやまさま、自分じぶんの事ことを言いつてるのだないか。國くにさまに對たいして言いふのだよ。エーエ、鈍どんな男をとこに緞子どんすの羽織はおり、女房にようぼうも隨分ずぶん氣きの揉もめる事ことだなア。そんなら妾わたしが代かは

つて言ひませう。聞いて居なされ、斯う云ふのだよ。……

黒姫の黒い眼で睨んだら

神の國依別もなく散る

櫻の花は神風に

吹かれてバラバラバラモン信者

聞いてもムネ彦悪くなる

負てもお勝の尻を追ひ

肥桶擔ぎの玉治別に

玉を取られし氣の毒さ

泣面に蜂

止まつて咬んだ如くなりけり

國依別「アハ、ハ、ハ、ウフ、フ、フ、此奴ア面白い。始めて聞いた名歌だ。柿本人

磨も丸跣足だ。與謝野晶子の所へ持つて往つたら、屹度秀逸點を呉れるだらう。
イヒ、、、、エへ、、、、オホ、、、、……

黒姫の歌にお臍が宿替へし。

脇の下キユウキユウキユウと鼠鳴き。

名歌の徳床板迄が動き出し。

翠玉の皺まで伸ばす此名歌

高姫「黒姫さま、こんな男にかかつちや、口八丁手八丁の高姫だつて、三舎を避けねばなりませぬワ。もうそんな歌などで話しちや駄目ですよ。……コレ國さま、お前さまは何の爲にあの様な物を、私に贈つたのだ。失禮ぢやありませんか。何程物喰のよい豚だつて石は喰ひませぬよ」

國依別「豚よりも物喰ひのよき人もあり。」

如意寶珠玉さへ嚙る狂女哉。

今の世は砂利さへ喰ふ人もあり。

嫁人の祝ひに据ゑる石肴 二世を固めの標なるらむ。

マアざつと斯う云ふ精神で、貴方の堅固な精神をお祝ひ申し、お賞め申した國依別の眞心。

岩さへも射貫く女の心哉。

と云ふ様なものですワイ。悪氣を廻して貰つちや、折角の國依別の志が水泡に歸します。魚だつて…魚が水に棲めば、此石だつて綺麗な流水にすみきつて、神世の昔から永久に川底に納まりきつて居つた石肴ですよ。別に喰つて下されと云つて贈つたのぢやありません。お目にかけると云つたのだから、食へる食へぬはお前さまの御勝手、そんな問題は些いと的外れでせう」

高姫 流石はドハイカラの仕込み丈あつて、巧いものだワイ。オホ、。コレ
コレ黒姫さま、高山彦さま、お前も随分鈍理屈が上手だが、國さまにかけちや側
へも寄れますまい。言靈の幸はふ世の中だ。チツト是から言靈の練習をなされま
せ

斯かる所へ夏彦、常彦兩人は、言依別の目を忍び系統の高姫に御機嫌伺ひの爲、
太平柿を風呂敷に包み、やつて來た。勝公は直に奥の間に進み入り、
勝公 もしもし高姫さま、夏彦、常彦の兩人が御機嫌伺ひだと云つて今見えまし
た。如何致しませう

高姫 したり顔に、嫌らしく笑ひ乍ら、國依別、秋彦に目を注ぎ、
高姫 勝公さま、どうぞ御兩人様、ズツと奥へ御通り下さい、と丁寧に御迎へ申
してお出で……アーアやつぱり身魂の良い者は分るワイ。

落魄れて袖に涙のかかる時 人の心の奥ぞ知らるる

だ。妾が聖地へ歸つてから今日で三日目だ。それに言依別を始め、空助迄が不心得千萬な、系統のお歸りを邪魔者扱に致して、馬鹿にして居る……エー、今に見ておぢやれよ、アフィンと致さして見せるぞよと、日の出さまが仰有るので、先づ神様にお任せして辛抱して居るのだ。人間と云ふ者は薄情なものだ。冷酷無惨の浮世とは云ひ乍ら、人情薄きこと紙の如しだ」

國依別「此國さまは人情厚きこと神の如しでせう」

高姫「さうでせうとも、偶の挨拶に團子石を贈つて來る様な、無情……オツトドツコイ親切なお方ですからな」

國依別「イヤその御禮には及びませぬ。澤山なものでムいますから……」

斯る所へ勝公に導かれ、夏彦、常彦は目をギョロつかせ乍ら、此場に恐る恐る現はれ來り、國依別や秋彦の其場に端坐せるを見て、聊か手持無沙汰な顔付にて、ドギマギして居る可笑しさ。夏、常兩人、丁寧の高姫の前に手をつかへ、兩人「是は是は高姫様、御遠方の所永らく御苦勞様でムいました」

高姫「イヤもう御挨拶痛み入ります。何分身魂が研けぬものでムいますから、不

調法計り致して居ります」

兩人「滅相もない、貴方は決して無駄ではムいませぬ。神様の御筆にも、人民から見れば何でもないやうだが、神の方からは大きな御用が出来て居るぞよ……と現はれて居りますから、屹度結構な御用が出来てをるに違ひありません。兔角神界のことは人民では分りませぬから、形の上で彼此申すのは、申す人が分らぬので御座いませう」

高姫「ハイ、有難う」

と涙含む。

兩人「是は是は高山彦様、黒姫様、つい申し遅れました。あなたも永らく神界の爲に御苦勞様でムいました。直様御伺ひ致すのが本意でムいますけれど、二三日前から空助さまに……エー、一寸……何でムいますので……つい遅れましてムいます。マア御無事で御兩所共御歸り下さいまして、聖地は益々御神徳が上がるであらうと、一同影から御喜び申してをる様な次第でムいます」

高山彦「ヤア常彦さま、夏彦さま、あなたも御無事で御目出度う」

黒姫「ヨウ親切に此婆アを訪ねて下さいました。年がよると腰が屈む、目汁鼻汁……イヤもう醜くるしいもので、誰もふりかへつて呉れるものは御座いませぬワイ。力と頼むは大神様と、日の出神様、龍宮の乙姫様計りでムいます。人情紙の如き軽薄な世の中に、ようマア御訪ね下さいました。あなたも御無事で結構でムいますなア」

兩人「ハイ、有難う。……ヤア國依別さま、秋彦さま、あなたは何時御越しになりましたか」

國依別「……」

秋彦「つい、最前参りました。お三方が久し振で御歸りになつたので、我々も何となく心勇み、御祝ひ旁お訪ねしたのでですよ」

國依別「來客に其場を外す利巧かな。」

心から除けて見たきは襖かな。

石よりも堅き心の集ひかな。

鐘かね一つ年としは二ふたつに分わかれけり」

と口くち吟ずさみ、一同いっとうに、

國くに依より別わけ「御ご密みつ談だんの御お邪じゃ魔まになりませうから、我われ々われ兩りやう人にんは御ご遠えん慮りよ致いたします」

との意いを示しめし、目め禮れいし乍ならスタスタと歸かへつて行ゆく。門もんをくぐり出でた兩りやう人にん、互たがひに顔かほ

を見み合あせ乍なら、二ふたタリと笑わらひ、

國くに依より別わけ「高たか姫ひめも大だい分ぶんに我がが折をれたたねえ。あれなればもう氣き遣づかひあるまいね」

秋あき彦ひこ「さうでせう。黒くろ姫ひめも、高たか山やま彦ひこも餘よ程ほど變かはつて來きましたよ。何い時つもなら、あんな

石いしでも贈おくらうものなら、忽たちち低てい氣き壓あつが襲し來らいして雷らい鳴めい轟とどろきわたり、地ち異い天てん變べんの勃ぼつ

發ぱつするところですが、矢や張つぱり苦く勞らうはせんならぬものですなア」

國くに依より別わけ「ア、是これで空もく助すけさまに對たいし、相さう當たうの報ほう告こくが出で來きるワイ。神かみ様さまの御ご經けい綸りんは到たう

底てい我われ々われには分わかるものでない。それにつけても貧びん乏ば籤くじを引ひいたのは此この國くに依より別わけだ。い

つとても擲から拵かひ役やくを仰あふせ付つけられて居をるのだから、堪たまつたものぢやない」

秋あき彦ひこ「身み魂たまの因いん縁ねんで善ぜんの御ご用ようをするものと、惡あくの御ご用ようをするものとあるのだから、

御苦勞な…あなたも御役ですな」

國依別「三千世界改造の大神劇の登場役者だから、仕方がない。併し乍ら悪役ば

つかりは御免蒙りたいワ」

秋彦「末になりたら、皆一所に集まつて互に打解け合ひ、あゝ斯うであつたか、

さうだつたかと云つて、力一杯神様に使はれて、こんなことを思つて居つたのか

と、笑ひの止まらぬ仕組ださうですから、さう氣投げをしたものぢやありませんま

いで、常彦や夏彦が忠義顔して、高姫の前で味噌を摺つて居るのも、あれも何か

の御仕組の一端でせう。一寸聞くとムカツキますがなア。よく考へて見ると、ど

んな仕組がしてあるか分りませぬからなア」

國依別「そらさうだ。マア細工は流々仕上げを御覽うじと仰有るのだから、改造

鐵道の終點迄行かねば分らぬなア。ヤアもう何時の間にか、國依別館の門前まで

来て了つた」

秋彦「ハ、ハ、ハ、何處に門があるのですかい」

國依別「有つても無うても、有ると思へばある、無いと思へば無いのだ。俺の居

宅は九尺二間の豚小屋の様に、お前の眼では見えるだらうが、國依別の天空海闊なる靈眼を以て見る時は、錦の宮の八尋殿同様に廣く見えるのだからな。これ丈廣い世界も心の持様一つで、我七尺の體を置く所もない様に見えたり、又こんな小さい居宅が宇宙大に見えたりするのだから、色即是空、空即是色だ。娑婆即寂光淨土の眞諦はこんな小さい家の中に居つて、魂を研くとよく了解が出来るよ。
アハ、ハ、ハ、」

秋彦「そんなものですかいな。私の眼には如何しても八尋殿と同じ様には見えませぬワイ。裏口出た所に廁が附着いたり、小便壺が有つたり、その横に井戸が在つたり、走りに竈、何だか醜くるしい様な氣分がするぢやありませんか。一寸聞くと、あなたの御言葉は瘦我慢を言つてるやうに聞えます。何程無形的に廣いと云つても、現實が斯う矮小醜陋では、餘り大きなことも云へますまい。これから國依別さま、私になら何を言つてもよろしいが、人の前でそんなことを仰有ると、皆が取違して、國依別は負惜みの強い奴だ、減らず口を叩く奴だと却て輕蔑しますよ」

國依別「形ある寶は錆び、腐り、焼け、亡び、流れ壊るる虞がある。起きて半疊寝て一疊だ。廣い館に住んで居れば、あつたら光陰を掃除三昧に空費し、肝腎の神業の妨害になるだないか。小さいのは結構だ、何かに都合が好い。第一經濟上から云つても得策だからなア」

秋彦「あなた掃除をなさつた事があるんですか。雪隠の蟲が竈の前に這うて居るぢやありませんか」

國依別「……ここ暫し家の美醜は忘れけり 神大切に思ふ計りに……と云ふ様なものだな」

秋彦「へーエあなたも餘程高姫化しましたねえ。辨舌滔々風塵を捲く。實に擲掬役のあなたは、高姫さまに接するの度が多いから餘程の經驗が積んだと見えますワイ。都合の悪い時には、發句か川柳か、鶴式の言葉を使つて駄句り續け、腰折歌を並べ随分側から聞いてると苦さうでしたよ」

國依別「苦中樂あり、樂中苦ありだ。それも見やうによるのだよ。一葉目を蔽へば、大空一度に隠れ、一葉を掃へば、大空我目に映ずと云つて、凡て物は見方に

依るのだ、見方が大切だ

秋彦「味方計り大切だと云つて愛する譯には行きますまい。神様は敵する者を愛

せよと仰有るぢやありませんか

國依別「それだから高姫さまに對し、私は何時も適對ふのではない、【適當】の

處置を取つて居るのだ。ヤツパリ見方によつては「味方」に見えるだらう

秋彦「何程鼻眞目に見ても、あなたが高姫さまに對して爲さることは、餘り同情

のある遣り方とは見えませぬぜ。何時も高姫さまの鼻を「めしやげ」たり、手古

摺らしては痛快がつてるぢやありませんか

國依別「……心なき人は何とも言はば言へ世をも怨みじ人も恨みじ……

燕雀何ぞ鴻鵠の志を知らんやだ。紫蘭滿路に咲く、芳香何ぞ沒曉漢の知る所なら

んやだ。アハ、ハ、ハ、ハ

(大正一一・七・二二 舊閏五・二八 松村眞澄録)

第二章 清潔法〔七八四〕

西に圓山東に小雲

山と川とに挾まれし

竝木の松の片傍り

檜、松、杉、柏木の

丈餘にあまる大木は

天を封じて立ち竝ぶ

その木蔭に瀟洒たる

丸木柱に笹の屋根

青、白、赤の庭石も

どことは無しに配置よく

敷き竝べたる庭の奥

幽かに聞ゆる話聲

聞くともなしに友彦は

思はず門をかい潜り

何かの綱に曳かれしごと

何時の間にやら門の口

此處は高姫御館

奥には幽かな人の聲

何處の客かは知らねども

何は兔もあれ戸を叩き

主人の様子を窺はん

さうぢやさうぢやと獨言

忽ち表戸打ち叩き

□ 教の道の友彦が

久方振にお館へ

歸り來ませる高姫に

敬意を表して御挨拶

申さんものと取る物も

取らずに尋ね來ましたぞ

お構ひなくば表戸を

早く開けさせ給へかし

呼べば中より安公が

□ 折角乍ら友彦よ

お前は意地久根悪い故

高姫さまの氣に合はぬ

今も今とて國さまや

秋彦さまがやつて來て

何ぢや彼んぢやと駄句りつつ

形勢不穩と見濟まして

尻を繋げて去にました

お前も立派な男なら

些とは考へなされませ

奥の一間に高姫や

高山彦や黒姫が

夏彦、常彦前に置き

秘密の話をして御座る

秘密は何處迄秘密ぢやと

高姫さまの常套語

今日は風向悪い故

去んだがお前の得だらう

男を下げて歸るより 貞操深きテールスの

姫の命と親密に 尊き神の御言葉を

調悟つた其上で 喧譁の材料を蓄へて

此場を出直し堂々と 捲土重來するがよい

七尺男が高姫や 黒姫さまに凹まされ

泡を吹くのも見ともない お前は私の好きな人

お鼻の赤い愛嬌者 木花姫の再來と

勝公さまが云うて居た 一度に開く蓮花

此處は聖地の蓮華臺 それの麓の神館

嘘か誠か知らねども 系統の身魂に憑られし

日の出神が御座るぞや 龍宮海の乙姫も

黒姫さまを機關とし 天狗の身魂も引き添うて

高山彦の夫婦連れ 三人世の元結構と

濟ました顔で御座るのに 赤鼻天狗がやつて來て

鼻はなと鼻はなとが衝突しつうつうし

又またもや悶着もんちやく起りなば

安公やすこうさまも勝公かつこうも

何どうして傍そばに居をられよか

地震ぢしん雷火かみなりひの雨あめも

さまで恐れぬ豪傑かうけつの

安公やすこうさまも高姫たかひめの

その鼻息はないきにや耐たまらない

男をとこ一匹いっぴき助たすけると

思おもうて歸かへつて下くださんせ

肝腎かんじん要かなめの性念しやうねん場

祕密ひみつ話わなしの最中さいちゆうに

お前まへが來きたと聞きいたなら

忽たちまち起おこる暴風雨ばうふうう

柱はしらは倒たふれ屋根やね剥めくれ

險難けんなん至極しごくの修羅場しゆらば裏

あゝ惟かむ神な々々ながらかむながら

御靈みたま幸さちはへましまして

白しろい玉たまをば預あつかつた

ジヤンナの郷さとの救世主きうせいしゆ

此處こゝでは詮つまらぬ宣傳使せんでんし

神かみの上うへには上うへがある

口くちが悪わるいと腹はら立たてて

怒おこつて呉くれなよ高姫たかひめが

今日けふも今日けふとて云いうて居あた

俺おれが云いうので無ない程ほどに

日ひの出神でのかみの生宮いきみやの

御靈みたまが憑うつつて説とき明あかす

斯う云ふ中にも高姫の
 地異天變は目のあたり
 友彦フフンと鼻で息
 四股の雄健び踏み健び
 バラモン教の友彦と
 高姫位が何怖い
 怖くて此世に居られよか
 力の限り表戸を
 千騎一騎の此場合
 何うして門番勤まるか
 お小言聞くのが耐らない
 物の道理が分らぬか
 又出直して来てお呉れ
 袂つけて門口へ
 私が出迎へ致します
 お耳に入れば大變だ
 早く歸れ」と促せば
 魂ぬけ婆さまの高姫が
 何程勢強くとも
 世に謳はれた俺だもの
 女の一人や十人が
 腰抜け野郎」と云ひながら
 押し分け入らんとする所
 友彦如きに這入られて
 後でゴテゴテ高姫の
 友彦お前は夫程に
 荒浪風いだ明朝
 其時こそは喜んで

頼む頼むと泣き聲を 放てば友彦立ち止まり

平地に浪を起すよな 悪戯しても濟まない

心を柔げ聲を變へ 〆お前の云ふのも尤もだ

そんなら今日は歸ります 高姫さまや黒姫に

友彦さまがやつて来て 祕密の話があるさうぢや

お邪魔をしてはならないと 賢いお方の事なれば

先見つけて我館 いそいそ歸つて往きました

萬一明日來たなれば 高姫さまも黒姫も

高山彦も安公も 裱姿でお出迎ひ

必ず粗相あるまいぞ 呉れ呉れ申て置く程に

澤山さうに友彦と お前は思つて居るだらう

黄金花咲く龍宮の 一つ島にて名も高き

ネルソン山の峰續き ジヤンナの郷の救世主

小野の小町か衣通か ネルソンパティか楊貴妃か

テールス姫かといふやうな
古今無雙のナイスをば

女房に持った果報者
必ず必ずこの言葉

忘れちやならぬぞ高姫に
頭を低ふ尻高く

犬蹲踞に身構へし
申傳へて呉れよかし

高姫さまも友彦の
光來ありしと聞くなれば

忽ち顔色青くして
待ち兼ね山の友彦が

訪ねて來たのを素氣なくも
主人の我に無斷にて

歸すと云ふ事あるものか
氣の利いた割に間の脱けた

安公の野郎と頭から
雷さまが落ちるだろ

夫を思へば安公が
お氣の毒にて耐らない

減らず口ぢやと思ふなよ
武士の言葉に二言ない

研き悟りし天眼通
鏡に映したその如く

一切萬事知れて居る
あゝ惟神々々

御靈幸倍坐ませよ
青垣山は裂けるとも

和知の流は涸れるとも 友彦さまの云つた事

一分一厘違はない 大地を狙つて打ち下ろす

此棍棒は外れても 我一言は外れない

頭が外れて泡吹いて 吠面かわいて梟鳥

夜食に外れた時のよな 妙な面つきせぬやうに

親切心で友彦が 一寸お前に氣をつける

教の道の友達の 好誼ぢや程に安公よ

決して仇に聞くでない 天が下には敵も無く

一人も悪は無い程に 心の隔ての柴垣を

早く取り除け世の中の 人を残らず仁愛の

ミロクの眼で見るとならば 尊き神の御子ばかり

高姫さまに此事を 重ねて云うて置くがよい

別れに望んで友彦が 一寸憎まれ口叩く

あゝ惟神々々 御靈幸はひましませよ

と歌ひ乍ら夕焼の空を打ち仰ぎつつ、いそいそと我家をさして歸り行く。

友彦の歸り行く後姿の見えぬ迄見送つた安公は、

安公「ア、とんでも無い奴がやつて來やがつて、いらぬ氣を揉ましやがつた。褒めて去なさうと思へば調子に乗つて這入らうとする。仕方が無いから悪く云つて歸さうと思へば、無理やりに戸を押し開けて這入らうとする。困つた奴だ。あんな男を此の結構な日の出神のお館へ入れやうものなら、又高姫さまが四足身魂が來たから、此邊が汚れたから、鹽をふれ、水を撒け、其邊を掃けと矢釜しく仰有るに違ひない。此廣い庭前を俺達二人が何程鯨なつても、お氣に入るやうな事は出來はしない。マアマア高姫さまに分らいで掃除だけは助かつた。友彦の奴減らず口を叩きやがつて、袿姿でお出迎ひせよと馬鹿にしやがる。併し俺が一寸其場逃れにお仕着せ言葉を使つたのが誤りだ。……何、變説改論の世の中、日進月歩だ。今日の哲學者の以つて眞理となす所、必ずしも明日は眞理でない。又夫以上の大眞理が発見せられたら、今日の眞理は三文の價値も無く社會から葬られて仕舞ふのだ。エ、そんな事考へて取越苦勞をするのは馬鹿らしい。刹那心を樂し

むのだ。あゝ今と云ふ此刹那の心配と云うたら有つたものでない。併しまア無事に歸つて呉れたので、俺も今晚は足を長うして寝られるワイ」
と口の中で呟いて居たが、いつしか聲高になり、高姫が小便に往つた歸りがけ、フト耳に入り、

高姫「これこれ安公さま、お前今大きな聲で何を云つて居たの」

安公「ハイ、眼下に瞳を放てば涼々たる小雲の清流老松の枝を浸し、清鮮澆刺た

る魚は梢に躍る。實に天下の絶景だ。それにつけても此お庭先、勝公と安公さま

兩人の丹精により、實に清浄なものだ。實に一點の塵もなく汚れも無い。まるで

御主人の身魂に好く似た綺麗な庭先だと、感歎して居た所で御座いますワイ」

高姫「友彦が何とか、……云うて居たぢやないか」

安公「へー、……へー、へー、左様で御座います。舳解き放ち【臚】解き放ち、

あの水面を漕ぎ渡る船の美しさ。兔も角も何【とも】かん【とも】云はれぬ、結

構な眺めだと云つて居ましたのですよ」

高姫「これ安公さま、お前は掃除するのが嫌ひだらう」

安公「ハイ、決して決して、身魂の洗濯、心の掃除するため、此聖地へ修業に参り、貴女のお館の掃除番をさして頂き、日々身魂を結構に研かして貰うて居ます」
高姫「何うも糞彦の匂ひがする。廁の穴から抜け出た男の友彦が來たのぢやないかな」

安公「何とまア貴女の鼻は能う利きますね。恰でワンワンさまのやうですわ」

高姫「私の云ふ事なれば聞いて下さるかな」

安公「ハイハイ如何なる事でも聞きます。假令貴女が死ねと仰有つても背かず

に聞きます」

高姫「耳だけ聞くのぢやないよ。聞くと云ふのは行ひをする事ぢや。サア是から屋敷中隅から隅まで箒で掃き浄め、鹽をふり、水を一面に打つて下さい。さうして此雨戸にも何うやら四足の手で押したやうな臭がする、此戸の薄くなる程砂で磨いて擦つて置きなさい」

安公「それや……些と……ぢや御座いませぬか」

高姫「些とで不足なら座敷から廁の中迄掃除をさして上げやう。人間は苦勞せな

くは神様の事は分りませぬぞ工

安公「チー……、チツト……、ム、ム、ム、ですな」

高姫「そんなら「とつと」と今日限り歸つて下さい」

安公「勝公さまと二人で掃除をさして頂くのでせうなア」

高姫「勝公さまは炊事萬端、座敷の用もあるし、一息の間も手が抜けませぬ。工、

何だか汚い臭がする。是から夜が明けても構はぬ、掃除をするのだよ」

安公「ア、掃除ですか」

と力無げに頸垂れる。

高姫「安公さま、間違無からうなア」

安公「へエー……」

と長返辭し乍ら水桶を持つて井戸端に、のそりのそりと進み行く。高姫は細い廊

下を傳つて奥の間に姿を隠した。

安公はブツブツ云ひ乍ら、十三夜の月の光を幸に、さしもに廣き庭の面に、深

い井戸から撥釣瓶に汲み上げては手桶に移し、撒布しながら、小言を云つて居る。

安公やすこう「ア、大變たいへんな事ことが起おこつて來きた。天變てんべん地異ちいよりも何なによりも俺おれに取とつては大問題だいもんだいだ。大國治立尊樣おほくにほるたちのみことさまが三千世界さんぜんせかいをお立替たてかへ遊あそばし、綺麗薩張水晶きれいさつぱりすゐしやうの世よになさる以上いじやうの大神業だいしんげふだ。併しかし乍ながら折角せつかくちやんと掃除さうぢを濟すまし、高姫衛生委員長たかひめえいせいゐんちやうの試験しけんにやつと合格がふかくして、やれやれと息いきを入いれる時分じぶんに、又またもや友彦ともひこが明日あすになるとやつて來きよる。さうすりや又また同じ事ことを繰返くりかへさねばなるまい。高姫たかひめも高姫たかひめじゃ、友彦ともひこも友彦ともひこぢや、鷹たか【とも】鳶とんび【とも】、鬼おに【とも】、蛇じや【とも】、馬鹿ばか【とも】、何なん【とも】譯わけの分わからぬ代者しろものの寄合よりあひだ。さうぢやと云いつて此儘掃除このままさうぢをせずおに置おく譯わけにも往ゆかず、是非ぜひ【とも】皆みなやらねばならぬ。旭あさひは照てる【とも】曇くもる【とも】、月つきは盈みつ【とも】虧かくる【とも】、假令たとへだいち大地だいぢは沈しづむ【とも】、【友とも彦ひこの命いのちのある限かぎり、やつて來こぬ【とも】分わからない。困こまつたものだ。同おなじ神かみさまの道みちに居ゐながら、何故なぜ犬いぬと猿さるのやうに仲なかが悪わるいのだらう。【共とも】に手てを引き合あうて往ゆかねばならぬ神かみのお道みち、【とも】角かくも困こまつたものだなア、エ、燒糞やけくそだツ。

☐ 今日けふは九月くぐわつの十三夜じふさんや

俺おれの副守ふくしゆよ能よつく聞きけ

必ずかなら忘れわすちやならないぞ　　こんなくる苦しい目めに遭あふも

鼻はな赤男あかとこの友彦ともひこが　　来きやがつたばかりに肉體にくたいも

お前まへも共ともに苦勞くらうする　　苦勞くらうするのがイヤなれば

俺おれの體からだを一寸ちよつと放はなれ　　鼻はな赤天狗あかてんぐに憑依ひょういして

又またしても友彦ともひこが来こぬやうに　　頭あたまを痛いため足痛あしいため

鐵條網てつどうまつを張はつて呉くれ　　毎まい日にち日にち來こられては

俺おれの肉體からだがつづかない　　あゝかむながらかむながら惟神かみ々々

叶かなはん叶かなはん耐たまらない　　叶かなはん時ときの神かみ頼だのみ

同おなじ主人あるじを持もつならば　　言こと依より別わけ神かみさまや

空助もくすけさまのやうな人ひと　　神かみさま持もたして下くだしやんせ

鼻高はなたか姫ひめの頑固ぐわんこ者もの　　偏狭へんけふな心こころを出だしよつて

氣きに喰くはぬ奴やつが來きたと云いひ　　汚よごれて臭くさいとは何なんの事こと

我わが儘まま氣き儘ままも程ほどがある　　人ひとを使つかはうと思おもつたら

一いち度は使つかはれ見みるがよい　　高たか姫ひめさまのやうな人ひと

彌いよいよ嫌いやになつて來きた
是これから此この家やを夜よ拔ぬけして

國くに依より別わけか秋あき彦ひこの
館やかたを指さして逃にげ込こまうか

宇うづ都やま山ま郷じつの破あ屋はらの
松まつ鷹たか彦ひこの眞ま似ねをした

俺おれは矢や張はり國くにさまの
親おやの御み靈たまか知しれないぞ

エ、エ、思おもへば高たか姫ひめが
小こ癩やくに觸さはつて耐たまらない

小こ癩やくに觸さはつて耐たまらない
小こ杓やくを握にぎつた此この手てさへ

びりびり震ふるひ出だして來きた
エ、邪じ魔まくさい邪じ魔まくさい

云いふより早はやく水みづ桶けを
頭づじやう上うに高たかく差さし上あげて

庭にはに竝ならんだ捨すて石いしを
睨にらんでどつと打うちつける

桶をけは忽たちまちめきめきと
木こつ端ぱ微み塵じんに潰くわいめつ滅めつし

水みづは一いち度どに飛とび散ちつて
高たか姫ひめ黒くろ姫ひめ其その外ほかの

居ゐ間まの障しやう子じに打ぶつ突つかる
高たか姫ひめ驚おどろき外そと面もをば

眺ながめる途と端たんに安やす公こうは
お前まへは高たか姫ひめ黒くろ姫ひめか

長ながらくお世せ話わになりまし
お前まへのやうな【えぐい】人ひと

誰がへいへいハイハイと

粗末な粗末な椀給で

御用聞く奴がありませうか

一先づ御免候へ」と

後を振り向き振り向いて

月の光を浴びながら

黍畠深く隠れける。

高姫「エ、仕方のないものだ。とうとう彼奴は國依別の惡靈に憑かれて仕舞つた

な。是から國依別の館に行くと、獨言を云うて居た。四つ足身魂が出て來ると、

碌な事は一つも出來はしない。……なア黒姫さま、確りしないと貴方も何時惡神

に憑依せられるか分りませぬぜ」

黒姫「オホ、、、」

斯かる所へ勝公は、

勝公「もしもし御一同さま、大變に御飯が遅れて濟みませぬ。どうぞ此窓を開け

て、お月さまを見乍ら、悠くりとお食り下さいませ」

高姫「あゝ夫は御苦勞だつた。お前も早う御飯をお食り、安公のやうに飛び出さ

ぬやうにして下されや」

勝公「へエ、もう彼奴は飛び出しましたかな。ヤ、仕舞つた。先立たれたか、殘

念だ」

高姫「これこれ勝公さま、お前は何を云ふのだ。高姫館が嫌になつたので、抜け

出す積りで居たのだらう」

勝公「何だか聖地の方々に對しても肩身が狭いやうな氣が致しましてなア。立寄

れば大木の蔭とやら、何程此お館に大木が澤山あつても、箸と親分は丈夫なのが

よいとか申しましてな。實は一寸思案をして居りますので御座いますワイ」

高姫「宜敷い、旗色のよい方につくのが當世だ。體主靈從の空助さまにでも引き

上げて貰ひなさい」

勝公「今日から此處を出されては實は困ります。何と云つても、の留守をし

て居つた奴だからと云つて、誰も彼も排斥して使つて呉れませぬから、止むを得

ず貴方のお宅にお世話になつて居ました。よい口があれば誰がこんな所へ半時で

も居りませうか。私の口が出来る迄一寸腰かけに置いて下さい」

高姫「エ、汚らはしい。そんな心の人はトツトと去んで下さい、反吐が出る」

勝公「神様は反吐の出るやうな汚い者を集めて洗濯をなさるのぢやありませんか。

清らかな者計りなら、別に教を立てる必要はありません。高姫さまもよい洗濯

の材料が出来たと思つて、もう少し私の身魂を洗濯して下さいな」

高姫「もう洗濯屋は廃業しました。洗濯がして欲しければ一本木迄いつて来な

い。サアサアトツトと歸つた歸つた……とは云ふものの、明日から誰が飯を炊

て呉れるだらう。チヨツ、いまいますが、そんなら暫く置いて上げよう」

勝公「何だか安公が出やがつてから俺も出たくなつた。何ぼう置いてやると云

ても居る氣もせず、あゝ仕方がないなア」

と小さい聲に呟きながら、納戸の方に姿を隠した。

(大正一一・七・二二 舊閨五・二八 加藤明子録)

第三章 魚水心(七八五)

高姫、黒姫、高山彦、夏彦、常彦の五人は、四方山の話に耽り乍ら晚餐を済ませ、窓を開けて月を拜し乍ら、ヒソヒソ話に耽つてゐる。

高姫「夏彦、常彦さま、お前さまは言依別の教主に隨いて、五色の御玉を御迎へに秋山彦の館まで往つたぢやありませんか」

夏彦「ハイ行きました。それはそれは御立派な事で御座いましたよ。なんでも初

稚姫、玉能姫、玉治別、久助、お民の五人さまが、龍宮の一つ島の諏訪の湖の龍

の宮居とかで、乙姫さまから五色の結構な玉を御頂きなされ、それを自分の手柄

にするのも勿體ないと云ふ御精神から、初稚姫さまは紫の玉を梅子姫様に御渡し

遊ばされ、それに倣うて四人の御方は黄龍姫、蜈蚣姫、友彦、テールス姫にその

玉を無言の儘渡されたといふ事です。人間も、アー云ふ工合に私を捨て譲り合つ

て行けば、何事も圓滿に行くのですがなア」

高姫「何ツ、黄龍姫や蜈蚣姫、彼の友彦にテールス姫、彼んな輩がそんな御用を

しましたかい。何程人物拂底だと云つても、あんまり酷いぢやありませんか。さ

うしてその玉は今聖地に納まつてあるだらうな。龍宮の乙姫さまの肉の宮、黒姫

さまが此處に御座るのだから、謂はば黒姫さまが二三年も龍宮の島に渡つて御仕組をして置かれたのだ。それも此の高姫が神様の御都合で、黒姫さまを聖地から追出したのが矢張御用になつて居るのだ。そんな事の分つた奴は一人も有りませぬ。まい。何を云つても空助のやうな没分曉漢が總務さまだからね」

夏彦「それは誰もよく存じて居ります。これは全く日の出神さまや、龍宮の乙姫様の御蔭で授かつたのだと云つて居ますで」

高姫「それは定つて居るぢやないか。併し日の出神の肉の宮と、龍宮の乙姫さまの肉の宮は、何方ぢやと云ふ事が分つて居らねば駄目ですよ」

常彦「それは云はいつでも定つてゐますがな。系統の肉體に憑らいで何處へ憑らしますませう。乙姫さまだつて、依然日の出神さまの生宮に引添うて御座る御方に定つとるぢやありませんか。それで言依別神様が信者一同に玉を開けて一度拜ませ度的のだけれど、肝腎の系統の生宮さまが御歸りになる迄、吾々は開ける事は出来ないと云つて、御自分で何處かへ御納めになりました。貴方が些とも言依別さまの御館へ顔出しをなさらぬものだから、待つてゐられるのですよ」

高姫「言依別も大分此頃は改心が出来たと見えますワイ。此の肉體が日の出神の生宮ぢやと云ふ事が徐々と氣が付いたらしい。なア龍宮の乙姫さま、それに就いても、些と分らぬぢやありませんか。吾々が訪ねに行かずとも、それが分つた以上は日の出神や龍宮の乙姫様へ御禮に来ねばならない筈だ。本末顛倒も實に甚しい」

夏彦「決して決して、言依別様はそんな御考へは些とも無いのですが、貴方は何時も言依別の奴灰殻だとか、四足身魂だとか仰有るものだから言依別様は、貴方の御宅を御訪ねなされ度いのは胸一杯になつて居らつしやるのですが、人手の少いの、又々秋季大清潔法をなさらんならぬ様な事が起ると、御氣の毒だと云つて控へて御座るのですよ」

高姫「そんな御心配は要りませぬわ。日の出神や龍宮の乙姫の生宮が分る丈の身魂なら、最早四足身魂は退散して居るに違ひないから、高姫、黒姫が待ちかねてゐるから一遍御出でなさいと云つて下さい。いろいろと言うて聞かしたい事もある。何程賢い教主だと云つても年の若い経験の無い社會大學を卒業せない人だか

ら、言はねばならぬ事が山程あるのだけれど、又煩さがられると申うて今迄云はずに居つたのだよ。それが本當なら言依別も見上げたものぢや。オツホ、〆、〆」

夏彦「折角立派な御玉が納まつて皆の信者が拜觀したいと云つて待つて居ります。何卒その玉を貴女の御手で開いて貰はなければ誰も開く事が出来ぬのですから、何卒早く御機嫌を直して錦の宮へ御参詣の上、言依別様と御相談して下さいな」

高姫「ソリヤ道が違ひませう。言依別は教主だと云つても、それは人間が定めたもの、誠生粹の日の出神様や龍宮の乙姫様の御鎮まり遊ばす肉の宮へ、一度の面會にも出て來ぬと云ふ失禮な事がありますかい」

夏彦は言ひ憎さうに一寸頭へ手を上げて、

夏彦「あなたの仰有る事も一應は御尤ものやうに考へますが、そこはさう四角張らずに、言依別様は言依別様として、教主と云ふ名に對し貴方から御訪問なさるが至當だと思ひます。それも亦直接に御會ひになつてはいけませぬ。何程御嫌ひになつても總務の空助さまの手を経て御面會をなさいませ。それが至當だと此の夏彦は御神徳を頂いてゐます」

高姫「あんな空助や國依別のやうな行儀知らずに、阿呆らしくて面會が出来ぬぢやありませんか。二つ目には四足かなんぞのやうにゴロンと横になり、不作法な生宮の前でも寝て話をするといふ代物だから、國依別までが同じ様に猿の人間に似をしよつて、好いかと思つてグレンと仰向けになり應對をして居るから、この高姫が「些と心得なさい、失禮ぢや無いか」とたしなめてやれば、靈界物語でさへも仰向けになつて、足をピンピン上げ以て結構な神界の因縁を説かれるぢやないかと、屁理屈をこねる仕方の無い奴だ。そんな奴を又言依別さまも人間が好いものだから、悦んで使つてゐると云ふ御目出度さ。第一これからが退けて了はなぐちや、三五教も何時になつても駄目ですよ」

夏彦「あなたの御言葉は實に御尤もです。私も時々空助さまが仰向けになつて、私達にいろいろの事を御指圖をなさるので時々ムツとしてその譯を詰問すると空助さまの言草が面白い。「今のやうな百鬼晝行の世の中の人間は、みんな鬼や蛇や悪魔が人間の眞似をして立つて歩いて居るのだ。さうして蟹が行く横さの道計り平氣でやつてゐるから耐らない。今日の世の中を革正しようと思へば、何うし

ても人のようせぬ事を致さねば立替、立直しは出来ない。今日の社會を見なさい、その潮流は滔々として横へ横へと流れてゐるぢやないか。それが所謂天地自然の道だ。川の水でも潮水でも横に流れて居るべきものだ。數多の人命を乗せて走る汽車も矢張横に長うなつてゐる。レールでさへもさうぢやないか。もしもレールがチヨコンと坐つたり、立てつて見なされ、汽車は忽ち轉覆するぢやないか。横に流れて居る河川は洋々として少しも淹滞なく、又愛らしい雛を育てる牝鳥は翼の中へ大切に抱えて巢の中へ寝てゐます。卵を孵すのだつて寝て居らねば孵りはない。ノアの方舟だつて矢張り水面を横に進んで流れてゐる、水平社の運動でも……」と仰有いましたよ」

高姫「そんな屁理屈がありますか。この庭先の松や篠竹を見なさい。皆地から眞直に上へ向つて立つてゐるぢやありませんか。横になつてゐる奴は幹が腐つて風に吹き倒された木許りぢや。又本打切り末打斷ちて皮を剥かれた枯木の材木ばかりだ。横になつてゐる奴に碌なものがありますか。さうだから空助では駄目だと云ふのですよ」

と力をこめて握拳で鬨を思はずポンと叩き、「アイタ、」と云はんとしたが、
「アイ……」と云つた限り顔を顰めて左の手でコツソリと撫でてゐるその氣の毒
さ。

常彦「なんと理屈は何方へでもつくものですな。火中水あり、水中火あり、火は
水の力を借つて燃え上り、水は火の力に依つて動かされる道理で、何方から聞い
ても理屈は合ひますワイ。それで經が變性男子、緯が變性女子と神様が仰有るの
でせう。經絲計りでは所詮駄目で、矢張り緯絲が無ければ錦の機は織る事は出來
ませぬ」

高姫「その緯がいかぬのですよ。緯は梭が落ちたり、絲が切れたり致すから、そ
れで變性女子の行方は駄目だと云ふのだよ……」

機の緯織る身魂こそ苦しけれ 一つ通せば一つ打たれつ

なんて弱音を吹いて居るやうな言依別に何が出來ますかいな。イヤイヤ矢張言依
別は出來ぬとも限らぬ。此頃は十分に改心をしかけたから、變性男子の經絲に對
して、私がサトクとなつて立派な機を織つて見せませう。緯絲になる緯役さへサ

トクの言ふ通り従いてくれば好いのだ。……ナア黒姫さま、さうぢやありませんか」

黒姫 「左様々々、貴方の仰有る通り一分一厘毛筋の横巾程も違ひはありません。

何卒一時も早う空助さまが改心さへしてくるれば、何にも云ふ事はありませんが
なア」

常彦 「空助さまの方では何卒一日も早く高姫さまや黒姫が改心さへしてくれば

何も云ふ事はないがなア……と首を傾げて大變に考へてみましたよ。國依別だつて

あなたの敵對役に實際の所はこしらへてあるのですよ。此間もお肴だと云つて石

を持つて來たでせう。それは大きな聲では云へぬが全く言依別様の御指圖ですよ」

高姫 「ナニ、言依別が……あんまりぢやないか」

常彦 「言依別様は深い思召しがあつて國依別に――いふ事をさせて、お前さまが

怒るか怒らないか、怒るやうでは玉の御用をさす時機がまだ來て居らぬのだし、

それを耐へ忍ぶやうな高姫さまなら、モウ大丈夫だからと云つて氣を御引きなさ

つたのですよ。お前さまは矢張腹が立ちませうね」

高姫「エー腹が立つといふやうな、そんな小つぽけな精神で、大和魂と云はれま
すかい。大海は塵を選まず、百川の濁流を呑んで濁らずと云ふ高姫の態度ですか
らなア。天の高くして諸鳥の飛翔するに任するが如く、海の闊く深くして魚鱉の
躍るに任すが如しといふ廣大無邊の大精神ですから……ヘン……あんまり見損ひ
をして貰ひますまいかい。妾を試すなんて猪口才過ぎる。矢張自分の心が小さい
からだよ。自分の心の尺度を以て、生神様の大精神を測量しようと思ふのが、テ
ンから間違つてゐる。併し乍らそこまで言依別もなつたか、ホンに可愛いものだ。
……そんなら常彦さま、お前、言依別さまに逢つて、高姫さまは彼の位な事は、
何處を風が吹くらんといふやうな態度で、餘裕綽々、泰然自若として笑つて御座
つたと、實地正眞らしく……オツトドツコイ……實地正眞の立派な態度を、よく
腹へシメこんで置いて申上げるのだよ」

常彦「兔も角今日の有りの儘を申上げたら好いのですか。嘘は一寸も云はれぬ御
道ですからなア」

高姫「エー矢張モウ云うて下さるな。妾が直接に御目にかかつてその寛大振を見

せて来るから、今日の事は何にも云ひつてはなりませんぞ」

常彦「魚心あれば水心あり、打てば響くとやら……、ナア夏彦、さうぢやないか。

チツトはコンミツションとか、ボーナスとか有りさうなものだなア」

黒姫「オホ、何と現金なお方だこと」

常彦「何分此肉體は融通の利く人間ですが、三五教の誠の教を守護神の奴、腹中

で、すつかりと聞き居つたものだから、相手の通り云ひたがつて仕様がありません

ぬ。この肉體は何も云ひませぬ。副守の奴に何か氣をつけてやつて下さい。袂が

重ければ重い程都合が宜しいで。少々の重味位乗せた所で、中々の強い奴ですか

らなア」

高姫「ママア成功の後、御注文通りボーナス（棒茄子）なつと、ボーウリ（棒

瓜）なつと、干瓢なつと上げませうかい」

常彦「そいつはなりませんぞ。何事も前錢を出して注文して置かねば、何程變換

されても仕方がありますまい。證據金とか手付金とか先へ頂いて公證役場へ行つ

て、公正證書でも取つて置きますせうかな。アハ、ハ、ハ、」

高姫「コレ常彦さま、冗談もよい加減にしなさい。……千騎一騎の此場合ぢやありませんか？」

常彦「ソラさうでせう。あなたにとつては千騎一騎、吾々は及ばず乍ら麻邇寶珠の御迎へを御勤め申し、一寸休養を賜はつて居るところですから、極めて悠々閑々たるものです。兔も角他の苦勞で徳をとらうと云ふのは、却て骨が折れるものです。すワイ。併しこれは世間の話しですよ。お前さまは氣が早いから直に自分の事に取つて怒る癖があるから劍呑だ」

高姫「何を仰有る。それは大きな聲で云はれぬが、言依別命の事でせうがなア」

常彦「あんたはさう思つてますか。それで安心だ……。なア夏彦さま」

夏彦「オホ、イヤモウ何うも感心いたしました」

斯かる處へ夜の閑寂を破つて宣傳歌の聲が聞えて來た。

「神が表に現はれて

善と惡とを立別ける

此世を造りし神直日

心も廣き大直日

唯何事も人の世は

直日に見直せ聞直せ

身の過ちは宣り直せ

頑迷不靈の高姫も

執着深き黒姫も

天と地との御水火より

現はれませる神の御子

神素盞鳴大神の

仁慈無限の御心を

酌みとりまして言依別の

瑞の御魂は八尋殿

麻邇の御珠を奥深く

納め給ひて高姫や

黒姫さまの歸るまで

拜觀する事ならないと

言葉厳しく宣り傳へ

高姫さまの一行が

聖地を指して歸り來る

その吉日を待ち玉ふ

思へば深し神の恩

仰げば高し御恵み

露だも知らぬ高姫が

聖地に歸り來乍らも

錦の宮の大前に

未だ詣でし状も無し

玉照彦や玉照姫の

神の柱は言ふも更

神素盞鳴大神の

珍うづの御子おんことあれませる
五十子いそこの姫ひめや梅子うめこ姫ひめ

わけて尊たふとき英子ひでこ姫ひめ
言依ことより別のわけ教主けうしゆ等にら

未いまだ一度いちども挨拶あいさつの
便たよりもきかぬうたてさよ

あゝ惟かむながら神かむながら々々かむながら
御靈みたま幸倍さちはへましまして

執しふちやくしん着心かたいぢと片意かたいぢ地に
とりからまれし兩人りやうにんや

高たか山彦やまひこの身魂みたまをば
神かみの御稜威みいづにさらさらと

清きよめ玉たまひて片時かたときも
疾とく速すみけく大前おほまへに

詣まうで来きたりて神業かむわざに
参さん加かなさしめ玉たまへかし

如い何かに高たか姫ひめ黒くろ姫ひめが
頑強ぐわんきやう不ふ靈れいと云いひ乍なら

神かみの御裔みすえの方かた々に
無禮ぶれいの罪つみを重かさぬるは

實じつに悲かなしき事ことぞかし
教をしへの道みちの友彦ともひこを

一いち度ど遣つかはし見みたれども
金門かなどをまもる安公やすこうに

追おひ退やらはれて減へらず口ぐち
叩たたいて館やかたへ立歸たちかへり

面つらを膨ふくらせブツブツと
小言こごとの限かぎり列ならべ立たて

とりつく島も【なき】別れ われは龜彦宣傳使

英子の姫の御言もて 高姫黒姫兩人を

今や迎へに來りけり 月は御空に皎々と

輝き渡り萬有に 恵みの露を賜へども

心の空の村雲に 十重に二十重に包まれて

黒白も分かぬ胸の闇 晴らし玉へよ天津神

國津神達八百萬 三五教を守ります

皇大神の御前に 萬代祝ふ龜彦が

謹み敬ひ祈ぎ奉る あゝ惟神々々

御靈幸倍ましましてよ

と歌ひつつ高姫館を指して次第々々に近づき來る。

龜彦は門の開きあるを幸ひ、つかつかと進み來り、

龜彦「モシモシ夜中にお邪魔を致しまするが、私は龜彦の宣傳使で御座りまする。

江州の竹生島より英子姫様と同道にて聖地へ参つて居ります。承はりますれば高姫様、黒姫様、高山彦と共に御歸り遊ばしたとのこと、御機嫌をお伺ひに参りました。お差支なくばお通し下さいませ」

高姫「ヤア貴方は龜彦さまか。よくマア竹生島に於て國依別さまと東西相應じ、御親切に何から何まで御注意下さいまして有難う御座います。私も一度英子姫様始め、貴方達にもお禮のためにお伺ひ致したいと思つて居りましたが、何とは無しに貧乏暇なしで御無禮を致して居ります。併し乍ら今日は來客がありますので、失禮乍らお歸り下さいませ。只今の宣傳歌を拜聴いたしました、随分立派なお聲でお節もお上手になられました。丁度竹生島の社の後に現はれ玉うた女神様の

お聲その儘でしたよ。オホ、

龜彦「御差支とあれば是非が御座いませぬ。左様ならば、お暇致しませう」

と云ひつつ月の光を浴び乍ら足早に歸り行く。後見送つて高姫は、

高姫「オホ、

山彦さま、あの龜彦が恐相な歸り様、計略の裏をかがれて、コソコソと鼠のやう

になつて逃げたぢやありませんか

黒姫くろひめ 『ウフ、、、』

高山彦たかやまひこ 『アハ、、、』

(大正一一・七・二二 舊閨五・二八 外山豊二録)

第二篇 千差萬別せんさばんべつ

第四章 教主殿けうしゆでん (七八六)

松まつの老木らうぼく、梅林うめばやし

楓かへでの紅葉もみぢ、百日紅さるすべり

木斛、木犀、椏、多羅樹や 緑紅こきまぜて

幽邃閑雅の神苑地 魚鱗の波を湛へたる

金龍池に影映す 言靈閣は雲表に

聳りて下界を睥睨し 神威は四方に赫々と

轟き亘る三五の 神の教の教主殿

八咫の廣間に寄り集ふ 梅子の姫を始めとし

神の大道に朝夕に いそしみ仕ふる五十子姫

闇をはらして英子姫 萬代壽ぐ龜彦や

五十鈴の瀧の音彦や 心も光る玉能姫

玉治別を始めとし 初稚姫や空助は

言依別と諸共に 奥の廣間に座を占めて

玉依姫の賜ひたる 麻邇の寶珠の處置につき

互に協議を凝らし居る 時しもあれや玄關に

現はれ来る三人連れ 御免々々と訪へば

たまはるわけ
玉治別は出迎へ
一目見るより慇懃に

ゑがほ
笑顔を作り腰屈め
高姫さまか黒姫か

たかやまひこ
高山彦の神司
ようこそお入來下さつた

ことよりわけ
言依別の神司
其他數多のお歴々

けさ
今朝からひどう御待兼ね
サアサア御通りなさいませ

たかひめかる
高姫軽く會釋して
それは皆さまお待兼ね

おく
奥へ案内願ひませう
黒姫さまや高山彦の

かみ
神の司のお二方
サアサア共に参りませう

くろひめ
黒姫夫婦は黙々と
ものをも言はず足摺りし

しづしづ
静々あとに従うて
奥の間さして進み入る。

たかひめ
高姫「ヤア是は是は言依別様を始め、英子姫様其他のお歴々様方の御前も憚らず、

いや
賤しき高姫、恐れ氣もなく御伺ひ致しまして、さぞ御居間を汚すことで御座いま

せう。
何事も神直日大直日に廣き御心に見直し聞直しまして、此老骨をお咎めな

可愛がつて下さいませ」

一同は一時に手をついて、禮を施した。

言依別「高姫様、そこは端近、ここにあなた方お三人様のお席が拵へて御座います。どうぞこちらへお坐り下さいませ」

高姫「何分にも身魂の研けぬ、偽日の出神の生宮や、體主靈從の身魂計りで御座いますから、そんな正座につきますのは畏れ多く御座います。庭の隅つこで結構で御座いますが、御言葉に甘えて、お歴々様の末席を汚さして頂くことになりました。どうぞ左様な御心配は下さいますな」

玉能姫「高姫様、さういふ御遠慮には及びますまい。教主様の御言葉、どうぞお三人様共快くお坐り下さいませ」

高姫「コレお節、御歴々様の中も憚らず、何をツベコベと……女のかましい……口出しなさるのだ。チツと御愼み遊ばせ。もう少し神様の感化に依りて淑女におなりなさつたかと思へば、ヤツパリお里は争はれぬもの、平助やお櫛の娘のお節丈あつて、名は立派な玉能姫さまでも、ヤツパリ落付きがないので、かういふ

時には醜態もない。高姫がかう申すと、猜疑心か、意地悪かの様に思ふでせうが、決して私はそんな心は毛頭も持ちませぬ。お前さまの身魂を立派なものに研き上げて、神業に参加なさつた手前、恥しくない様に、終始一貫した神司にして上げたい計り、お氣に障る様なことを申しますワイ。必ず必ず三五教の教は、悪意に取つてはなりません。序に初稚姫にも云うておきますが、お前もチツとは我慢が強い。何程空が總務ぢやと云つて、親を笠に被り年端も行かぬ癖に肩で風を切り、横柄面を曝してはなりません。金剛不壞の如意寶珠を何々したと思つて慢心すると、又後戻りを致さねばなりませんから、慈母の愛を以て行末永きお前さまに注意を與へます」

玉能姫「ハイ何から何まで御心をこめられし御教訓、猜疑心などは少しも持ちませぬ。此上、何事も萬事足らはぬ玉能姫、御指導を御願ひ致します」

高姫「お前さまはそれだから可かぬのだ。へん、言依別の教主さまから、紫の玉の御用を仰せつけられ、何々へ何々したと思つて、鼻にかけ、玉能姫なんて、傲慢不遜にも程があるぢやありませんか。そんな保護色は綺麗サツパリと拂拭し去

り、何故お節と仰有らぬのだ。かう申すと又お前さまは平助でもない、お櫛でもない様な、お節介ぢやと御立腹なさるだらうが、人は謙遜と云ふ事が肝腎ですよ。今後はキツと玉能姫なぞと大それた事は御遠慮なさつたがよからう。何から何まで、酢につけ味噌につけ、八當りに當つて根性悪を高姫さまがなさるなぞと思つちや大間違ですよ。……これお節さま、わたしの申すことに點の打ち所がありませんかア」

玉能姫「ハイ、實に聖者のお言葉、名論卓説、玉能姫……エー否々お節、誠に感服仕りました。其剛情……イエイエ御意見には少しも仇は御座いませぬ、併し乍ら個人としてはお節でも、お尻でも少しも構ひませぬが、神様の御用を致します時は、教主様から賜はつた玉能姫の職掌に奉仕せねばなりませんから、公の席に於ては、どうぞ玉能姫と申すことをお許し下さいませ」

高姫「女と云ふ者はさう表に立つて、堂々と神業に参加するものではありません。オットドッコイ……それはエー、ある人の言ふ事、私とても女宣傳使、女でなくちや、天の岩戸の初から夜の明けぬ國、言依別の教主様もヤツパリ女に……綺麗

な女の言葉は受取り易いと見えますワイ。オツホ、もう斯う皺が寄つて醜う
なると、到底若い教主様のお氣に入らないのは尤もで御座います。こんなことを
申すと、又高姫鐵道の脱線だと仰有るかも知れませぬが、決して脱線でも轉覆で
も御座いませぬぞ。皆日の出神さまが私の口を借つての御託宣、冷靜に聞き流さ
れては高姫聊か迷惑を致します。お節計りでない、お初も其通り、初稚姫なぞと
大それたことを言つちやなりません。本末自他公私を明かにせなならぬお道、
神第一、人事第二ぢやありませんか。私は系統の身魂、四魂の中の一人、日の出
神の生宮、言依別さまが何程偉くても人間さまぢや。人間の言ふことを聞いて、
此生神の言葉を冷やかな耳で聞き流すとは、主客轉倒、天地轉覆も甚しいと云は
ねばなりませんぞえ。……コレ田吾作、お前も餘程偉者になつたなア。龍宮の一
つ島へ行つて、玉依姫様に玉を頂き乍ら、スレツからの黄龍姫に渡したぢやな
いか。ヤツパリ田吾作はどこ迄も田吾作ぢや、どこともなく目尻が下つて居る。
何程顔が美しくても……其聲で蜎喰ふか時鳥……、心の奥の奥まで、なぜ見抜き
なさらぬ。そんな黄龍姫の様な若い方に渡すのならば、なぜスツと持つて歸つて、

立派な生宮にお渡しせぬのぢやい。お節だつて、お初だつて、皆量見が間違つて居るぢやないか。あんまり甚しい矛盾で、開いた口が塞がりませぬワイな。……コレコレ英子姫さま、梅子姫さま、五十子姫さま、お前さまは變性女子の系統、天の岩戸を閉めた身魂の血筋だから、よほど遠慮をなさらぬと可けませぬぞえ。人がチャホヤ言つと、つい好い氣になるものだ。何程立派な賢い人間でも、悪くいはれるのは氣の好くないもの、寄つてかかつて持上げられると、つい好い氣になり、馬鹿にしられますぞえ。表で持上げておいて、蔭でソツと舌を出す世の中で御座いますからな」

英子姫「ハイ、有難う御座います。御懇切な御注意、今後の神界に奉仕する上に於ても、あなたのお言葉は私の爲には貴重なる羅針盤で御座います。併し乍ら面従腹背的の人間は、此質朴なる今の時代には御座いますまい。善は善、惡は惡とハツキリ區劃が立つて居ります。左様な瓢鮎的の行動をとる人間は、三十萬年未來の二十世紀とか云ふ世の中に行はれる人間同志の腹の中でせう」

高姫「過去現在未來一貫の眞理、そんな好い氣な事を思つて居らつしやるから、

無調法が出来ますのだ。エ、併し大した……あなた方に不調法は出来て居らないから、先づ安心だが、併し三五教は肝腎要の日の出神の生宮は誰、龍宮の乙姫即ち玉依姫の生宮は誰だと云ふ事が分らなければ、どこまでも御神業は成就致しませぬぞ。それが分らねば駄目ですから、今後は私の云ふ事を聞きますかな」

玉治別「モシ英子姫様、決して何事も高姫さまが系統だと云つて、一々迎合盲従は出来ませぬぞ。婆心乍ら一寸一言申上げておきます」

英子姫「ハイ有難う御座います」

高姫「コレ田吾、お前の出る幕とは違ひますぞ。日の出神が命令する。此場を速に退席なされ」

玉治別「ここは言依別様の御館、御主人側より退席せよと仰せになる迄は、一寸も動きませぬ。我々は神様の因縁はチツとも存じませぬ。只言依別の教主に盲従否明従して居るのですから、御氣の毒乍ら貴女の要求には應じかねます。何分頻々として註文が殺到して居る、今が日の出の店で御座いますから、アハ、ハ、ハ、ハ、高姫「コレ黒姫さま、高山彦さま、お前さまは借つて来た狎の様に、何を怖ぢ怖

ぢしてゐるのだ。日頃の鬱憤………イヤイヤ蘊蓄を吐露して、お前さまの眞心を皆さまの前に披瀝し、諒解を得ておかねば今後の目的………否神業が完全に勤まりますまい」

黒姫「あまり貴女の………とつかけ引つかけ、流暢な御辨舌で、私が一言半句も申上げる餘地がなかつたので御座います」

高姫「ア、さうだつたか、オホ、。餘り話に實が入つて氣がつかませなんだ。そんなら黒姫さま、發言權を貴女にお渡し致します」

黒姫「ハイ有難う御座います。私としては別にこれと云ふ意見も御座いませぬが、只皆様に御了解を願つておきたいのは、龍宮の乙姫様即ち玉依姫様の肉のお宮は、黒姫だと云ふことを心の底より御了解願ひたいので御座います」

空助「アハ、ハ、ハ」

黒姫「コレ空さま、何が可笑しいのですか。チト失敬ぢやありませんか」

と舌鋒を向けかける。

空助「黙して語らず………空助の今日の態度、さぞ貴女にも飽き足らないでせう。

空助は總務として、責任の地位に立つて居る以上、成行きを見た上で、何とか申上げませう」

黒姫「コレ玉治別さま、玉能姫さま、一番お偉い初稚姫さま、お前さまはあの玉を誰に貰ったと思うて居ますか」

初稚姫「ハイ、龍の宮居の玉依姫様から……」

玉能姫「龍宮の乙姫さまから……」

黒姫「そらさうに違ひありません。そんなら私を何とお考へですか」

初稚姫「あなたは怖いお婆アさまの黒姫さまだと思ひます。違ひますかな」

玉能姫「龍宮の乙姫様の生宮だと聞いて居ります」

黒姫「さうか、お前さまはヤツパリ年とつとる文で、どこともなしに確りして居る。併し乍ら聞いた計りで、信じなければ何にもなりません。信じて居られま

すか、居られませぬか、それが根本問題です」

玉能姫「ハイ、帝國憲法第二十八條に依つて、信仰の自由を許されて居りますから、信ずるも信じないも、私の心の中にあるのですから……」

黒姫「成るべくはハツキリと言つて貰ひたいものですな」

玉能姫「ハツキリ言はない方が花でせう。……ナア初稚姫さま、あなた如何思ひ

ますか」

初稚姫「私は黒姫さまを厚く信じます。併し乙姫様の生宮問題に就ては不明だと

信ずるのです」

黒姫「誰も彼も齒切れのせぬ御答辨だな。女童の分る所でない、神界の御經綸、

どんな人にどんな御用がさせてあるか分らぬぞよ……とお筆に出て居ります。マ

アそこまで分れば結構だ。……コレコレ玉治別さま、お前さまの御意見はどうだ

な」

玉治別「私の御意見ですか。私の御意見はヤツパリ御意見ですな。灰吹から蛇が

出たと申さうか、藪から棒と申さうか、何が何だかテンと要領を得ませぬワイ」

黒姫「さうだろさうだろ、分らな分らぬでよい。分つてたまる事か。廣大無邊の

神界のお仕組を、田吾作さま上りでは分らぬのが本當だ。これから私が神界の事

を噛んで啣める様に教へて上げるから、チツと勉強なされ」

玉治別「お前さまに教へて貰ひますと、竹生島の辨天の床下に隠してある三つの寶玉が出て來ますかな。私も其所在さへつきとめたら、龍宮の乙姫の生宮だと云つて、羽振を利かすのだけれどなア。序に日の出神にも成り澄すのだが、……黒姫さま教へて下さいませるか」

高姫「コレコレ黒、黒、黒姫さま、夕、田吾に相手になんなさんな。……コレ田吾さま、お前さまは我々を嘲弄するのですか」

玉治別「滅相もない、神様から御神徳を「タマハル」ワケを聞かして下さいと言つて居るのですよ。何分私の身魂が黒姫で、慢心が強うて、鼻が高姫で、おまけに頭が高うて、福祿壽の様に延長し、神界の御用だと思つて一生懸命になつてお邪魔を致して居りまする田吾作で御座いますから、どうぞ宜しく執着心の取れますよう、慢心の鼻が折れますやう、守り玉へ幸ひ玉へ、ア、惟神靈幸倍坐世」

高姫「ヘン仰有るワイ。黒姫さま、高山彦さま、サア歸りませう。アタ阿呆らしい。お節やお初、田吾や空に馬鹿にせられて、日の出神様も、龍宮の乙姫さまも、涙をこぼして居やはりませずぞえ。何と云つても優勝劣敗、弱肉強食だ。善の分る

のは遅いぞよ、其代り立派な花が咲くぞよとお筆に出て居ります。皆さま、アフンとなさるなツ。是から是からサア是れから獅子奮迅の勢を以て、三五教を根本から立替いたすから、あとで吠面かわかぬようになされませや。ヒン阿呆らしいと座を立つて歸らうとする。英子姫は、
英子姫「モシモシ高姫様、一寸お待ち下さいませ。それは餘りの御短慮と申すもの、十人十色と申しまして、各自に解釋が違つて居りまするが神様は一つで御座います。さうお腹を立てずに、分らぬ我々、充分納得のゆく様にお示し下さいませ。誠の事ならばどこまでも服従いたします」

高姫はニヤリと笑ひ乍ら、俄に機嫌をなほし、
高姫「流石は八乙女の随一英子姫様、お前さま丈だ。目のキリツとした所から口元の締つた所、ホンにお賢い立派な淑女の鏡だ。お前さまならば、此高姫の申すことの方るだけの素養はありさうだ。そんならモ一度坐り直して、トツクリと御意見を伺ひませう」
と一旦立つた膝を、又元の座にキチンと歸つた。

英子姫「私は御存じの通り、まだ世の中に経験少き不束者、どうぞ何から何まで御指導をお願い致します。就きましては御聞き及びでも御座いませうが、此度龍宮の一つ島、諏訪の湖より五色の貴重なる麻邇の寶珠が無事御到着になりました、言依別様が兔も角お預り遊ばして、一般の信徒等に拜觀をさせ、それから一々役を拵へ、大切に保管をいたさねばなりません。何分……貴女始め黒姫さま、高山彦さまの肝腎の御方が御不在でありましたので、今日まで拜觀を延期して居りました次第で御座います。先づ第一に其玉の御點檢を、高姫様、黒姫様に御願ひ致しまして、それぞれ保管者を定めて頂かねばなりません。……今日は言依別様始め皆様と御協議で御足勞を煩はした様な次第で御座いますから、どうぞ日をお定め下さいまして、御點檢を願ひ、其上で保管者をお定め願はねばなりません」

高姫「ニツコと笑ひ、」

高姫「流石は英子姫さま、言依別さまも大分によく分つて來ました。併し乍ら、梅子姫様、五十子姫、空助さまの御意見は……」

英子姫「何れも私と同意見で御座います」

高姫「それならば頂上の事、日の出神の生宮が先づ麻邇の寶珠を受取り、龍宮の乙姫の生宮が玉を檢めて、其上、各自日の出神、龍宮の乙姫の指圖に従つて一切萬事取行ふことと致しませう。此玉が無事に納まつたのも、此高姫が神界の命に依つて、黒姫さまを一つ島へ遣はしたのが第一の原因、次に黒姫は高山彦さまと共に龍宮島の御守護を遊ばされ、肝腎要の結構な玉を他に取られない様に、其身魂をお分け遊ばして玉依姫命となし、此玉を大切に保管しておかれたからだ」

英子姫「ハイ………」

玉治別「黒姫さまの分靈は又大變に立派なものだなア。其神格と云ひ、御精神といひ、容色と云ひ、御動作と云ひ、實に天地霄壤の相違があつた。これが本當なら、雀が鷹を生んだと云はうか、途方途徹もない事件だ。此玉治別も龍宮の玉依姫様から玉を受取つた時の心持、一目拜んだ時の氣分と云ふものは、中々以て黒姫さまの前へ行つた時とは、月と鼈ほど違つた感じが致しましたよ」

高姫「コレ田吾さま、黙つて居なさい。新米者の分る事ですかいな」

玉治別「さうだと云つて、其玉に直接に關係のあるのは私ですからなア」

五十子姫いそこひめ「玉治別さま、何事もお年のめしたお方の仰有ることに従ひなさる方が

宜よろしからう」

玉治別たまはるわけ「へーエ、そらさうですな」

と煮え切きにらぬ返事へんじをし乍ながら頭あたまをかいて居ゐる。

梅子姫うめこひめ「今迄いままでの経緯いきさつは何事なにこともスツパリと川かはへ流ながし、和氣わき靄あい々あいとして御神業ごしんげふに奉仕ほうし

することに致いたしませう。……高姫様たかひめさま、黒姫様くろひめさま、高山彦様たかやまひこさま、従前じゆぜんの障壁しやうへきを除とつて、

層一層そういつそう神界しんかいのため、親密しんみつな御交際ごかうさいをお願ねがひ致いたします」

高姫たかひめ「ヨシヨシ、結構けつこう々々」

黒姫くろひめ「お前まへさまも少々せうせう話はなせる方かただ」

玉治別たまはるわけ「何なんだか根ねつからよく分わかりました。何なには免とも有あれ、日ひをきめて頂いただきませう。

信者しんじゃ一般いっぱんに報告ほうこくする都合つがふがありますから……」

言依別ことよりわけは空助もくすけの方ほうを看守みまもつた。空助もくすけは嚴然げんぜんとして立上たちあがり、

空助もくすけ「かくも雙方さうほう平穩へいおん無事ぶじに了解れうかいが出来できました以上いじやうは、來きたる二十三日にじふさんにちを以もつて、麻ま

邇にの寶珠ほうしゆを一般いっぱんに拜觀はいくわんさせることに定さだめたら如何どうでせう。先まづ第一だいいちに高姫様たかひめさま、黒くろ

姫様の御意見を承はりたう御座います」

高姫ニコニコし乍ら立上り、

高姫「何事も此件に付ては、空助さまの總務に一任致しませう」

黒姫「私も同様で御座います」

高山彦「どちらなりとも御都合に願ひます」

空助「左様ならば愈九月二十三日と決定致します。皆さま、御異存あらば今の内

に御遠慮なく仰有つて下さい」

一同「賛成々々」

と言葉を揃へる。折柄吹き来る秋風に十二分の涼味を浴び乍ら各自に退場する事

となつた。ア、惟神靈幸倍坐世。

(大正一一・七・二三 舊閏五・二九 松村眞澄録)

第五章 玉調べ〔七八七〕

仰げば高し久方の

高天原の若宮を

地上に寫し奉り

大宮柱太知りて

高天原に千木高く

仕へ奉りし珍館

錦の宮に連なりし

稜威も廣き八尋殿

英子の姫を始めとし

梅子の姫や五十子姫

初稚姫や玉能姫

音彦龜彦始めとし

空助總務其外の

役員信者は肅々と

八尋の殿に寄り來り

早くも殿の内外に

溢るるばかりなりにけり。

かたの如く祭りも無事に終了した。上段の間には空助の總務を始めとし、英子

姫、五十子姫、梅子姫、初稚姫、玉能姫、お玉の方、最高座には玉照彦、玉照姫

扣へられ、龜彦、音彦、國依別の幹部連、秋彦、夏彦、常彦を始め、英子姫と相

竝んで黄龍姫、蜈蚣姫、テールス姫末端に扣へ、友彦は幹部の上席に顔を竝べて

居た。群集を分けて意氣揚々と登り来る高姫、黒姫、高山彦の三人は、今日玉調べの神務奉仕の役として、盛装を凝らし、英子姫よりも一段と上座に着いた。空助「私は素より鈍魂劣器至愚至癡なる身魂の持主で御座いますして、總務なぞをお勤め申す柄ではありませぬが、神命黙し難く心ならずも拜命致し、皆様のお助けに依つて御用の一端を勤めさして頂いて居りますは、是れも全く皆様の御同情のお蔭と厚く感謝致します。就ては私も少しく思ふ所あつて、神界の爲めに、もう一働き致したう御座いまするので、後任者を推薦致して置きました。教主様は今日は急病でお引籠もりで御座いますから、御意見を伺ふ事は出来ませぬが、私の後任者として淡路島の東助様を、御苦勞に預りたいと思つて、内々伺ひは出して御座います。就きましては、今日は實にお目出度い日柄で御座いますして、龍宮島より、お聞及びの通り、五色の麻邇寶珠納まり、言依別命様が兔も角御主管なされて居られました。今日、高姫、黒姫のお取調を願ひ、信者一同に拜觀をさせよと、教主のお言葉で御座いますから、其お心算で、ゆつくりと御拜觀を願ひます。再び拜觀する事は出来ぬので御座いますから、此際充分御神徳を戴かれる

様に、一寸一言申上げて置きます」

一同は雨霰のごとく拍手する。空助は初稚姫、玉能姫、五十子姫、梅子姫を伴ひ、社殿の奥深く進み、黄金の鍵をもつて傍の寶座を開き、各一個の柳管を、頭上高く差し上げながら、静々と八尋殿の高座に現はれ、五個の柳管は、段上に行儀好く据ゑられた。

高姫は段上にスツクと立ち、一同を見廻し乍ら、

高姫「皆さま、今日は誠に結構なお日柄で御座います。今迄は瑞の御靈の三種の神寶此處に納まり、今日又嚴の御靈の五色の神寶無事に納まり、皆様が拜觀の光榮に浴さるる空前絶後の第一吉祥日で御座います。神様は引掛け戻しのお經綸をなさいますから、肝腎の嚴の御靈の經を後に出し、瑞の緯を先に出したり、變幻出沒究極す可らざる事を遊ばすのは、皆様御承知の事で御座いませう。今日迄三つの御玉を私共南洋あたりまで、搜索に行つたと申すのは、決して左様な緯役の玉を求めに行つたものではありません。玉には随分モンスターの憑依するものでありますから、此高姫等は三つのお寶を探す様に見せて、其方に總ての精神を轉じ

させ、其時に日の出神、龍宮の乙姫の礎になるお方様が、一つ島に人のよう往かない如うな秘密郷の諏訪の湖に深く秘し、さうして仕組を遊ばして御座る事は、最初から我々兩人の熟知する所、否仕組んで居る所で御座います。今日初稚姫、玉能姫、黄龍姫、梅子姫、蜈蚣姫其他五人の神司に、此御用をさせたのも日の出神の仁慈無限のお取計らひと、龍宮の乙姫様の御慈悲ですよ。それが分らぬ様では、三五教の五六七神政の仕組は到底、分るものではありません。幸ひに賢明なる英子姫、稍改心の出来た言依別命の神務奉仕の至誠が現はれて、龍宮の麻邇の寶珠が聖地へ納まる事が出来る様になり、夫を受取り且つ調べるお役は特に此高姫、黒姫兩人が致すべきもので御座います。依つて只今より御玉の改めを致しますから、皆さま、謹んで拜觀なさるが宜しい。三つの御玉はどうならうとも私は知りませぬ。今度の五つの御玉こそ肝腎要な大望な御神業大事のお寶、就ては玉治別や其他の半研けの身魂が取扱つたのですから、少しは穢れて居ないかと心配を致して居るので御座います。身魂相應に玉の光が現はれるのですから、實に恐いもので御座いますよ。サアサ是れから、お民が預つてテールス姫に手渡した、

黄色の玉を函から出して調べる事と致しませう。……黒姫さま、御苦勞ながら一寸これへお越し下さい。さうしてお民さま、テールス姫さま、貴女は直接の關係者、此處にお扣へなされ」

「ハイ」と答へて兩人は高姫の傍に立寄る。高姫は口を「へ」の字に結び、柳筥の桂馬結びの紐を解き、恭しく玉函を捧げ、八雲琴の調子に合して體軀を揺り、手拍子を取りながら、機械人形の如くに柳筥の蓋を、シャツチンシャツチンと取つて見た。黄色の玉が出るかと思ひきや、中より團子石がゴロリと出た。よくよく見れば何か文字が記してある。高姫は眉を顰め光線にすかし見てるに、「高姫、黒姫の身魂は此通り、改心致さねば元の黄金色の玉にはならないぞ」と記されてあつた。高姫は顔色烈火の如く、聲を震はせ、高姫「コレお民さま、テールス姫さま、お前さま達は偉さうな面をして、海洋萬里の一つ島まで何しに往つて居つたのだ。アタ阿呆らしい。コンナ玉なら小雲川には邪魔になるほどあるぢやありませんか」

お民「ハイ、何んな玉で御座います」

高姫「何んな玉もこんな玉もありますかい。お前の身魂の感化に依つて、折角の玉もこんな事になつて仕舞つた。……コレ、ジャンナの土人の阿婆摺女テールス姫とやら、何の態だ、これは……阿呆らしい、早く改心なされ」

テールス姫「ハイハイ改心を致します。どうしてマアこんな玉になつちやつたのだらう、いやな事」

黒姫「それだから瑞の御霊は憑り易いと言ふのだ」

玉治別「瑞の御霊は憑り易いと仰有つたが、これは五の御玉ぢやありませんか」

黒姫「何れも憑り易い身魂だ」

玉治別「そんなら貴女の身魂が憑つたのでせう。どれどれ、私が調べて見ませう」

高姫「お構ひなさんな。お前さまの如うな瓢六玉が見ようものなら、ただの玉になつて終ひます」

群集はワイワイと騒ぎ出した。

國依別は段上に立つて、

國依別「皆さま、お騒ぎなさるな。今日の玉調べは高姫さま、黒姫さまの身魂調

べも同様ですから、決してテールス姫やお民さまの身魂が黒いものではありません。最前も高姫さまが仰有つた通り、何と云うても御兩人が、自分でお仕組なされたのですから心配は要りませぬ。皆見る人の心々に寫りますから……如意寶珠、又見る人の隨意々々替はるから麻邇の寶珠といふのです。之が本物に違ひありませぬ。どうぞお騒ぎなされない様に願ひます。一度高姫さまのメンタルテストをやる必要がありますからなア」

高姫「コレ國さま、お前さま、ゴテゴテ言ふ資格がありますか」

國依別「ありますとも、そんなら何故私に生田の森で、玉の所在を知らせ知らせと云つたのですか」

高姫「お前さまの言ふ事は、チツトより信用が出来ぬ。ブラツクリストに登録されて居る注意人物だ。お黙りなさい」

國依別「高姫署のブラツクリストに記されて居る私でも、チツト位信用が出来ぬのですか。私は又大いに信用が出来ぬと思つたに……それはさうとして次の白色の玉を早く調べて見せて下さい」

高姫「八釜しう云ひなさるな。お前さまがツベコベ嘴を容れると、又玉が變化するかも知れませぬぞ。エ、穢はしい。其方に往つて下さい。……サア今度は久助さま、友彦さま、お前さま達の責任だ。早く此處へお入來なさい」

兩人は「ハイ」と云ひながら高姫の左右に寄り添うた。高姫は又もや以前の如く、恭しく柳筥を開いて見た。中には前同様の團子石に同様な事が書いてある。高姫は「へ」の字に結んだ口をポカンと開けて暫し見詰めて居た。群集は又もやワイワイ騒ぎ出した。國依別は又もや段上に押し上り、

國依別「皆さま、お騒ぎなさいますな。コリヤこれも屹度以前の通り團子石ですよ。丸で狐に「つま」まれた如うですが、これも心の隨意々々變化する玉ですから、驚くに及びませぬ。小人玉を抱いて罪ありと云うて、どんな立派な玉でも小人物が扱うと、其罪が直に憑つて團子石になるのですから、團子石だと言うて力を落してはなりません。これでも身魂の磨けたお方が見れば本眞物になります」

黒姫「コレコレ國さま、いらぬ事を仰有るお前こそ小人だ。お前の様な小人が居るものだから、此通り玉が變化する。私が龍宮で久助に渡した時は、こんなもの

ぢや無かつた。久助と友彦の慢心の身魂が憑つてこんなに變化したのですよ。大勢の前に、此様身魂ですと曝されて、誠に誠にお氣の毒様ですけれどもお諦めなされ」

友彦は大いに怒り目をつり上げながら、黒姫の頸筋をグツと握り締め、友彦「コラ黒姫、失敬な事を言ふか、大勢の前で人の身魂の悪口を云うと言う事があるものか」

爪の延びた手で頸筋をグツと喰ひ入る程掴み押へつける。黒姫は「キーキー」と言ひ乍ら其場に蹲踞む。側に居た高山彦は友彦の襟髪をグツと取り、段上から突き落さうとした途端に、友彦は體をパツとかはした。高山彦は二つ三つ空中廻轉をして、群集の中に唸りを立てて落ちて來た。「サア大變」と大勢は寄つて掛つて介抱をし乍ら、痛さに唸く高山彦を擔いで、黒姫館にドヤドヤと送つて行く。國依別「黒姫さま、誠にお氣の毒な事で御座いました。貴女も嘸お腹が立ちませう。又高山彦も思はぬ御災難で誠に御心配でせう。然し乍ら此處は神様の前、滅多な事は御座いませぬから御安心なさいませ」

黒姫「何から何まで、何時もお構い下さいまして、……ヘン……お有難う御座います、

ますワイなア」

と肩と首をカタカタと揺つて居る、其容態の憎らしさ。

空助「友彦殿、今日は職權を以て退場を命じます」

友彦「仕方がありません。御命令に従ひ自宅へ控へ命を待ちます。立腹の餘り、

ツイツイ粗忽を致しました」

と歸り行く。後見送りて黒姫は肩の中に首を耳の邊りまで石龜の如に突込んで仕

舞ひ、頭を出したり引込めたり、舌を唇でチヨツと噛んで、何とは無しに嘲弄氣

分を表はして居た。

高姫「空助さま、どうも怪しからぬぢやありませんか。折角の如意寶珠の玉をこ

んな事にして仕舞うとは、一體全體譯が分らぬぢやありませんか。此責任は誰

にありますか。……久助さま、お民さま、テールス姫さま、こんな不調法をして

置いて、よう安閑として居れますな。此高姫が三人に對し退場を命じます。よも

や空助さま、是に向つて違背は有りますまいな」

空助「何事も責任は私に有りますから、三人のお方はどうぞ此處に動かずに居て下さい」

三人一度に「ハイ」と俯向く。

高姫「エ、そんなら時の天下に従へだ、もう何も言ひますまい。是から青玉だ。

……サア玉治別、黄龍姫様、此處にお出でなさい。さうして久助さま、元の座に

お歸りめされッ」

と稍甲聲を張り上げながら、又もや例の如く調査し、恭しく玉笥の蓋を取つて見

た。高姫の顔は又もや口が尖り出した。舌を中凹に巻いて二三分ばかり唇の外に

出し、首を右の方に傾げて目を白黒させ、両手を開いて乳の邊りで行儀好く、扇

を擴げた様にパツとさせ、腰を二つ三つ振つて居る。玉治別は是れを眺めて、

玉治別「これ高姫、黒姫、矢張お前さまお二人は改心が足らぬ。海洋萬里の龍宮

の一つ島の、秘密郷の諏訪の湖水から聖地高天原迄、萬里の天空を八咫鳥に乗せ

られ捧持して歸つた結構な玉を、黒鷹の身魂が憑つて斯んなに變化さしよつたの

だ。玉治別承知致しませぬぞッ」

と今度は反對に高姫に喰つて掛る。

高姫「へー甘い事を仰有いますワイ。肝腎要の水晶玉の高姫が覗いて、玉が變化する道理が何處に有りますか。お前さまがあんまり慢心して御用した御用したと、法螺を吹くものだから斯んな事になつたのだ。……コレ小絲どん、此醜態は何だいな。これで立派に御用が勤まつたのですかい。本當に呆れてものが言へませぬワイ。これ小絲どん、どうして下さる。結構な玉に惡身魂を憑して、お前さまは神界のお邪魔を致す曲者だよ。童女の癖に大の男をアフンとさせる様な惡黨者だから、玉の御用が出来さうな道理がない。妾は初めから、お前が玉の御用をしたと聞いた時、フーと惟神的に鼻から息が出ました。日の出神が腹の中から笑うて御座つたのだ」

黄龍姫は屹となり、「高姫さま」と聲に力を入れ、

黄龍姫「ソレは餘りの御言葉ではありませんか。貴女の御身魂さへ本當にお研けになれば、本當の玉がお手に入るのですよ。屹度、神様がお隠しになつたのだが、御自分の心から御立替遊ばせ。さうすれば、本當の麻邇の寶珠がお手にお入り遊

ばすのでせう」

高姫「何と云つても立派な御辨舌、高姫も二の句が次げませぬ。オホ、、、」

と肩を揺り又も腮をしやくる。

玉治別「モシモシ黄龍姫さま、斯様な没分曉漢のお婆アさま連に相手になつて居

つても詰りませぬから、もう止めて置ませせう」

黄龍姫はニタリと笑ひながら、

黄龍姫「ハイ、さう致しませせう」

と元の座に歸る。

高姫「アノマアお仲の好い事ワイの。ホ、、、、、若い男と女には監視を付けて

置かにはや險難だワイ」

空助は苦蟲を噛み潰した如うな顔をして、嚴然として無言の儘扣へて居る。

高姫「コレ空助さま、お前も偉さうに總務面をして御座つたが、今日は目算ガラ

リと外れただらう。アノマア恐い顔ワイなア」

空助「アハ、、、、何だか知らぬが面白い事で御座るワイ。アハ、、、、」

高姫「コレ黒姫さま、確りなさらぬかいな。一向元氣が無いぢやないか。お前の龍宮の乙姫が玉の持主ぢやないか。此奴等に三つまで此様な事にしられて、それを平氣でようまア、居られますな」

黒姫「ハイ何分心配が御座いますので」

高姫「ウン、さうだとも さうだとも、高山彦さまがエライお怪我をなさつたら、御心配になるのも御無理と申しませぬが、もう暫らくだ、辛抱して下さい。

さうしたら無事解放して上げます。……コレコレお節、お前の持つて歸つた赤玉を是から調べるのだから、蜈蚣姫さまも此處へ御出でなさい。お前さまも随分魔

谷ヶ嶽で私に對して弓を引いたり、國城山で悪口を言ひました。先へ申して置きますよ。若し此赤玉が團子石になつて居つたら、どうなさいますか」

蜈蚣姫「何事も惟神に委した私、どうすると云ふ譯に行きませぬ。神様の御處置を願う迄です。乍併高姫さまの指圖は斷じて受けませぬ。左様御心得を願ひます

と一つ釘を刺す。高姫は又も口を「へ」の字に結び桂馬結びの紐を解き、

高姫「サアお節、地獄の釜の一足飛だ。お前が長らくの苦勞も花が咲くか、水の

泡になつて了うか、禍福吉凶幸禍の瀬戸の海ぢやぞい。瀬戸の海で思ひ出したが、
ようも馬鹿にして下さつた。助けてやつたなぞと決して思つては居ますまいな。
エー何をメソメソと吠えて居るのだ。善い後は悪い、悪い後は善いと云う事があ
るから、何月も月夜計りは有りませぬぞ。チツとばかり都合が悪いと言つて顔を
顰める様では、どうして立派に玉能姫と言はれますか」
と口汚く罵り乍ら、柳筥の蓋をパツと開けた。

高姫「黒姫さま、一寸御覽、何だか此玉は黒いぢやありませんか」

黒姫は一寸覗き込む。

黒姫「ホンニホンニ、蜈蚣姫さまの如うに黒い玉だなア。コリヤ大方蜈蚣の身魂
が憑つて、赤い筥の玉が黒くなつたのだらう」

玉能姫「黒姫さまも随分お白くありませんか、どちらのがお憑り遊ばしたか分
りますまい。オホ、々、々」

高姫「又しても又しても碌でもない、コリヤ消炭玉だ。道理で、ちと軽いと思つ
て居つた。【アカ】阿呆らしい。モウ玉調べは御免蒙りませうかい」

とプリンプリン怒つて居る。

空助「御苦労ですがモウ一つ紫の玉をお調べを願ひます」

高姫「エー空助さま、又かいなア」

と煩さ相に言ひ乍ら、萬一の望みを最後の紫の玉に囁して居た。國依別は一同に向ひ、

國依別「モシモシ皆さま、モウ一つになりました。何を言つても手品上手の高姫さまで御座いますから、水を火にしたり火を水にしたり、石を玉にして呑んだり吐いたり、終ひには天を地にしたりなさいます。天一の手品よりはお上手ですから、其お心算で確りとお目にとめられます様に願ひます。東西々々」

高姫はクワツと怒り、

高姫「神聖なる八尋殿に於て何と言ふ事を言ふのか。此處は寄席では有りませぬぞい。尊き尊き神様のお鎮まり遊ばす錦の宮の八尋殿では有りませぬか」

國依別「八尋殿だからといって、手品が悪い道理が有りますか。現にお前さま手品をして居る途中です。そんな事を言うとお縄お縛に落ちますぞ。二十世紀頃の

三五教の五六七殿でさへも劇場を拵へてやつて居るぢやありませんか。譯の分らぬ事を言ふものぢや有りませぬ」

高姫「それだから瑞の御靈の遣り方は、亂れた遣り方だと神様が仰有るのだよ。アアモウ此玉は調べるのが嫌になつた。又初稚姫や梅子姫さまに恥をかかすのが氣の毒だから、こりやもう開けない事にして置かう」

空助「此玉は是非調べて頂きたい。神様は我子、他人の子の隔ては無いと仰有るのだから、神素盞鳴尊の御娘御の梅子姫様と、空助の娘の初稚姫、依估鬲肩したと言はれてはなりませんから、どうぞ此場でお調べを願ひませう」

高姫「エーエー仕方がないなア。本當にイヤになつちまつた。そんなら、ママも一苦勞致しませう。……梅子姫さま、お初さま、サア早く此處へ來るのだよ」

と稍自棄氣味になり言葉せはしく呼び立てる。言下に梅子姫、初稚姫は莞爾として高姫の側に寄り添うた。高姫は又もや柳筥の蓋をチャツと開いた。忽ち四方に輝くダイヤモンドの如き紫の光り、流石の高姫もアツと驚いて二足三足後に寄つた。黒姫は飛び上つて喜び、思はず手をうつつた。一同の拍手する聲、雨霰の如く

場の外遠く響いた。

高姫「お初、イヤ初稚姫さま、梅子姫さま、お手柄お手柄。矢張りお前等は身魂

が綺麗だと見えますワイ。……空助さま、お前さま中々好い子を持つたものぢや。

ヤレヤレ是で一つ安心、後の四つは四足魂に汚されて了うた。瑞の御魂のやうに

憑る麻邇の珠だから、田吾作、久助、お民、友彦、黄龍姫、蜈蚣姫、テールス姫、

お節も是から、百日百夜小雲川で水行をなさい。さうすれば元の玉に還元するだ

らう。嫌といつても此高姫が行をさせて元の光りを出さねば措くものかい」

七人はアフォンとして頭を搔いて居る。其處へ走つて来たのは佐田彦、波留彦兩

人であつた。

佐田彦「空助さまに申し上げます。今朝より言依別命様は御病氣と仰有つて、御引

籠りになつておいでなさいましたが、餘りお静かですから、ソツと障子を開けて

中へ這入つて見れば、萩の机の上に斯様な書き置きがして御座いました」

と手に渡す。空助開いてこれを見れば、

「此度青、赤、黄、白の四個の寶玉を始め三個の玉、三つ四つ併せて都合七個、

ことよりわけのみことづがふ
言依別命都合あつて、或地點に隠し置いたり、必ず必ず玉能姫、玉治別、黄龍姫
其他此玉に關係者の與り知る所に非ず。然し乍ら空助は願ひの如く總務の職を免
じて、淡路の東助を以て總務となす。言依別は何時聖地に歸るか、其時期は未定
なり。必ず我後を追ひ來る勿れ」
と書いてあつた。空助は默然として涙をハラハラと流し、千萬無量の感に打たる
るものの如くであつた。

(大正一一・七・二三 舊閨五・二九 谷村眞友録)

第六章 玉亂〔七八八〕

玉照姫、玉照彦は口を揃へて、

「英子姫殿、紫の玉を我前に持來られよ」

と宣示された。英子姫は「ハイ」と答へて紫の玉を柳筥に納めた儘、恭しく捧持

して二神司の前に奉らむとする時しも、高姫は、

高姫「一寸待つて下さい。又紛失すると大變だから、此玉は日の出神が保管致しておきます」

國依別「コリヤ高、又腹の中へ呑んで了ふ積りだらう。何程日の出神が偉くとも、玉照彦、玉照姫の御命令を反く譯には行くまい。……サア英子姫さま、お二方の御命令です、躊躇逡巡するに及びませぬ。早く献上なさいませ」

高姫「エー又しても又しても、邪魔計り致す男だ。今日只今限り、國依別を除名する」

國依別「エー又しても又しても、玉を吞まうと致す偽日の出神、今日只今より、國治立命、國依別の口を通し、高姫を除名する。ウンウンウン」

高姫「ヘン、おいて貰ひませうかい。何程國依別でも、國治立命様のお懸りなさる筈がありますかい。サア一時も早く國處立ち退きの命となつて歸つて貰ひませう」

玉照姫、高座より聲しとやかに、

玉照姫「高姫、國依別兩人共、お控へめされ」

國依別「ハハ」

と畏縮して其場に平伏する。高姫、

高姫「エエ、日の出神の生宮さへあれば良いのに、無用の長物……でもない。

何と言つても二つの頭が竝んで居るのだから、行りにくいワイ。兩頭蛇尾と云つ

て、善惡兩頭使ひの高姫も芝居が巧く打てませぬワイ」

と小聲で呟いて居る。

國依別「高姫さま、玉照姫様の御命令もだし難く、貴女の除名を、國依別茲に取

消し致します」

高姫は舌をニヨツと噛み出し、あげ面し乍ら、二三遍しやくつて見せ、右の肩

を無恰好に突起させ、

高姫「ヘン、……能う仰有いますワイ。日の出神が更めて國依別を外國行と定め

るから、喜んでお受けをなさるがよからう」

國依別「お前さまに命令して貰はなくとも、言依別神様、空助様、國依別は三人

世の元となつて、チヤンと外國で仕組がしてあるのだ。七つの玉もお先に海外の或地點に隠してあるのだから、要らぬ御世話で御座います」

高姫「そんなら國依別、お前は早くから三人腹を合せて企んで居つたのだな」

國依別「どうでも宜しいワイ。虚實の程は世界の見えすく日の出神様が御存じの

筈だ」

玉照姫「國依別、改めて申し渡すべき事あれば、暫く汝が館に立歸り、命を待た

れよ」

國依別「ハハ、承知致しました」

と丁寧に挨拶をなし、終つて、

國依別「ヤア、テールス姫、玉能姫、玉治別、久助、お民さま、龍宮の女王黄龍

姫、蜈蚣姫其他一統の方々、高姫、黒姫に對して、充分の防戦をなされませや。

此國依別が此場を立去るや否や、そろそろ又吹き出しますからなア」

玉治別「ヤア有難う、あとは我輩が引受ける、安心して歸つて呉れ。さうして言

依別様に宜しく申上げて呉れ。……オット失敗つた、言依別様は最早どつかへ御

不在になつた筈だなア」

高姫「今の兩人が話振を聞けば、玉治別も同類と見える。お前もトツトとここを退場なされ。日の出神が命令する」

玉治別「高姫さま、大きに憚りさんで御座います。濟みませぬが、私の進退は私の自由ですから、餘り御親切に構うて下さいませぬ」

高姫、空助の方にギョロリと目を轉じ、

高姫「お前さまは總務を辭職した以上は、そんな高い所に何時迄も頑張つて居る権利はありますまい。トツトと御下りめされ。サア是からは、言依別は逐電致すなり、空助は辭職をするなり、ヤツパリ此八尋殿は高姫が教主となつて行らねばならぬかなア。時節は待たねばならぬものだ」

玉治別「コレハしたり、高姫さま、誰の命令を受けて貴女は教主になるのですか。誰もあなたを教主として尊敬し、且つ服従する者はありませんまいぞ」

高姫「コレコレ田吾さま、お黙りなされ。天地開闢の初から系統の身魂、日の出神の生宮が教主になるのは、きまり切つた神界の御經綸だ。それだから日の出神

の守護に致すぞよと、お筆先にチヤンと書いてあるのだ。……今までは悪の身魂に結構な高天原をワヤにしられて居たが、世は持切には致させぬぞよ。天晴れ誠の生神が表に現はれて日の出の守護となつたら、今迄上へあがりて偉相に申して居りた御方アフンとする事が出来るぞよ。ビツクリ致して逆トンボリを打たねばならぬぞよ。それを見るのが神は辛いから、耳がたこになる程知らしたが、チツとも聞入れないから是非なき事と諦めて下されよ。決して神を恨めて下さるなよ。我身の心を恨めるより仕様がなぞよ。……と現はれて居りませうがな。誰が何と云つても三五教は日の出神の生宮が表に立たねば、神界の仕組は成就致しませぬぞ工。誠の者が三人あれば立派に立替が成就すると仰有るのだから、イヤな御方は退いて下されよ。誠一つの生粹の水晶玉の大和魂の根本の、地になる日の出神の生宮と龍宮の乙姫の生宮と、高山彦と三人さへあれば、立派に神業は成就致しますワイな。グツグツ申すと帳を切るぞえ」

玉治別「アハ、ハ、ハ、よう慢心したものだなア。……コレコレ波留彦さま、秋彦さま、お前と私と三人世の元となつて、高姫軍に向つて一つ戦闘を開始したらど

うだ」

波留彦「それは至極面白い事ことでせう。……なア、秋彦あきひこさま」

高姫「コレコレ瀧、鹿、田吾作、お前達は何程三角同盟を作つても駄目だよ。モ

ウ今日から宣傳使なんか、性に合はないことをスツパリ思ひ切つて、紫姫さまの

門掃きになつたり、宇都山郷に往つて芋の赤子を育てたり、ジャンナの郷へ歸つ

て土人にオーレンス、サーチライズと持てはやされる方が御互に得策だ。(高姫

は逆上の餘り瀧と友と同うして喋つてゐる)いよいよ日の出神が教主となつた以

上は何事も立替だ。今更めて教主より除名するツ」

玉照姫高座より、

玉照姫「三五教の教主は言依別命、神界の御經綸に依りて高砂島へ御渡り遊ばし

た。又空助は神界の都合に依り筑紫の島へ出張を命ずる。淡路の島の人子の司東

助を以つて三五教の總務に任じ、且つ臨時教主代理を命ずる。高姫、黒姫は特に

拔擢して相談役に致す。玉治別、秋彦、友彦、蜈蚣姫、黄龍姫、玉能姫は以前の

儘現職に止まるべし」

と宣示し玉うた。

高姫「玉照姫さまもチツと聞えませぬワイ。玉照彦様は何とも仰有らぬに、女の

かしましい差し出口。何程結構な身魂でも、此三五教は良の金神、坤の金神、金

勝要神、龍宮の乙姫、日の出神の生魂で開いて行かねばならぬお道、お玉の腹か

ら生れて出た變則的十八ヶ月の胎生……言はば天下無類の畸形兒ぢやないか。何

と仰有つても今度計りは命令を聞きませぬぞ」

玉照姫「汝高姫、四個の麻邇の玉の所在を尋ね、それを持歸りなば、始めて汝を

教主に任じ、高山彦、黒姫を左守、右守の神に任ずべし。誠日の出神又玉依姫の

身魂なれば、其玉の所在をつきとめ我前に奉れ」

高姫「其お言葉に間違ひはありますまいな。宜しい。言依別と空助の兩人、腹を

合せて隠しよつたに、間違ひない。證據は……これ……此教主の書置き、立派に

手に入れてお目にかけます。其代りにこれを持歸つたが最後御約束通り此高姫が

教主ですから、満場の皆様もよつく聞いておいて下されや。日の出神の神力をこ

れから現はしてお目にかける。其時には玉能姫、蜈蚣姫、黄龍姫、玉治別、友彦、

テールス姫、久助、お民、佐田彦、波留彦……其他の連中は残らず馘首するから
覺悟なさいませ、とはいふものの、玉の所在を知つてゐる者があれば、そつと此高
姫に云つて来い……でもよい。兔に角以心傳心無聲靈話でもよいから……」

玉治別、兩手を擴げ、體を前後ろにブカブカさせ乍ら、

玉治別「アツハツハ、アツハツハ、」

と壇上で妙な身振をして笑ひ出した。

高姫「オイ田吾さま、そろそろ守護神が現はれかけたぢやないか。其態は何ぢや

いな。コレコレ皆さま、御覽の通り、日の出神が表になると、皆の身魂が現はれ

て恥しい事が出来ませぬ。今の所は言依別や東助さまが表面主權を握つて居る

様だが、實際の所は床の間の置物だ。實地誠の權利は日の出神の生宮にあるのだ

から、取違をなされませぬ。日の出神も中々大抵ぢやない。遙々と高砂島や筑

紫の島まで行くのは竝や大抵ぢや御座らぬ。魚心あれば水心だ。出世をしたい人

は誰に拘はらず、我れ一とお働きなされ。お働き次第で日の出神が御出世をさし

て上げませぬぞえ」

波留彦一同を見まはし乍ら、

波留彦「皆さま、今高姫の仰有つた通り、手柄のしたい人はお手を上げて下さい

……一、二、三……ヤア唯の一人も手を上げる人がありませんア」

玉治別「それで當然だよ。地位も財産も名譽も捨てて、一心に神界の爲に盡さう

と云ふ誠の人計りだから、そんな人欲に捉はれて、三五教へ入信つた者は一人も

ありませんわい。人欲の雲に包まれてるのは高姫さまに黒姫さま、高山彦位なも

のだなア」

一同手を拍つて「賛成々々」と呼ぶ。

高姫「口と心とサツパリ裏表の體主靈從計りがよつて来て、すました顔して御座

るのが見えすいて可笑しう御座いますワイの、オツホ、、、」

高山彦「高姫さま、私は今日限りお暇を頂きました、龍宮の一つ島へ歸り、元の

ブランデーとなつて活動致します。假令貴女が目的を達して教主になられても、

私はあなたの麾下につくのは眞平御免ですよ。……黒姫もこれから充分龍宮の乙

姫さまを發揮して、日の出神さまと御一緒に御活動なされませ。左様なら……」

と云ひすて、玉照彦、玉照姫の方に向つて丁寧ていねいに辭儀じぎをなし、

高山彦たかやまひこ「英子姫ひでこひめ、五十子姫いそこひめ、梅子姫うめこひめ、初稚姫はつわかひめ、其外そのほか御一同様ごいちどうさま、御機嫌ごきげんよく御神業ごしんげふ

に御奉仕遊ごほうしあそばされん事を高山彦たかやまひこ祈り上げ奉ります。御一同の方々ごいちどうかたがた、此高山彦このたかやまひこは今

日にち限り高姫様たかひめさまと關係くわんけいを解とき、皆様みなさまの前まへにて公然こうぜん黒姫くろひめに暇いとまを使つかはします。どうぞ其

お心組つもりで高山彦たかやまひこを可愛かあいがつて下さいませ」

玉治別たまはるわけ「それでこそ高山彦たかやまひこさまぢや。感心かんしん々々」

一同いちどうは「萬歳ばんざい」と手をあげて歡呼くわんこする。高山彦たかやまひこは、

高山彦たかやまひこ「皆さま、左様さやうならば之これより一つ島ひとじまへ参ります。高姫殿たかひめどの、黒姫殿くろひめどの、さらば

……」

と立出たちいでんとする。黒姫くろひめは周章あわてて裾すそをひき止め、

黒姫くろひめ「ママア待つて下くださんせいな。最前さいぜんからのあなたの御言葉おことば、残のこらず承知しょうちい

たしました。……とは云いふものの情なさけなや、過ぎすし逢あう夜の睦言むつごとを、身みにしみじみ

と片時かたときも、思おもひ忘わするるひまもなう、年月としつき重かさぬる其内そのうちに、うつり易やすいは殿御とのこの心こころと

秋あきの空そら、もしや見捨みすてはなさらぬかと、ホンにあらゆる天地てんちの神かみさまや、龍宮りゅうぐうさま

に願かけて、案じ暮した甲斐もなう、今日突然離別とは、餘りムゴイ御仕打、これが如何して泣かずに居られませうか、オンオン」

とあたりを構はず、皺くちや顔に涙を夕立の如くたらし泣沈む。

玉治別「悔んで歸らぬ互の縁、中をへだつる玉治川。……サアサア高山彦さま、

思ひ切りが大切だ。グツグツして居ると、又もやシャツつかれますよ。あとは此

玉治別が、全責任を負うて引受けますから、一切構はず勝手にお越し遊ばせ」

高山彦「何分宜しく御頼み申す」

と立出でんとする。

黒姫「高山さまも聞えませぬ。お前と二人の其仲は、昨日や今日の事ではありま

すまい。私をふりすてて歸のうとは、餘り聞えぬ胴欲ぢや。厭なら嫌で、無理に

添はうとは言ひませぬ。生田の川の大水を渡つた時の私の正體、よもや忘れては

居りませぬな」

高山彦「一度還元した以上は再び還元出来ぬ大蛇の身魂、もう大丈夫だ。日高川

を蛇體になつて渡つた清姫の様に太平洋を横切つて、高山彦の色男を尋ねて來な

さい。地恩の郷の大釣鐘を千代の住家として、高山彦は安逸に餘生を送る考へだ。さうすれば極【安珍】なものだ。何程お前が地團駄ふんで【道成寺】【かうせうじ】などといつて、藻掻いた所でモウ駄目だよ。アハ、ハ、ハ、ハ、

と大きく肩をゆすり乍ら悠々として出でて行く。黒姫は夜叉の如く、あと追つかけんと、婆さまに似合はず擦鉢巻をし、裾を太腿の上あたりまで引あげて、大股にドンドンとかけ出しかけた。玉治別は追ひすがつて黒姫の後よりムンツと許りに帯をひつつかんで力に任せ、グツと引戻す。黒姫は金切聲を出して、

黒姫「千危一機の此場合、どこの何方が知らねども、必ずとめて下さるな。妾にとつて一生の一大事、ア、残念や口惜しや、そこ放しや」

と振向く途端に見合す顔と顔、

黒姫「ヤアお前は意地くね悪い田吾作殿、ここは願ぢや、放しておくれ」

玉治別「意地くね悪い田吾作だから放さないのだよ。雪隠の水【つき】婆【うきぢやと人が笑ひますよ。まあチツと氣をおちつけなされ。高山さま計りが男ぢやありますまい。男早魅もない世の中に、コラ又きつう惚たものだなア」

黒姫は、

黒姫「エー放つといて」

と力限りふり放し、群衆の中を無理に押分け人を押倒し、ふみにじり乍ら、尻ま
で出して一生懸命高山彦の後を追っかけ走り行く。

(大正一一・七・二四 舊六・一 松村眞澄録)

第七章 猫の戀(七八九)

玉照姫は紫の寶珠を初稚姫、玉能姫、お玉の方に守らせ乍ら、我館に歸らせ給
うた。幹部を始め一同は更めて天津祝詞を奏上し一先づ各自の宿所に歸る事とな
つた。

高山彦は一旦館へ立ち歸り旅装を整へ、アール、エースの二人と共に早々館を
立ち出でんとする時しも、髪振り亂し夜叉の如くに歸つて來た黒姫と門口でピツ

夕（ゆづ）り出（で）會（あ）した。南無三寶（なむさんぼう）一大事（いちだいじ）と高山彦（たかやまひこ）は裏口（うらぐち）より驅出（かけだ）さんとする。黒姫（くろひめ）は此場（このば）に倒（たふ）れて癩（しやく）を起（おこ）してフン伸（の）びて仕舞（しま）つた。流石（さすが）の高山彦（たかやまひこ）も之（これ）を見捨（みすて）て逃（に）げ出（だ）す譯（わけ）にもゆかず、

高山彦（たかやまひこ）「エース、水（みづ）だ。…アール、癩（しやく）だ」

と呼（よ）ばはり乍（なが）ら介抱（かいほう）して居（ゐ）る。

黒姫（くろひめ）は目（め）の黒玉（くろたま）を何處（どこ）かへ隠（かく）して仕舞（しま）ひ、白目（しろめ）ばかりになつて「フウフウ」と太（ふと）息（いき）をして居（ゐ）る。エース、アールは口（くち）に水（みづ）を含（ふく）んで無性矢鱈（むしやうやたら）に面（めん）部（ぶ）に吹（ふ）き付（つ）ける。高山彦（たかやまひこ）は口（くち）を耳（みみ）にあてて反魂歌（はんこんか）の「一（ひと）、二（ふた）、三（み）、四（よ）、五（いつ）、六（む）、七（なな）、八（や）、九（ここの）、十（たり）、百（もも）、千（ち）、萬（よろづ）」を數回繰返（すうくわいくりかへ）した。黒姫（くろひめ）は「ウン」と呻（うめ）き乍（なが）ら、黒姫（くろひめ）「ア、何方（どなた）か知（し）りませぬが、よう助（たす）けて下（くだ）さつた」

と四邊（あたり）をキヨロキヨロ見廻（みまは）して居（ゐ）る。

高山彦（たかやまひこ）「ア、黒姫（くろひめ）、氣（き）がついたか。マアマア之（これ）で安心（あんしん）だ。これから高山彦（たかやまひこ）はお前（まへ）と縁（えん）を斷（き）り、龍宮（りうぐう）の島（しま）か、但（ただ）し筑紫（つくし）の島（しま）へ玉探（たまさが）しに行く（ゆ）から、これまでの縁（えん）と諦（あきら）めて下（くだ）さい」

黒姫は怨めしさうに、

黒姫「高山さま、お前も餘りだ。妾の今卒倒したのもお前の心が情無いからだよ。

刃物持たずの人殺、冥土の鬼にエライ成敗を受けなさるのが：妾や：それが悲しい。

神の結んだ縁ぢやもの、何卒モ一度思ひ直して下さいませ」

高山彦「何と言つても男の一旦口から出した事、後へひく譯にはゆかぬ。先は先

として一先づ此場は離別を致す。黒姫、さらば……」

と立ち去らんとする。黒姫は隠し持つたる懐劍、ヒラリと引き抜き、

黒姫「高山彦さま、永らくお世話になりました。妾の戀は九寸五分、最早此世に

生て望みなし。妾は此處で潔く自害を致し、貴方を怨める魂魄凝つて鬼となり、

屹度素首引き抜いて見せませう。ア、惟神靈幸倍坐世」

と喉にピタリと當てて見せた。

高山彦「自殺は罪惡中の罪惡だ。これ黒姫さま、何程九寸五分だつて胸の方では

喉は斬れませぬよ。随分芝居がお上手ですね。そんな事にチヨロマカされる高山

彦では御座りませぬワイ。アツハ、ハ、ハ、」

黒姫「エー、残念や、口惜しい。そんなら本當に斬つて見せようか。斬ると云う

たら屹度斬つて見せませう」

高山彦「一旦斷つた此縁、再びきられる道理があらうか。最早お前と俺との二人

の間には何の連鎖もない。赤の他人も同様だ。勝手に斬りなさいませ」

黒姫「そりや聞えませぬ高山さま、天ヶ下に他人と云ふ事は無いもの……と三五

教の御教、お前はそれを忘れたか。憐れな女を見殺しにする御所存か、それ程情

ないお前ではなかつたに、如何なる天魔に魅られたか。お前の言葉は鬼とも蛇と

も悪人とも譬方なき無情慘酷さ、死んでも忘れは致しませぬぞや」

高山彦「イヤ、もう神界の爲めには家を忘れ、身を忘れ、妻子を忘れるとかや。

男子は戦場に向ふ時には三忘が肝腎だ。……黒姫、さらば……」

と行かんとする。

黒姫「コレコレ、アール、エースの兩人、高山さまの足に確り喰ひついて居るの

だよ。屹度放しちやなりませぬぞえ」

二人は高山彦の兩足に喰ひ付き乍ら、

アール「ア、ア、犬も喰はぬ夫婦喧嘩の犠牲に供せられ、随分勤め奉公も辛いものだなア」

高山彦「こりやこりや、アール、エースの兩人、早く放さぬか」

黒姫「決して放しちやなりませんぞ。コレコレ高山さま、男は鬨を跨げるや否や

七人の敵があると云ふ事を知つて居ますか」

高山彦「アハ、ハ、ハ、イヤもう御親切な御注意、有難う御座います。誠一つの心

で居れば、世界は敵の影を見たいと言つても見る事は出来ない。山河草木、人類

鳥獸魚鱉に至る迄、皆我々の味方ばかりだ。人を見たら泥坊と思へ等と云ふ猜疑

心に驅られて居る人間の目には、何も彼も敵に見えるだらうが、我々は神様にお

任せした以上一人の敵も無い。お前に添うて居れば此世の中で敵を作るばかりだ

から……何卒心配して下さるな。お前もこれから改心をして、世間の人に可愛が

られて呉れ。それが高山彦の別れに臨みお前に與ふる大切な餞別だ。高姫さまに

も何卒よく言うて置いて下さい。必ず必ず執着心を出してはなりませんぞ。今日

から心を改めて本當の生れ赤子になり、假にも龍宮の乙姫等と大それた事を言は

ない様にしなさい。左様なれば是にて……黒姫さま、お暇致します」

黒姫「高山さま、そりや貴方、本性で仰有るのか。芝居ぢやありますまいなア」

高山彦「本性で無うて何とせう。夫婦の道は人倫の大本だ。それを別れようと言

ふ高山彦の胸の裏、些とは推量して呉れ。……さあアール、エース、これから行

かう。……黒姫さま、これにて暫くお別れ致します」

と慌しく驅出す。

斯かる處へ走つて来た玉治別、

玉治別「ヤア、高山さま、愈御出ですか」

高山彦「ハイ、何分宜しう願ひますよ」

黒姫「何と言つても放しはせぬ」

と獅噛みつく。高山彦は「エー面倒」と當身を一つ喰はずや否や、黒姫は「ウン」

と其場に大の字に倒れて仕舞つた。

玉治別「何と高山さま、亂暴な事を致しますな」

高山彦「斯うして置かねば仕方が無いから……此間に私は身を隠すから、後は頼

みますよ。斯うして此處を拇指でグツと押し、貫へば息を吹き返す……玉治別さま、此處だよ。何卒二十分ばかり待つとつて下さい」

玉治別「承知致しました」

「左様ならば」と高山彦は二人を伴ひ、足早に何れへか姿を隠した。玉治別は時期を見計らひ高山彦に教はつた局を拇指に力を入れてグツと押し、「ウン」と息吹き返した黒姫は四方をキヨロキヨロ見廻し、

黒姫「ア、残念や、到頭逃げられたか。エー仕方がない。……お前は玉治別さま、

ようマア助けて下さつた」

玉治別「高山彦の奴、怪しからぬ亂暴な男だ。永らく添うて来た女房に當身を喰はして息を止め、筑紫の島へ逃げて行くとは不届き千萬な者だ。お前さまも是で目が醒めただらう。虎、狼と一緒に寝る様なものだ。私もお前さまを活かさうと思つて、何程骨を折つたか分りませぬ。到頭局が分つて活を入れた時、貴女がもの言うたのも皆神さまのお蔭、ア、勿體ない。是から一切の執着を捨てて大神さまに感謝祈願の祝詞を奏上しませう」

「ハイ、有難う」と黒姫は玉治別と相並び、拍手の聲も淑やかに錦の宮の方面に向つて感謝祈願の言葉を奏した。

因に言ふ、錦の宮の神司は従前の通り玉照彦、玉照姫の二人相並び、御神業に奉仕され、英子姫選ばれて言依別命の不在中教主の役を勤めらるる事となつた。そして東助は教主代理兼總務となつて聖地に仕へた。

高山彦、秋彦、テールス姫、夏彦、佐田彦、お玉の方は聖地にあつて幹部の位置を占め神業に従事しつゝあつた。玉能姫は生田の森の館に歸りて駒彦と共に神業に従事する事となつた。又言依別命は國依別と共に南米、高砂島に渡り、鷹依姫、龍國別の行衛を探ね、旁宣傳の爲めに出張さるる事となつた。

高姫は言依別命の後を追ひ四個の玉を取り返さんと、春彦、常彦の二人を引き率れ、高砂島に行く事となつた。空助は初稚姫、玉治別、五十子姫、龜彦、音彦、黄龍姫、蜈蚣姫其他を率ゐ、波斯の國のウブスナ山脈齋苑の館を指して行く事となつた。梅子姫はコーカス山に二三の供者を従へ途々宣傳をし乍ら登らせ給ふ。黒姫は高山彦が龍宮島又は筑紫の島に逃げ去りしと聞き、一方は玉の詮議を兼ね

て夫をの行衛をを捜査すべく聖地をを後に、三人のの供者をを従へ出發する事となつた。
（大正一一・七・二四 舊六・一 北村隆光録）

第三篇 神仙靈境しんせんれいきやう

第八章 琉と球りうきう〔七九〇〕

神素かむ蓋さ鳴の大神おほかみや
三五あななひけつ教だいけうしゆの大教主
千萬せんまんむりやう無量しんかいの神界の
國武彦くにたけひこの神言みこともて
言依別ことよりわけの神司かむつかさ
深ふかき使命しめいを蒙かかりて

ワザとに玉を交換し

其責任を一身に

負ひて聖地を出奔し

國依別を伴ひて

紅葉も照れる秋の空

暗に紛れて長宮の

峠を渡り谷を越え

杉の木立にまぎれつつ

南を指して進み行く

丹波篠山後に見て

高春山を伏拜み

池田伊丹も束の間に

漸く明石に着きにけり

漁師の家に立寄りて

船を一隻買ひ求め

國依別と兩人が

艀櫂を操り悠々と

波靜かなる瀬戸の海

暗夜を幸ひ高砂の

沖に浮べる一つ島

金剛不壞の如意寶珠

紫色の寶玉の

堅磐常磐に埋めたる

松の根元に立寄りて

暗祈黙禱やや暫し

空中俄に明くなり

瞬く間に三柱の

小さき女神現はれて

聲嚴かに詔らすよう

汝言依別神

先に埋めし寶玉は

我等三柱朝宵に

守りゐませば此島に

心を配らせ玉ふなく

一日も早く海原を

神の恵に潔く

進みてテルの港まで

出立ち玉へ惟神

尊き神の御仕組

後程思ひ知られなむ

あゝ惟神々々

御靈幸はひまませと

言ふかと思れば忽ちに

姿は消えて白煙

山の尾の上に靉靄きぬ

忽ち空中音楽聞え

四邊芳香に包まれて

譬方なき爽快さ

言依別は三柱の

瑞の女神を拜禮し

國依別と諸共に

乗り來し船に身を托し

魚鱗の波の漂へる

大海原を悠々と

波のまにまに漕ぎ渡る

あゝ惟神々々

御靈幸はひましませと

和田津御神に太祝詞

聲を限りに宣りつつも

荒ぶる波を分けて行く

いつしか瀬戸の荒海を

乗り越え進む馬の關

戸島男島に春の島

清島越えて琉球の

那覇の港に到着し

海邊に船を繋ぎおき

神のまにまに進み行く。

此島は琉球一の廣大なる浮島である。現代は其時代に比ぶれば殆ど海中に陥没

して其面積殆ど十分の一しか残つて居ないが、此時代は随分廣大な島であつた。

二人は何ともなしに、此處に神業の祕まれあるかの如く感じ、茫茫たる荒原を、

足に任せて進み行く。

日は漸く西山に傾いて、ハリス山の頂のみ日光が少しく輝いて居る。

國依別 教主様、何だか此島を歩きますと、足の裏がボヤボヤする様ですなア。

何でも此處には不思議な玉があると云ふ事を故老から承はつて居りましたが、布

哇へさして行く考へだつたのが、知らず識らずにこんな方へやつて來ましたのは、何かの御都合でせうかなア

言依別 確かに此島に御用があるのだ。餘り大きな聲では云はれないが、此處には琉の玉と球の玉とが永遠に隠されてある。それで琉球といふのだ。龍の腮の球と云ふのは此島にあるのだ。此玉を二個共うまく手に入れて、高砂島へ渡らなくては本當の神業は出來ないのだよ

國依別 へー、それは大變ですな。果して左様な物が手に入るでせうか。さうして其玉の在場所はお分りですか

言依別 大抵分つて居る。國武彦大神様より命令を受けて居るのだ。琉の玉は潮満の玉、球の方は潮干の玉だ。各一個づつ之を携へて世界を巡れば、如何なる悪魔と雖も、忽ち畏服すると云ふ神器である。あの山の頂きを見よ。太陽は既に西天に没し、最早黄昏の帳は刻々に厚く下ろされて來たにも拘はらず、あそこ計りは晝の如く輝いて居るではないか

國依別 成程、さう承はればさうですなア。どうしてあこ計り光るのでせう。日

の出神さまが、先へ廻つて我々に此處だとお知らせ下さるのでせうか」

言依別「マアそんなものだらうよ。餘程日も暮れたなり、體も疲れて來たから、

此邊で一夜宿を取り、明朝更めて登る事に致さう」

と幾丈とも知れぬ太き幹の、槻の木の下に、スタスタと進み行く。國依別も無言

の儘従いて行く。見れば槻の根元には縦五尺横三尺許りの洞が開いて居る。餘り

の老木にて皮ばかりになり、中へ入り見れば全部洞穴になつて居て、所々に草で

編んだ蓆などが散亂して居る。此木の洞は殆ど五十坪許りもあつた。益々奥へ奥

へと進めば美はしき草の莖、香りゆかしく布きつめてある。二人はそこに、草鞋

をぬぎすて横たはり見れば、ガサガサと音がする程、よく乾いた莖であつた。

國依別「随分大きな樹木ですなア。併し乍らこれ丈綺麗に蓆が布きつめてある以

上は、何者かが此處に住まつて居るのでせう。暗がりのこととて、ハツキリ分り

ませぬが、どうやら此處は人間の住家ではなからうかと思はれます」

言依別「此處は琉球王の隠れ場所だ。今日は都合に依りて數多の家來を引つれ外

出をして居るのだが、今晚の夜中頃になれば屹度歸つて來るから、餘り驚かない

様にして呉れ。決して我々の爲に悪い者ではないから」

國依別「へーさうですか。そんな事を如何して貴方は御存じですか」

言依別「何事も玉照彦、玉照姫命を通じて、國武彦神様より御知らせになつてゐ

るのだ。大變に面白い事が出て来るよ。サア是から揃うて天津祝詞を奏上し宣傳

歌でも唱へて寢に就く事にしよう」

國依別「ハイ有難う御座います。何とはなしに氣分のよい所ですなア」

と言ひ乍らゴロンと横になる。二人は白川夜舟を漕ぎつつ、忽ち華胥の國に遊樂

する身となつた。

丑満刻と思はるる頃、國依別はフト目を醒ませば、入口の外面に當りて騒がし

き聲が聞えて來た。

國依別「モシモシ言依別様、大變な足音が致しました。サアどうぞ起きて下さい

ませ」

言依別は熟睡せしと見え、

言依別「國依別、喧しく言はずに早く寢ぬか。ムニヤ ムニヤ ムニヤ ムニヤ、

ウンウンウン[㊦]

とクレンと寝返りし又グウグウと雷の様な鼾をかき始めた。足音は刻々に近付いて来る。國依別は慌てて入口に只一人佇み、外面を眺め入った。無数の明りは木の間を縫うて瞬き乍ら人聲ワイワイと騒がしく、此方に向つて近寄り来るのであった。

國依別[㊦]「ハハ、此奴ア餘程澤山な人数と見えるワイ。こりや斯うしては居られないぞ。一つ何とか工夫を致さねばなるまい[㊦]」
と入口に立つた儘、腕を組み首を傾けて考へ込んで居る。

(大正一一・七・二四 舊六・一 松村眞澄録)

第九章

女神託宣〔七九一〕

國依別は空洞の入口に立ち、刻々に近より来る人影、篝火の光を眺めて獨語、

國依別「あの仰々しい松明の光り、數多の人の足音、唯事ではあるまい。萬一猛悪なる土人の襲來せし者とすれば、到底我々一人や二人、如何に言靈の神力を應用すればとて、容易に降服致すまい。權謀術數は神の許し玉はざる所なれ共、爰は一つ言依別様の御睡眠を幸ひ茶目式を發揮して、裏手を用ひ、寄せ來る數萬の連中をアツと驚かせ、荒肝を取りて置かねばなるまい。オ、さうぢや さうぢや」と諾き乍ら入口の暗がりに、ボンヤリと浮いた様に立つて居る。最早閒近くなつて來た。暗がりにも確に男女の區別位はつく様になつた。先頭に立つた人の姿を見れば、確に白髮の老人らしい。國依別は突然洞穴内より虎狼の吼えたける如き唸り聲を立て、力限り、

「ウーッ」

と唸つてみた。其聲は洞穴内に反響して一層巨聲になつた。外の男二三人小聲で、男「ヤアこりや大變だぞ。我々がハリス山へ龍神征服の爲に行つて居つた不在中に、何だか怪しい虎狼か或は龍神の片割れか、先廻りして我々の天然ホテルを占領しやがつたと見える。コリヤうつかり這入らうものなら大變だぞ。オイどう

だ。數歌を唱へて征服して見ようぢやないか」

國依別はさとも其囁の一端を耳に挟み、

國依別「ヤア面白い、虎狼か龍神の片割れだらうと云つて居るな。ヨシ此方にも覺悟がある」

と獨語し乍ら、満身の息をこめて、反對にこちらから「一二三四五六七八九十百

千萬」と含んだ様な聲でワザと呶鳴つて見せた。此聲と共に今迄木の間に瞬いて

みた松明は言ひ合はした様にパツタリと消えて、洞穴の内外は眞の暗となつて了

つた。寄せ手は驚いて、魔神に自分等の所在を探られない爲と火を消したのであ

つた。外からは流暢な聲で天の數歌が聞えて來た。一同はそれに合して、森林の

木笏に響く聲、天にも届く許り思はれた。大勢の中より一人の男稍近くに進み來

り、大麻を左右左に打振り乍ら、

男「ヤア我々の不在中を狙つて住み込む奴は大蛇か、曲鬼か、或は猛獸か、言語

の通ずるものならば、速かに返答致せ。それとも畜生ならば、一刻も早く此處を

退散致せ。若し神様ならば御名を名乗らせ玉へ」

國依別は何だか其言葉に馴染のある様な気分がした。併し乍ら此琉球の離れ島に我々の知人が来て居るべき筈もない。あの聲は確に男子であつた。さうして何となく言靈が冴えて居た。こりや決して案ずるには及ぶまい。機先を制するはこの此時だ……と心に思ひ乍ら、暗がりを幸ひ、

國依別「アール、シャイト、チーチャーバンド、ジャンジャヘール、サーチャイト、パックス、エール、シーエー、ピック、ホース」

と云つた。

外の男「ヤア此奴ア南洋の土人が漂着して來よつたのだなア。天の數歌まがひの事を言つて居やがつたぞ。大方ジャンナの郷の三五教の信者が、此島に漂着して此洞穴を見付け出し、這入つて居やがるのだらう。困つた奴が來たものだ。土人の言葉はこちらでは分らないし、如何云つてやらうかなア」

國依別「此方はハリス山に、遠き神代の昔より住居致す大龍神であるぞよ。此度神勅に依つて高天原より言依別命、其玉を受取りにお越し遊ばされたるを以て、今迄大切に保存して居た琉、球の二つの玉も、已むを得ず御渡し致さねばならぬ

事になつて來た。神勅はもだし難し、執着心を去つてスツパリと渡し切る考へだ。此二つの玉の琉球を去るや否や、如何なる事が出來致すも分りはせぬぞ。其方は我を是より誠の神と尊敬致し、此洞穴の中を我居宅に獻り、山海の珍味を以て供養せば、地異天變の災害を免れしめ、汝等一同をして安く楽しく長壽を與へ、天國の喜びを永久に保たしめむ。返答如何に」

と聲まで十七八位の女になつた氣で、若々しげに述べ立てた。外の男の一人、稍前に進み寄り、

外の男「早速のあなたの御承諾、若彦身にとりて、有難き仕合せに存じます。先日より一日も缺かさず、ハリス山に驅上り、言靈を手向け候處、龍の腮の琉と球、容易に御渡し下さる形跡も見えず、實の所は、心中稍不安の念に驅られて居りました。其お言葉を聞くからは、これなる土人に命じ、あらゆる珍しき果物を持たせお供へ致します。どうか今迄の様に時々暴風雨を起し、人民を苦むるなどの暴行は是れ限り御止め下さいます様に、三五教の宣傳使若彦、愼んで御願ひ致します」

國依別、中より、

國依別「言ふにや及ぶ。我こそは國依……オツト違うた、國【より】も我身が大

事と、今迄は執着心にかられ、琉、球の二つの玉を私有物として楽しんでゐた。

さうして此玉を以て、風雨雷霆を驅使し、種々雑多の亂暴を致したが、今日限り

根本より悔い改めて若彦の言葉に従ふ程に、必ず必ず心配致すな。サア早く芳醇

なる酒を獻じ、林檎、バナナ、龍眼肉を我前に獻上致せ。随分空腹に悩んで居る

ぞよ。言依別神様やがて日移さず此處に御越しあらん。大勢ここに集まるも無

益なれば、大半は濱邊に到つて言依別様御到着の御出迎への準備をいたすがよか

らうぞ。其時には三五教の大宣傳使國依別お供に仕へ居る筈なれば、待遇に區別

をつけず、極鄭重にもてなしを致せよ。ハリス山の龍神、汝等一統に氣をつけ

るぞよ。若彦、及び其前に立つ白髮の老人にも申しわたす仔細あらば此處に居よ。

其他の住民共は濱邊へさして一刻も早く御迎へに參り、萬事落度なく心を配り氣

を配れよ。ウーン」

と唸り止んだ。

若彦「委細承知仕りました。……モシ常楠様、あなた何卒、大勢の連中に此由を御傳へ下さいまして、言依別様の御到着の待受準備にかかるべく御命令下さいませ」

常楠「ハイ承知致しました。併し乍ら嘘ではありませんすまいかな。どうも我々の考へでは言依別命様は、此洞穴内に安々と御休みなされてるような心持が致します。そして此龍神の化身女神様は、私の心のひがみか存じませぬが、國依別様のようには思はれてなりません。悪戯好の國依別の宣傳使の事とて、ワザとに女神の聲色を使つて居られるのでは御座いますまいか。數多の土人を引つれ濱邊へ参り、言依別命様今か今かと待呆けに遭はせ、あとでアフォンとさして大笑ひをしようと云ふ企みだからうかと思はれます。そんな手に乗るものなら折角我々を神と信じてる土人の信用はサツパリ地におち、却て我等の身邊に危険の及ぶやも計り知れませぬ。コリヤうかうかと聞く譯には行けませんまいぞ」

國依別洞穴内より、一層やさしき女の作り聲で甲高に、

國くに依より別わけ 來くるか來くるかと濱はまへ出でて見みれば 濱はまの松まつ風かぜ音おとばかり

待まちに待まつたる國くにさまは 遠とほの昔むかしに此この島しまに

上あがつて御ご座ざるを知しらないか ホン二めくじ盲めくらは仕し様やうがない

あゝ惟かむ神ながら々々かむながら 御み靈たま幸さちはひましませよ

と追おひ々おひ鍍め金つきがはげで、知しらぬ間まに自じ分ぶんの地ぢ聲しゑになつて居ゐたのに氣きがついた。

「ヤア是こりや失し策まつつた」

と思おもひ乍ながら、又また聲こゑを改あらためて、

國くに依より別わけ 我われこそは琉りうと球きうとの玉たまを守護しゆご致いたす國くに依より別わけの姫ひめ神がみであるぞよ。國くに依より別わけとは

タマで代しろ物ものが違ちがふぞよ。國くに依より別わけが例たとへば黄わう金こんなれば、此この方ほうは銅あか位がねなものであるぞ

よ。今いま迄までの國くに依より別わけは、實じつに困こまつた奴やつであつたなれども、身み魂たまの因いん縁ねん現あらはれて此この頃ころ

は、立りつ派ぱな立りつ派ぱな言こと依より別わけ命のみことの片かた腕うでにお成なり遊あそばして御ご座ざるぞよ。其その方ほうは紀き州しうの邊へん

鄙びに永ながらく蟄ちつき居よ致いたして居をつた故ゆゑ、知しらぬは無む理りなき事ことであるぞよ。今いまに國くに依より別わけ命のみこと

參まゐりなば鄭てい重ちゆうにいたし、琉りう、球きう二ふたつの玉たまを汝なんぢ等ら手てに入いれなば、一いつは言こと依より別わけ命のみことに獻けん

じ、一は國依別命に獻ぜよ。これ國依姫命の御心であるぞよ。ゆめゆめ疑ふこと勿れ」

若彦「ハイ承知致しました。誰の御手に渡しますも天下を救ふ寶玉ならば、結構で御座います。三五教の物とならば之に越したる喜びは御座いませぬ」

常楠小聲で、

常楠「モシ若彦さま、どう思つても私は腑に落ちませぬ。……コレコレ女神と稱する國依別さま、良い加減に茶目式を發揮しておいたらどうだい。そんな事ア若彦さまなれば、一時誤魔化しが利くだらうが、何もかも世の中の辛酸を嘗めつくした此常楠の前には通用致しませぬぞよ」

國依別「眞偽の判断は其方に任す。我に従ひ遠慮は要らぬ。汝等兩人奥の間に進み來れ」

と先に立つて暗がりを進んで行く。

國依別「待てよ、前へ無茶苦茶に進むと云うと、壁際に頭を打ち、言依別様のお眠みの上を踏みなどしたら大變だ。コリヤ一つ松明をつけさしてやらうかな」

と小聲で囁き乍ら、

國依別「ヤア若彦、松明をつけよ。暗くて少しも見えぬでないか」

若彦「私はここへ參つてから餘程慣れましたから、松明がなくても大抵分つて居

ます。あなたは神様なれば夜目が見えさうなものですなア……神は無遠近、無大

小、無明暗、無廣狹、一も見ざるなしと云ふではありませんせぬか」

國依別ヒヤリとし乍ら、尚も莊重な口調にて、

國依別「若彦、馬鹿を申せ。暗がりの目の見える者は畜生であるぞよ。人間は暗

がりに目の見えぬのは神の分靈たる證據であるぞよ。すべて高等動物になる程、

夜分に目が見えないものだ。それだから最高級にある神は目が見えぬが道理だ

うがな。それだから人民が神に燈明を獻ずると云ふ事を知らないか」

常楠吹き出して、

「オホ、、、」

國依別「アイヤ常楠とやら、神の言葉が何故それ程可笑しいか」

常楠「あなたは餘程鈍な神様と見えますな。道路神とかいつて、盲神様があると

云ふ事だ。大方お前さまは道路神か道樂神だらう。宗彦、お勝の昔を思ひ出しに

なつたら、さぞ今日は感慨無量で御座いませうナ

國依別「何でも宜しい。炬火をつけて下さらぬか。實は御察しの通り國依別です

よ。アハ、ハ、ハ、

常楠「オホ、ハ、ハ、

若彦「なんだ、又いかれたか。エー仕方がない。よく化ける男だな。そんなら炬

火をつけて上げませうかい

と懐より燧石をとり出し「カチカチ」とやつて居る。言依別は二三人の人聲何か

ザワザワ聞えるのに目をさまし、耳をすまして聞いて居れば、國依別とか常楠と

か若彦とかの聲がきこえて來た。

「ハテナア」

と無言のまま考へ込んで居る。どうしたものか火は打つても打つても火口につか

ぬ。

若彦「ア、今日は盲の神さまの守護と見えて、暗がりの御守護らしい。何程打つ

ても火は出ませぬワ。……ナア常楠さま如何しませう」

常楠「エー仕方がない。そんなら暗がりでも休ませうかい。……時に國依別さま、

言依別の教主様はここに居られるのだらうな。ウカウカ歩くとお眠みになつて居

る所を踏みでもしたら大變だから、在否を言つて下さいな」

國依別「お前さまの最前仰せられた通り、盲神の國依別、まして此暗夜、言依別

様の在否が見えて堪りますか。アハ、ハ、ハ、」

言依別命は聲を掛け、

言依別「イヤ國依別、何とかして火をつけて呉れないか。常楠、若彦の兩人が見

えて居るであらう」

國依別「ハイ、確にお見えになりませぬ。あなたでさへも見えぬ位ですから……」

言依別「暗がりで見えるか見えぬかと云つたのだない。来て居られるか居られぬ

かと言ふのだ」

國依別「来て居られますが、サツパリ見えて居られませぬ。アハ、ハ、ハ、」

かくする所へ入口よりチャール、ベースと云ふ二人の男、松明をかがやかし乍

ら這入つて來た。

チャール、ベース兩人腰を屈めて、

兩人「嚙御不自由で御座いましたでせう。つい【うつかり】致してをりました。

松明をここに燈しておきますから……私は入口に立番を致しますから、御用があ

らば直に手を御拍ち下さいませ」

國依別「ハリス山の龍神、國依姫命、チャール、ベースの兩人、よくも氣を利

かしようつた。神満足に思ふぞよ」

兩人「ハ、有難う存じます」

と恐る恐る、坑外に出て行く。坑内は二つの松明にて晝の如く明くなつた。所々

に節穴の窓が開いて居た。煙は其穴より逸出すると見えて、少しも、けむたさを

感じなかつた。

言依別命は起き上り、行儀よく菅苴の上に端坐し、常楠、若彦の顔を見て、

「ヤア」と言つた。

若彦「これはこれは教主様、よくも御入來下さいました」

と早くも嬉し涙にくれて居る。

言依別「若彦殿、御苦勞で御座つた。此老人は噂の高い秋彦、駒彦の縁類なる常

楠翁かなア」

若彦「ハイ左様で御座います」

常楠「教主様、一度御伺ひを致したく存じて居りましたが、遠方の事と云ひ、老

人の事とて山道を歩むのが辛勞になり、つい御無沙汰致して居りました。倅共が

篤き御世話に預りまして、有難う御禮申し上げます。今度は私も千騎一騎の最後

の活動と思ひ、神恩の萬分に報ぜむと、若彦様のお伴をなし、先日より此島へ

参り、ハリス山の龍神に向つて、言靈戦を開始して居ります。其御蔭で毎日毎

晩吹き荒ぶ暴風も凧ざわたり、それが爲土人は我々二人を大變に神の如く尊敬い

たして居ります。どこへ行つても日輪さまの御光は照らせ給ふ如く、大神様の御

神徳の満遍なく行きわたつて居らせられるには感謝の至りにたへませぬ。何分晝

碌爺の私、どうぞ御見捨なく御用命あらん事を懇願仕ります」

と言ひ終つて、嬉し涙を袖に拭ふ。

言依別ことよりわけ「神様の御示し通り、これで愈四魂揃ひました。玉照彦様、玉照姫様の御神力みりきは今更乍ら恐れ入る外ほかはありませぬ。いよいよ願望成就ぐわんもうじやうじゆして、琉、球の寶玉ほうぎよく手に入るは目のあたりでせう」

常楠つねくす「最早九分九厘まで、龍神は歸順して居ります。モウ一つ執着心さへ取れれば渡して呉れるでせう。我々は若彦さまと共に能ふ限りの最善のベストを盡して來ましたがモウ此上は教主様の御力を借りるより仕方がありません」

若彦わかひこ「如何に神様の御仕組だと云つても、かような所で教主様にお目にかかるとは、今の今迄、神ならぬ身の存じて居りませなんだ。ア、人間は脆いもので御座いますワイ。現に目の前に居る國依別さまにさへ瞞された位で御座いますから」

國依別くによりわけ「クツクツクツ、ウツプーッ」

と吹き出して居る。

言依別ことよりわけ「國依別さま、此島へ來た以上は餘程謹嚴の態度を持つて居て貰はぬと、中々強敵ですから、茶目式所ぢやありませんぞ」

國依別くによりわけ「左様で御座います。斯様な所で茶目坊をやつても、サツパリ茶目ですか

ら、只今限り左様なことは茶目に致しますから、どうぞ御心配下さいませな」
言依別「仕方のない面白い男だなア」
若彦、肩をゆすり乍ら、可笑しさをこらへて、

「キューキュー」
と言つて居る。常楠は何が可笑しい、若い奴と云ふ者は、箸のこけたのでも可笑しがるものだ……と云ふ様な態度で眞面目くさつて控へて居た。漸くにして夜は明け放れた。言依別命は三人の外にチャール、ベース外四五人の土人を引率し、ハリス山の谷道を若彦の案内にて進む事となつた。

(大正一一・七・二五 舊六・二 松村眞澄録)

第一〇章 太平柿(七九二)

紀州熊野の片畔きしゅうくまのかたほとり

天地の神の御教てんちのかみのみをしへ

朝な夕なに宣べ傳ふあさゆふののつた

三五教の若彦あななひけうわかひこ

常楠爺さまと諸共につねくすざいもろとも

熊野の瀧に參詣くまのたきまゐまう

御襖袂の最中にみそぎはらひさいちゆう

現はれ出でし姫神あらひめがみ

心の花の開くなるこころはなひら

蓮華の山の守り神はちすやままもがみ

木花姫の忽然とこのはなひめこつぜん

瀧の畔に現れましてたきほとりあ

言葉静かに宣らすやうことばしづの

汝は是により常楠となんぢこれつねくす

旅装を整へ船に乗りりよさうととのふね

熊野の浦を立ち出でてくまのうら

浪間に浮ぶ寶島なみまうかたからしま

琉と球との瑞寶りうきつずあほう

いや永久に納まれるいとしえをさ

聖地に到りてハリスのせいちいた

山の棲まへる荒神やますあらがみ

言向け和し龍神ことむやはりうじん

腮の珠を受け取りてあぎとたまうと

三五教の神司あななひけうかむつかさ

玉照彦や玉照姫たまてるひこたまてるひめ

貴の御前に奉れうづみまへたてまつ

高天原の聖地よりたかあまはらせいち

言依別を始めとしことよりわけはじ

國くに依より別わけの宣せん傳でん使し

後あとより來きたり給たまふべし

汝なんぢはそれに先さきだちて

此この神かみ島じまに到たつち着やくし

ハリス山ざんの深しん谷こくに

棲すむ龍りう神じんを言こと靈たまの

神かみの息あぶ吹きに言こと向むけよ

木この花はな姫ひめは汝なれが身みの

前まへに後うしろにつき添そひて

必かなず功い績さをを建たてさせむ

一ひと日ひも早はやく進すすめよと

言こと葉は終をはると諸もろ共ともに

早はや御み姿すがたは消きえ給たまひ

後あとに芳はう香かう馥ふ郁いくと

四あ邊たりに薰かをる床ゆかしさよ

幽いう玄げん閑かん雅がの音おん樂がくは

梢こずを渡わたる科し戸な邊どの

風かぜに相あ和ひし面おも白しろく

耳みみも若わかやぐ若わか彦ひこが

常つね楠くす伴ともひ天てんを覆おほふ

樟くすの老らう木ぼく生おひ茂しげる

熊くま野のの森もりを後あとにして

神かみの御み言ことを畏かしこみつ

浪なみのまにまに出いで來きたり

ハリス山ざんの麓ふもとなる

槻つきの大だい樹じゆの洞どう穴けつを

暫しばし時じの住す家みかと定さだめつ

日ひ日に每まい日に龍りう神じんを

言向け和す其爲に
數多の土人に侍かれ

嶮しき山坂昇降し
心の限り眞心を

盡して神業に仕へける
今日は殊更龍神の

出現遅く暇どりて
槻の大木の假宅に

歸りし頃は夜半頃
數多の篝火かがやかし

我が洞穴に近づきて
外より中を眺むれば

虎狼か鬼か蛇か
はた龍神の化身にや

異様の物影忽ちに
嘯く聲はウーウーと

四邊に響く大音に
若彦膽を潰しつ

小聲になりて數歌を
唱へ終れば中よりも

聲調揃はぬ怪聲に
一二三つ四つ五つ六つ

七八つ九つ十たらり
百千萬と應酬する

若彦大地に平れ伏して
轟く胸を押へつ

虎狼か鬼か蛇か
但は誠の神様か

名乗らせ給へと呼はれば 國依別は聲を變へ

ハリス山の龍神が 琉と球との寶玉を

言依別や國依別の 神の司に授くなり

夢々疑ふ事なかれ 是を聞いたる若彦は

正直一途の性質 誠の神と喜んで

感謝の涙に暮れて居る 常楠爺さまは怪しんで

心の僻みか知らねども 龍の化身の姫神と

思へぬ節がやつとある 言依別神様や

國依別の宣傳使 此洞穴に入りまして

息を休ませ給ふらん 此姫神は正しくも

三五教の國依別の 神の司が茶目式を

發揮したるに相違なし これこれ國依別さまよ

早く正體現はせと 云ふ間もあらず國依別は

察知の言葉に耐りかね 思はず吹き出す笑ひ聲

忽ち化は現はれて

茲に三人暗黒の

洞穴内に押し入つて

闇に彷徨ひ燧石

カチカチ打てど何故か

今日に限つて火は出でぬ

三人闇に包まれて

盲の神の垣覗き

四邊を探る折柄に

松明持つて兩人が

此場に現はれ入り來り

其處に明火を立て置いて

忽ち表へ驅け出す

言依別は起上り

三人の姿を透し見て

不意の邂逅祝しつつ

久方振りに四方山の

話と共に夜は明けぬ

あゝ惟神々々

尊き神の引き合せ

四魂揃うて神人は

旭の光を浴びながら

四五の土人を従へて

棕櫚や花櫚の生ひ茂る

林の中を掻い潜り

土柔かくばかばかと

足を没する山麓の

小徑を踏占め登り行く。

冬とは云へど雪も無ければ霜も降らぬ、自轉倒島の夏の如き陽氣に、汗を垂らしながら脛を没する灰のやうなボカボカ道を踏み慣れぬ足に登つて往く。

國依別は空腹に耐へ兼ね、傍の芭蕉の葉を一枚剥つて之を四つに疊み、敷物の代りにして路傍にドツカと坐し、左の手を膝に上向けにチンと乗せ、右の手を握り食指のみ「又ツ」と前に突き出し、太平柿の甘さうに斷崖絶壁に實つて居るのを見て、喉を鳴らせながら無言の儘坐つて居る。言依別、若彦は七八間も先に立つて居る。國依別の後から従いて來た常楠、チャール、ベース其他の土人は、國依別の態度に不審の念晴れず、ジツとして顔を見詰めて居た。國依別は膝の上に乘せた左の手を一二回上げ下げし乍ら、右の手の食指にて向ふの柿を指し、次で自分の口を指し、又柿を指し又口を指しやつて居る。

常楠「モシモシ國依別さま、此常楠は年は老つても耳は近いのだから、そんな仕方せず口で言つたら如何ですか」

國依別は自分の口を指し又柿を指し、遂には腹を指して見せた。

常楠「察する所あの柿が食ひたいと仰有るのですか。そんなら今喰はして上げま

せう。これこれチャールさま、誰か此中で木登りが上手な人、此谷を向ふへ渡つて、あの甘さうな柿を二つ三つ採つて来て下さらぬか。國依別の喉の神さまが彼の柿を獻れよと御命令して御座る」

チャール「ハイ畏まりました。併し乍ら彼處に残つて居るあの柿は、龍神さまの柿と云つて人間の喰ふ物ぢや御座いませぬ。若し一つでも喰はうものなら、男女に拘はらず、忽ち腹が膨れ、遂に臍がはぢけて、大蛇の兒が生れ、親はそれつ切り國替致すと云ふ險難の柿です。それ故誰も採つた者もなければ、食つた者もありません。従つて其味を知る者もないのです。此方に龍神様が御憑りになつて居られますのかなア。そんなら龍神さまに御上げ申すつもりで、取つて参りませうか」

ベース「オイオイ、チャール、さう安請合をするものぢやないぞ。何程常楠様が天降つた神様だと云つても、龍神の柿を自由になさる事は出来ない。又假令御憑りになつても、それは靈だから、ムシヤムシヤお食りになる筈がない。お食りになるとすれば此方の肉體が食ふのだから、それこそ大變だ。サア往かう。若彦様

や言依別神様は、最早御姿が見えなくなつて了つた」

國依別「汝チャール、ベースの兩人、其争ひは尤もだ。併し乍ら此の方は眞の龍

神の化身、元の姿の儘ならば谷間に下つて鎌首をキュウと立て、舌をニヨロニヨ

口出せば、手もなく口にニユウと這入るのであるが、斯う人間に化て居る間は、

ヤツパリ人間竝に採ることが出来ない。神が命令する、チャール、ベース、早く

採つて參れ。苦しうないぞ」

チャール「ハイ畏まりました」

ベース「苦しうないと仰有いましたね。そりや其筈だ。ジツとして芭蕉の葉の上

に胡坐をかき、人に苦しい思ひをさして、あの柿を採り、居乍らにして据膳を戴

き遊ばすのだもの、何が苦しいものか。樂なものだよ」

國依別「グツグツ申さずに早く採つて献上致せ。國依別空腹に依り、最早一步も

歩行けなくなつて、此處に極樂往生を致しかけたぞよ」

常楠「オツホ、、、」

チャール、ベースの兩人は、猿の如く斷崖を下り、可なり深い谷川の點在せる

岩の頭を飛び乍ら、流を避けて向ふ側に渡り、柿の木に喰ひついて二人は登り行く。

水の垂る様な甘さうな柿が、幾つともなく澤山に葉の蔭にぶらついて居る。其大きさは牛の鞆丸位確かにある。チャール、ベースの二人は得も言はれぬ甘さうな香に耐りかね、自分の使命を忘れて一生懸命に甘さうな奴から、採つては喰ひ採つては喰ひ、舌鼓を打つて居た。

常楠は下から聲を掛け、

常楠「コレコレ、チャール、ベースの兩人、柿を落さないか」

此聲にチャールはフト氣がつき、

チャール「今落しませう。併し斯んな柔らかい柿を落せば、潰れて了ひます。生憎容れ物もなし、私の腹の中へ入れて持つて下りますから、待つて居て下さい」

常楠「此處に龍神さまがお待兼だ。少し固くつても良いから、【むし】つて此方へ抛つて呉れ」

チャール「堅いものは澁くつて喰へませぬぞえ」

常楠「エー仕方がないなア」

國依別「あゝ斯うして居て、人が甘さうに食うて居るのを見ると、腹が餘計空くようだ。エー仕方がない、人を力にするな、師匠を杖に突くなと、神様が仰有つた。人の力で甘い柿を採つて、徳を取らうと思つても駄目だ。ドレ自分の事は自分で埒をつけるに限る」

とペコペコした腹を抱へ、二重腰になつて、斷崖を迂り落ち、谷川から浮き出した岩の頭を、ポイポイと飛び越え、辛うじて對岸の柿の根元に着いた。見れば二人は蠶が桑の葉を食ふやうに、小口ごなしに赤い甘いのを平らげて仕舞ひ、下方には青い澁いのがぶら下つて居る。國依別は空を仰きながら、國依別「オイ、チャール、ベースの兩人、些とは赤いのを残して置いて呉れよ。今登るから……」

と柿の節だらけの瘤に手をかけ足をかけ、やつと一の枝に取りつき下を見れば、激潭飛沫の谷川凄慘の氣に襲はれ、空腹の上の事とて目も眩む様な感じがして來た。國依別は漸くにして一方の細き枝に身を寄せ、

國依別「ア、危いものだ。この枝が一つペキンと折れようものなら忽ち寂滅爲樂だ。併し怖い所に行かねば熟柿は食へんぞよと神様が仰有つた。美味しい熟柿は矢張り怖い所にあるものだナア」

と呟きながら辛うじて美味さうな奴を一つ「むし」り、飛びつくやうに矢庭に頬張つて見た。何とも云へぬ美味で思はず目も細くなり、顔に皺を寄せて賞翫した。忽ち腹は布袋の如く刻々に膨れ出した。

國依別「ヤア此奴は耐らん、チャールの云ふやうに大蛇が腹に宿つたのかなア。何だか腹の中がクレクレとして來たぞ。天足、胞場の昔のやうに體主靈從になつ

て仕舞ふのではあるまいかなア。高山の伊保理、低山の伊保理を「柿」わけて「食」し召せと云ふからは、強ち神罰も當るまい。ア、グヅグヅして居ると腹が

大きくなつて下りられないやうになる。あゝ惟神々々靈幸倍坐世」

と樹を下りんとする。相當に黒い大きな大蛇、龜甲型の斑紋を光らせながら絡繹として柿の樹目蒐けて上つて來る嫌らしさ。國依別は一生懸命に一二三四と天の數歌を唱へた。

國くに依別よりわけは追々おひおひ登りのぼ来るきた勢猛いきほき惡蛇あくじやに僻易へきえきし、樹上じゆじやうより兩手りやうてを擴ひろげて空中くうちうを搔かきながら、谷川たにがはの蒼味あをみだつた深淵しんえんの上うへにドブンと落おち込こんだ。逆卷さかまく浪なみに捲まき込こまれて暫しばらくは其姿そのすがたも見みえなくなつて仕舞しまつた。蛇へびは急速度きふそくどを以もつて數限かずかぎりなく柿かきの木きに上のぼつて來くる。

チャール、ベースの兩人りやうにんは、國依別くによりわけの飛とび込こんだ青淵あをぶち目め蒐がけて又またもやドブンドブンと飛とび込こんで仕舞しまつた。パツと立たつた水煙みづけむりと共ともに二人ふたりの姿すがたは又また々また消きえて仕舞しまつた。あゝ此この三人さんにんの行方ゆくへは如何どうなつたのであらうか。

(大正一・七・二五 舊六・二 加藤明子録)

第一章 茶目式〔七九三〕

言依別ことよりわけに從したがひて

ハリス山ざんに登のぼり行ゆく

國依別はその途中

谷の向ふに美はしく

枝もたわわに實りたる

太平柿を見るよりも

俄に食欲勃發し

空腹まぎれに道端に

芭蕉の葉をば敷具とし

悠悠端坐なし乍ら

彌勒如來のその如く

左手を腿にチヨイと載せ

右手の拳を握りつつ

食指を突き出して

無言の儘に谷底の

太平柿を指さしつ

續いて我口我腹を

幾度となく指示し

チャール、ベースや其他の木登り上手の人あらば

谷間を越えて攀上り

さも甘さうな彼の柿を

われに一二個獻れ

口に言はねど仕方にて

頻りに示す可笑しさよ

ハリス山の龍神が

餌食としたる太平柿

野心を起し人々が

一個なりとも取るならば

忽ち神の御怒りに

觸れて腹部は膨張し 遂には蛇の子を生みて

生命を果すと聞えたる 危険極まる果實なり

國依別の食欲は 旺に起り矢も楯も

忪らぬままに常楠に 採つて呉れよと促せば

常楠不安を感じつつ 已むを得ずして供人の

チャール、ベースに命令し 國依別の要求を

充しやらんと氣を配る チャール、ベースは生神の

託宣否むに由も無く 蔓に下つて絶壁を

谷間に下り激流の 中に浮べる岩頭を

飛び越え飛び越え向ふ側 漸く渡りて柿の根を

抱いて空を眺むれば 甘さうな香がプンプンと

二人の鼻をついて来る 忽ち二人は意を決し

猿の如く攀上り 蠶の蟲が桑の葉を

食ひつくす如小口から 赤い熟柿を【むしり】取り

ものをも言はず大口を開いて頼張る可笑しさよ

余りの甘さに兩人は己が役目を忘却し

一生懸命〔むしり〕取り 遮二無二口に放り込めば

忽ち膨れた布袋腹 息をスウスウ喘ませつ

鰻の木登りした様な 怪體な姿となりにけり

國依別は打仰ぎ 一つでよいから甘い奴

落して呉れと呼ばはれど 馬耳東風の兩人は

生命知らずに食つて居る 國依別は思ふやう

三五教の神の教 必ず人に頼るなよ

わが身の事は我身にて やらねばならぬと云ひ乍ら

芭蕉葉の席を立上り 猿の如く斷崖を

蔓を力に谷底に 漸く下り對岸

柿の大木に抱きつき 登りついたる一の枝

ここに息をば休めつつ 眼下を見ればいと高く

激流飛沫の水煙
水聲轟々凄じく

肝も抜かる許りなり
頭上の二人は右左

猿の如く飛び交ひて
五臓六腑の裂ける迄

生命知らずに食つてゐる
國依別は忪りかね

危き所に上らねば
甘い熟柿は食へないと

生命を的に細枝に
つかまり乍ら漸々に

一つの熟柿をむしり取り
天下無上の珍味ぞと

口にふくめば忽ちに
腹はふくれて吹く息も

漸く苦しくなりにけり
柿の根元を見下ろせば

龜甲形の斑紋ある
大蛇の群の數多く

目を瞋らして上り来る
その形相の凄じさ

進退茲に谷まりて
國依別は意を決し

運をば天に任せつつ
生死の外に超越し

激潭飛沫の青淵を
目蒐けて飛込む放れ業

ザンブと許り水煙

立つよと見る間に國依別の

姿は水泡と消え失せぬ

チャール、ベースの兩人は

上り來れる蛇を見て

怖れ戦き國依別の

珍の命が飛込みし

青淵目蒐けて飛込めば

これ又姿は消えにけり

此有様を目の當り

眺めて居たる常楠や

四五の土人の供人は

驚き周章ワイワイと

谷の流れに沿ひ乍ら

三人の姿は何處ぞと

右往左往に奔走し

狂ひ廻るぞ是非なけれ

谷間を渡る風の音

いと轟々と吹き荒ぶ

言依別や若彦は

斯る事とは知らずして

三五教の宣傳歌

聲も涼しく歌ひつつ

谷を傳ひて奥深く

足を早めて進み行く。

常楠は此處に於て迷はざるを得なかつた。肝腎要の御神業に參加せざればならず、又國依別以下を助けなくては人間の道が立たず……。

常楠「あゝ如何したらよからうか。末代に一度の此御神業を外しても國依別その外を助けねばならぬであらうか。それだと云つて、國依別の生命もヤツパリ一つだ。グズグズして居れば取返しのない事になつて了ふ。彼方に盡せば此方を救ふ事が出来ぬ。此方を救はんとなれば、大切な御神業を放棄せねばならず。神様の御命令は最も重く、人命も亦實に大切である」

兔やせん角やせんと暫くは四五間の間を上りつ、下りつ處置に迷うてゐた。

常楠「ア、グズグズしてゐると、一方は息の根が止まつて了ふ。御神業は半時や一時遅れたとここで勤まらない事は無い。オーさうだ。國依別を助ける方が本當だらう」

と獨語云ひ乍ら、土人の聲のする方を尋ねて谷川を傳ひ、灌木を分けて下つて往く。

四五丁下流に當つて四五人の供人は聲を限りに、

『アレヨ アレヨ』

とさざめいてゐる。見れば三つの黒い影、浮きつ沈みつ激流に流されて下り行く。

何分兩方は壁の如き岩、容易に近寄る事は出来ない。常楠は大聲を上げて、

常楠『下流へ 下流へ』

と呼ばはり乍ら、一目散に下流を指して十丁許り驅出した。

此處には谷川稍廣く展開し水も餘程淺くなり流れも亦緩やかになつて、川底の

小砂利迄がハツキリ見えて居る。常楠を始め四五の供人はザブザブと川に飛入り、

流れ来る三人の身體を拾ひ上げんと横梯陣を作つて待つてゐる。

漸く流れつuitしたのは國依別、續いて二人も無事に此處に流れて來た。各一人の

肉體を二人宛手分けして岸に引上げ、水を吐かせ、種々と人工呼吸を施した末、

常楠は老人の皺唄れ聲を張り上げ乍ら、反魂歌を繰返し繰返し高唱した。國依別

は漸くにして手足を動かした。常楠の面は忽ち輝き初めた。又もや二人に向

つて反魂歌の數歌を唱へ上げるや、漸くにして二人も蘇生した。一同の悦びは譬

ふるに物なきまでであつた。常楠の命令に依つて國依別其他を天然ホテルの槻木

の洞穴どうけつに送りおく、土人どじんに介抱かいほうさせ置きお乍らなが、常楠つねくすは時遅ときおくれては一大事いちだいじと、疲つかれた老おいの足あしを引ひきずり乍らなが、多羅たらの木きの杖つゑを力ちからにハリス山ざんの谷間たにまを目めがけて再ふたび登のぼり行ゆく。

國くに依別よりわけ、チャール、ベースの三人さんにんは漸やうやく元氣げんき恢復くわいふくした。されど龍神りゅうじんの柿かきを食くつた天罰てんばつか、腹はらは追々おひおひ膨張ばうてうして臨月りんげつの女をんなの様やうになつて來きた。チャール、ベースの二人ふた人は、ゴロリゴロリと身體からだ中丸ぢうまるくなつて毬まりのやうに轉ころげ廻まはり苦くるしみ乍らなが、

チャール「モシモシ、國くに依別よりわけ神様かみさま、何とかして下くださいな」

國くに依別よりわけ「マア待まつて呉くれ。俺おれの腹はらから癒なほさなくちやならないのだ」

チャール「元もとは貴方あなたの爲ために、斯こんな目に會あつたのですから、助たすけて頂いただかねばつまりませぬ。何なんだか腹はらの中に大蛇おろちの兒こがウヨウヨして居ゐるやうに苦くるしくて恠たまりませぬワ。大蛇おろちの赤兒あかこが出生しゅつさんするや否いなや、男女だんぢよの區別くべつなく即座そくざに死しんで了しまうと言いふことです。これ丈だけ苦くるしくては死しんだ方が優ましだが、死しんでもつまらない。宅うちには女によう房ぼうや子こが残のこつてゐる。何なんとかして早はやく助たすけて貰もらはねば、追々おひおひ苦くるしくなつて來きました」

國依別くによりわけ「いやしさに世間せけんへ恥はぢを【かき】の實みの

腹はらふくれても【大蛇だいじや】あるまい」

と二度にどくり返し口吟くちずさみ、自分じぶんの腹はらを拳骨げんこつを固かためて三みつつ四よつ撲なぐりつけ、

國依別くによりわけ「大蛇をろち、退散たいさん々々」

と云いひ了をはつて、天あまの數歌かずうたを力限ちからかぎりに苦くるしき息いきをつき乍ながら奏上そうじやうした。不思議ふしぎや今迄いままで

脹滿てつまんのやうにふくれてゐた國依別くによりわけの腹部ふくぶは、元もとの如ごとくに癒なほり、息いきも平常へいぜいの通とほりに

なつて來きた。國依別くによりわけは直ただちに天津祝詞あまつのりとを奏上そうじやうし、感謝祈願かんしやきぐわんの言葉ことばを唱となへて神恩しんおんを

涙なみだ乍ながらに感謝かんしやするのであつた。

チャール、ベースの二人ふたりは、斷末魔だんまつまの樣やうな聲こゑを出だして、ウンウンと肩かたで息いきをし

乍ながら呻うめいてゐる。その慘狀さんじやうめ目めも當あてられぬ許ばかりであつた。

國依別くによりわけは兩人りやうにんの爲ために一生懸命いつしやうけんめいに汗水あせみづを垂たらして感謝祈願かんしやきぐわんをしてゐる。

國依別くによりわけ「龍神りうじんの柿食かきて布袋ほていになつ【チャール】

腹はらは忽たちまち「ヘース」なるらん。

柿かき取とつて見みればヘースが當あたりまへ

腹はらふくれチャール道だうり理りわからぬ。

チャール、ヘース、國くに依より別わけも諸もろ共ともに

天あまの「はら」から下くだりけるかな。

ハラハラと涙なみだ流ながして「はら」を撫なで

柿かきを盗ぬすんだ腹はらいせに逢あひ。

腹はらが立たてども仕しか方たなし

龍りうじん神じん腹はらを立たてたのか

汝なんぢは横よこに長ながい奴やつ

腹はら立たて通とほしもならうまい

高たか天あま原はらにあれませる百ももの神かみたち

おほつなばら
大海原にあれませる速秋津姫神

【はら】の悩みを抜ひ玉へ清め玉へ

ハラハラと降り来る雨に空晴れて

大蛇の空も澄み渡りけり。

と口から出任せの腰折れ歌を詠ひ乍ら、チャール、ベースの真ん中にチヨコナ
と坐り、兩人の布袋腹を兩方の手で撫で廻して居る。薄紙を剥いだ様に二人の腹
は漸次容積を減じて來た。

國依別 ♪ それ見たか女房が撫でる【ふぐ】の腹

オツトドツコイ

それ見たか國依なでる柿つ【ばら】

あまつかみくにつかみ
天津神國津神【はら】ひ玉へ清め玉へ

たかやま
高山の伊保理、短山の伊保理

【かき】分けて聞召せよ

めくら
これが盲の柿のぞき

せつき
節季が来たぞ節季が来たぞ

【かき】出せ【かき】出せ

しぐわつ
四月と二月の死際ではないぞ

いま
今が二人の生命の瀬戸際

まんごうまつだい
萬劫末代生き通し

すめおほかみ
皇大神の守る身は

たとへだいじや
假令大蛇の潜むとも

だいじや
【大蛇】あるまい二人連れ

かむながらかむながら
あゝ惟神々々

みたまさち
御靈幸はひましまして

チャール、ベースが苦しみを

片時も早く救はせ玉へ

その源を尋ねれば

國依別より出でし事

罪は全く我身にあれば

何卒早く兩人の腹を「ひすぼ」らせ舊の元氣に恢復せしめ玉へ

あゝ惟神靈幸倍坐世

と一生懸命に汗みどろになつて祈念し乍ら兩手にて、兩人の腹を撫で下ろした。

神徳忽ち現はれ、二人は半時餘りの間に舊の如くになつて了つた。四五の供人も

國依別の祈願に依つて忽ち全快せし事を感歎し、各口を揃へて、

「國依別の生神様」

と合掌するのであつた。

國依別は大神にチャール、ベースと共に感謝の祝詞を奏し了り、足を早めて再

びハリス山指して登り行く。國依別は道々宣傳歌を歌ひ乍ら元氣旺盛八人連れ
にて、言依別の登りたる場所を辿り進み行く。

國依別 朝日は照るとも曇るとも 月は盈つもと虧くるとも

假令大地は沈むとも 誠の力は世を救ふ

神の御稜威は目の當り わが改心と言靈の

力に依りて三柱の 尊き御子は救はれぬ

あゝ惟神々々 御靈幸はひましまして

一時も早く片時も 言依別や若彦の

神の命の御前へ 導き玉へハリスの

山を守らす高津神 不知不識の過ちを

直日に見直し聞直し 助け玉ひし龍神の

恵みを感じ奉る 常楠翁は今何處

定めて吾等が進退を 言依別の御前に

完全つまらに詳細つばらに宣のり終をへて
今は三人いまみたりの笑わらひ草ぐさ

森もりの木こだま霊ひびに響ひびくらん
天てんを封ふうじて聳そそり立たつ

老おい木き林やしの谷たにの道みち
進すすむ吾等われらの涼すずしさよ

名なは太平たいへいの柿かきなれど
亂らん癡ち氣き騷さわぎの此この始しま末まつ

太たい亂らん柿がきと名なをつけて
以後いごの戒いましめ何人なにびとも

此この柿かき計ばかりは食くはぬ様やつに
標しるしを立てて置おかうかな

いや待まて暫しばし待まて暫しばし
太平たいへい柿がきは古いにしより

食くてはならぬと里人さとびとが
よつく承知しょうちの上うへなれば

私わしの様やつなる周章あわてもの者もの
よもや一人ひとりも此島このしまに

必かならず住すんで居をらうまい
そんな事ことして暇ひまを取とり

肝腎かんじん要かなめの神業しんげふに
ガラリ外はづれて了しまうたら

聖地せいちへ歸かへり玉照彦たまてるひこの
嚴いつの命みことや玉照姫たまてるひめの

瑞みづの命みことの御前おんまへに
どうして言いひ譯わけ立たつものか

國くに依より別わけも今日けふよりは
心こころの底そこから立た直なほし

茶目式ちやめしきからかひ薩張さつぱりと止やめて眞面目まじめになりませう

天然てんねんホテルの入口いりぐちで若彦わかひこ、常楠つねくす兩人りやうにんに

向むかつて茶目式ちやめしき發揮はつきなしハリス山ざんの龍神たつがみの

化ばけた女神めがみと偽いつはつて悦えつに入いつたるその罰ばちで

俄にはかにこんな失敗しつぱいを神かみから言いひつけられたのだ

あゝ後おくれしか後おくれしか嘸さぞ今頃いまごろは言依別ことよりわけの

神かみの司つかさや若彦わかひこが常楠つねくすさまと諸共もろともに

人ひとは見みかけによらぬもの國依別くによりわけの宣傳使せんでんし

立派りっぱな奴やつぢやと思おもうたに神かみの禁きんじた柿かきを喰くひ

谷たにに落おちこみ他の手ひとてにかかつて救すくはれ何なんの態さま

神かみの司つかさと云いひ乍ながら有名無實いうめいむじつのタワケ者もの

チャール、ベースの兩人りやうにんに決けつして罪つみはない程ほどに

口くちの賤いやしい國依くによりの【わけ】が分わかからぬその爲ために

あれ文だけくろし苦くろしい目めに會あうた常楠つねくすさまの報告ほうこくで

ヤツと安心あんしんしたものの 可哀相かはいさうなは兩人りやうにんぢや

國依別くによりわけは神勅しんちよくを 叛そむいて神かみの冥罰めいばつを

喰くつたのなれば何どうならうと 假令たとへし死しんでも構かまはない

二人ふたりの奴やつを助たすけたい なぞと今頃いまごろ三人さんにんは

首くびを鳩あつめてひそびそと 小田原評定をだはらへうぢやうの最中さいちゆうだる

あゝ惟神かむながらかむながら々々 御靈みたまの幸さちを蒙かづむりて

空中飛行くうちゆうひかうの曲藝きよくげいを うまく演えんじた吾々われわれは

お蔭かげで生命いのちに別條べつてうなく シヤンシヤンここ迄までやつて來きた

言依別ことよりわけや若彦わかひこも よもやこれ丈達者だけたつしやぞと

思おもひ初そめては居をられまい 其處そこへ又ツクリ顔かほ出だせば

死しんだ我子わがこが我家わがいえに 笑わらつて歸かへつて來きたやうに

悦よろこび勇いさんで呉くれるだる オツトドツコイ言いひ過すぎた

又茶目式またちやめしきになりかけた 直日なほひに見直みなほし聞直ききなほし

宣のり直なほしませ天津神あまつかみ 國津御神くにつみかみの御前おんまへに

國くに依より別わけが生命せいめいを
 助たすけられたる嬉うれしさに
 感謝かんしゃの歌うたを奉たてまつる
 手ての舞まひ足あしの踏ふむところ
 知らしずと云いふは此この事ことか
 餘あんまり嬉うれしうて持もち前まへの
 茶ち目やめがで出きて來きて脱だつ線せんし
 不ふ都つ合がな事ことを云いひました
 幾いく重へにも御お詫わび申まをします
 朝あ日さひは照てるとも曇くもるとも
 月つきは盈みつとも虧かくるとも
 假たとへ令だい地ちは沈しづむとも
 今こん度どの事ことに懲こり々こりし
 毛け筋すぢの巾はばの横よこ幅はばも
 反そむかず神かみの御み教をしへを
 必かならず守まもり奉たてまつる
 あゝ惟かむ神ながら々かむ々ながら
 御み靈たま幸さちはひましませよ㊀

と元げん氣きに任まかせて聲こゑ高たからかに歌うたひ乍ながら、足あし竝なみ揃そろへて奥おくへ奥おくへと進すすみ行ゆく。
 (大正一一・七・二五 舊六・二 外山豊二録)

第四篇 龍神昇天

第一二章 湖上の怪物〔七九四〕

言依別は若彦と共に、途中に國依別の身に對し、斯かる變事ありとは夢にも知らず一心不亂に神言を奏上し乍ら、千疊敷の岩石、彼方此方に伍列する谷間に、漸く辿り着き、目を放てば紺碧の淵、際限もなく山と山との谷間に押し擴がり、風も無きに波高く立ち騒いで居る。一見して實に凄慘の氣に襲はるる如くである。言依別は後振り返り、言依別「若彦さま、ここは琉と球との寶玉を持つて居る龍神の棲處でせう」若彦「ハイ左様で御座います。今日は大變に浪が荒れて居ります。屹度途中に於て國依別、常楠が、何か神慮に叶はぬ事を行つたのではあるまいかと、氣に掛つてなりませぬ。……アレアレ御覽なさいませ。此無風地帯に浪は増々荒くなつ

て来たではありませぬか。アレアレ山の如き波が立つて来ました

言依別「成程、此湖水は餘程趣きが違つて居ります。此波の立つ様子から考へて

も、貴き龍神が潜伏して居られるのは明かであります。併し乍ら國依別や常楠其

他の方々は、如何なつたのでせうか。大變に遅いぢやありませんか

若彦「途中に於て、龍神の守護すると云ふ太平柿が、枝もたわわに實のつて居り

ましたが、大方彼の柿でも國依別さまが取つて喰ひ、龍神の怒りに觸れて、一騷

動をオツ始めて居るのではありますまいかと氣が氣でなりませぬ

言依別「あの男は茶目式で、擲掬専門より外に藝能のない男だ。然し淡泊で正直

で面白い奴だから、人の恐れる柿を取つて見ようなぞと、瘦我慢を出したのかも

知れませぬよ。常楠翁は實に眞面目な人だから、矢張國依別の巧い口に乗せられ

て、犠牲を喰つて居るのでせう。何は免もあれ一同無事な様に此處で祈願を致し

ませう

と兩手を合せ、湖面に向つて兩人は天津祝詞を奏上し、天の數歌を唄ひ上げて稍

時を費やした。

木の間に漏れて笠が揺ついで来る。よくよく見れば常楠は只一人、息せききつて登り来り、二人の前に手を突いて、

常楠「ドウも御待たせ致しました。嘸御退屈で居らせられたでせう。これには少し譯が御座いますので、ツイ時間を潰しました。どうぞ御赦しを願ひたう御座います」

言依別「大方國依別が、龍神の柿を採つて喰つたのぢやありませんか」

常楠「ハイ其爲めに大變な珍事突發致し、イヤもう氣を揉みましたが、稍安心する事が出来ましたので、取るものも取り敢ず、此處迄急いで登つて参りました」と息をつぎつぎ苦しさに物語る。言依別は膝を進め猶も次から次へと、詳細に尋ねた。常楠は有りし事も一切包まず隠さず物語つた。

三人は又もや國依別の無事を祝し、再び感謝祈願の祝詞を奏上しつつあつた。其處へ以前の歌を歌ひ乍ら、意氣揚々として國依別は、チャール、ベース外五人を引き連れ、三人の前に現はれ、頭を掻き乍ら、

國依別「イヤどうも、長らく御待たせ申して申譯が御座いませぬ。様子は残らず

常楠翁つねくすをうから御聞取おききとりの事ことと存ぞんじますれば、何なにも申まを上げませぬ。これにて私わたしも副守護ふくしゆご神んの茶目坊ちやめぼうが悉皆退散しつがいたいさん致いたしまして、本當ほんたうに眞摯しんしな、率直そつちよくな、清廉せいれんな、潔白けつぱくな、勇壯ゆうさう活潑かつぱくな人物じんぶつに生うれ代かはりました」

若彦わかひこ「アハ、ハ、ハ、ハ、國依別くによりわけさま、茶目坊ちやめぼうは……益々ますます猛烈ひどくなつたぢやありませんか」
國依別くによりわけ「燈火とうくわの滅めつせんとするや其光殊そのひかりことに強つよし……とか云いつて、副守ふくしゆの奴やつ、今いまや滅亡めつぼうの斷末魔だんまつまの悲痛ひつうの叫さけびで御座ございます。實じつに「悲痛ひつうこい守護神しゆごじんで、國依別くによりわけも誠まことに迷惑めいわくせんばん。チャール、ベースの兩人りやうにんも、鰻うなぎの如ごとく腹膨はらふくれ、臨月りんげつの女房にようぼうが三ツ兒みつこ腹はらを抱かかへた様な體裁ていさい、ウンウンキヤアキヤ唸うなり通とほし、揚句あげくにや皮癬搔ひぜんかいて、おまけに疔瘡かんさうで、陰金いんきん【たむし】で……」

若彦わかひこ「國依別くによりわけさま、又脱線まただつせんしましたぞ。好いい加減かげんに茶目坊ちやめぼうを追おひ出だしなさらぬか」
國依別くによりわけ「何程なにほどチャール、ベース坊ぼうを追おひ出ださうと思おもうても、私わたしに引付ひつついて生命いのちの親おやぢやと思おもうて、副守ふくしゆが放はなれぬのですから仕方しかたがありませぬ……なア、チャール、ベース、若彦わかひこさまの仰有おつしやる通とほり、モウ私わたしの副守護神ふくしゆごじんになる必要ひつえうはないから、トツトと離はなれて下ください」

常楠「オホ、何とまア、戰場に臨んで氣樂な事を言うて居る方だ事」

國依別「強敵を前に控へて横笛を吹き、悠揚迫らざる其態度、これで無くては本

當の言靈戦に参加し、大勝利を贏ち得る事は不可能でせう。アハ、ハ、ハ、ハ」

此時一陣の暴風水面より吹き起り、巨大なる岩石迄空中に巻き上げる勢となつ

て來た。「コリヤ大變」と國依別は、大木の幹に抱付き、一生懸命に聲迄震はせ

て祈念して居る。何故か言依別、若彦、常楠其他一同は、さしもの暴風に裾さへ

も吹かれず依然として其場に端坐して居た。

言依別「國依別さま、強敵を前に控へて、餘裕綽々たる貴下の態度、實に感じ入

りました」

若彦可笑しさを耐へて「キューキュークー」と吹き出して居る。常楠は

眞面目な顔をして控へて居る。

國依別「綽々として根つから餘裕は有りませぬ。神直日、大直日に見直し聞直し

て下さいませ。どうぞ此烈風を止まるやうに御祈念して下さい。あのやうな大岩

石が頭上に落下しようものなら、それこそ五體は微塵になりませう。何だか體軀

の筋肉が細密に活動し初めました」

若彦「國依別さま、何處に烈風が吹いて居りますか。少し風が欲しい位だ。餘り

暑いからなア……貴下の目には風が吹くやうに見えますか」

國依別「ア、どうしても……コリヤ……私はどうかして居るワイ。ほんに矢張風

は吹いて居りませぬなア。大方過去か未來の烈風の慘状が時間空間を超越して、

私の目に映つたのでせう」

若彦「何處迄も徹底した何々ですな、アハ、ハ、ハ、」

と笑ふ。

言依別命は嚴然として、

言依別「サア、國依別さま、是からが正念場だ。今晚は此谷間の湖水を眺めて祈

願を凝らし、龍神の寶玉を受取らねばならない、大切な用でありますぞ。是限り

眞面目になつて善言美詞の一點張り、氣を付けなされませ」

國依別「ハイ」

と淑やかに夢から覺めたる如く、兩手を突き眞面目くさつて、頭を下げて居る。

一同は三間計り距離を隔てて、谷川の湖邊に伍列する岩影に身を忍ばせ、暗祈黙
禱し乍ら時の移るを待つ事とした。

夜は追々と更けて来る。西から東から延長した、山と山との谷間は、二十三夜
の利鎌の様な月、漸く雲を押し分けて昇つて来た。一同は月光に向つて祈願を凝
らし居る際、礫の雨、まばらにパラパラと石を撒くやうに降つて来た。湖面を見
れば幾つともなく、水鉢を竝べた様に水面に凹みを印し、圓き波紋は互に重なり
重なりて、時計の蓋の生地の様に見えて来た。暫くにして大粒の雨は止まつた。
湖底に得も言はれぬ蜒々たる火柱の如きもの横たはり輝き初めた。一同は聲を潜
めて、此光景を見守つて居る。微妙の音楽に引かへ、四邊の谷々山々より何とも
云へぬ殺風景な怪音が一時に響いて来た。大地は唸りを立てて震動し、一同の體
迄がビリビリと響き出した。忽ち四邊は暗澹として咫尺を辨ぜざるに立至つた。
其時忽然として波の上を歩み乍ら、此方に向つて進み来る白色の長大なる怪物
がある。近づくに従つてよくよく見れば、頭髮飽迄白く背後に垂れ、鬚は臍の邊
まで垂らし、顔は紅の如く目は鏡の如く、金色燦然たる二本の角四五寸許りのも

の、額の左右に行儀よく竝立し、耳迄引裂けたる鰐口に金色の牙を剥き出し、何とも言へぬ妙な石原薬罐聲で、

怪物「我こそはハリス山の龍神、大龍別命、大龍姫命の一の眷屬、龍若彦神で

あるぞよ。其方事聖地に於て、玉照彦、玉照姫命より神命を奉じ、琉、球の寶玉

を大龍別命、大龍姫命より受取らんと、遙々此處に来れる事、大神様に於ても止

むを得ずとして、御満足遊ばして御座る。併し乍ら言依別命の幕下に仕ふる、國

依別命、龍神の柿を盗み喰ひし其爲めに、我眷屬共大に立腹致し、斯かる天地の

道理を辨へざる家來を持つ言依別に渡す事は、一つ考へねばならぬと大變な大評

定で御座る。も一度聖地へ歸り、出直して修行を一から行り替へ、改めて二つの

寶玉を御迎ひに參つたがよからうぞ」

若彦「それ見よ、國依別さま、お前一人で皆の者が總崩れになつたぢやないか。

それだから一匹の馬が狂へば千匹の馬が狂うと云ふのだ」

國依別「八釜敷う云ふな。俺が龍若彦に直接談判をやつて、見ん事受取つて歸る。

……コラコラ龍若彦とやら、汝は三五教の宣傳使に向つて、禮儀を知らず不届き

な奴だ。種々と化様もあらうに、其方の失敬千萬なる顔は一體何だ。人に對する時は最も美はしき顔色を以て、笑顔を十二分に湛え、挨拶するが神の禮儀なるに、鬼面人を驚かすと云ふ、其方の遣り方、國依別中々承知仕らぬぞ。これに返答有らば承はらう。……又龍神の柿を採り喰ひしを、汝は非常に罪惡の如く今申したが、彼の柿なるもの、龍神の平素食す可きものなるや返答聞かう。柿は人間の喰うべきもの、人間に次いででは猿、鳥の食す可き物だ。人にも喰はさず、棚にも置かず、「あたら」天與の珍珠を毎年木に腐らし、天惠を無視する大逆無道、國依別：サアこれより言靈の神力を以て、汝等は申すに及ばず、大龍別命、大龍姫命を言向け和し、天晴、琉、球の玉を奉らせ呉れん。此方の言に向つて一言の辨解あるか……一二三四五六七八九十百千萬……

と國依別は自暴自棄になり、背水の陣を張つて力限りに言靈を奏上した。龍若彦命と稱する怪物は、次第々々に容積を減じ、遂には豆の如くになつて消えて了つた。國依別は、

國依別「アハ、ハ、ハ、コレ若彦さま、御心配御無用になされませ。これより國依

別、飽迄も言靈を以て奮戦し、目的の琉、球の寶玉を受取つて見せませう。最早
吾々に渡す可き時機が到來したのだ。さうでなくては大神の直司なる、玉照彦様、
玉照姫様が何しに教主に御命令あるものか。此龍神執着心未だ晴れやらず、小さ
き事に「かこ」付けて、すつた揉んだと一日なりとも永く手に持たんと、吝嗇な
奴根性から申して居たのである。……ヤアヤア湖底にある龍神、よつく聞け。
三五教の神の司言依別命、國依別命、若彦、常楠の四魂揃うて玉受取りに向うた
り。時節には叶ふまい、速かに我前に持來り目出度く授受を終れツ
と大喝した。此時の國依別の顔面は、四邊を射るが如く崇高なる權威に、何處と
なく充されて居つた。

(大正一一・七・二五 舊六・二 谷村眞友録)

第一三章 龍の解脱(七九五)

おほわたなか
大海中に浮びたる

ほまれ
譽も高き琉球の

たまひそ
玉の潛みし神の島

さんぜんせかい
三千世界の梅の花

いちど
一度に開く時來り

あや
綾の聖地に宮柱

ふとしき
太敷立てて千木高く

しづ
鎮まりゐます巖御靈

みづ
瑞の御靈の神勅を

たまてるがみ
玉照神の二柱

うまら
完全に詳細に受け給ひ

みづ
瑞の御靈の御裔なる

ことよりわけ
言依別に言依さし

しほみつだま
潮満玉や潮干の

うづ
珍の寶を索めんと

けうしゆみづか
教主自ら國依別の

をしへ
教の司を引き率れて

なみぢ
浪路を遙に乗り渡り

やうや
漸う此處に來て見れば

われ
我より前に紀の國の

わかひこ
若彦始め常楠が

かみ
又もや神の御勅宣

まさ
正しく受けて逸早く

きた
來り居ませる尊さよ

てん
天を封じて立ち竝ぶ

けやき
櫻の楠の森林に

すぐ
勝れて太き榎の幹

てんねんしぜん
天然自然の洞穴に

若彦、常楠兩人は 木俣の神と現はれて

島人等を大神の 稜威に言向け和しつつ

時の来るを待つ間に 言靈清き言依別の

瑞の命の大教主 國依別と諸共に

來りましたる嬉しさに 若彦、常楠勇み立ち

ハリス山の山奥に 心も勇む膝栗毛

鞭撻ち進む谷の奥 湖水の前に着きにける

四邊は闇に包まれて 礫の雨は降りしきり

物凄じき折もあれ 闇の帳を引き開けて

波上を歩み進み來る 怪しの影を眺むれば

髭蓬々と胸に垂れ 雪を欺く白髪は

長く背後に垂れ下り 眼は鏡の如光り

朱を濺ぎし顔の色 耳迄裂けた鰐口に

黄金の色の牙を剥き 四五寸許り金色の

角を額ひたいに立たて乍ながら ガラガラ聲こゑを張はりあげて

怪あやしき舌したをニヨツと出だし 言依別ことよりわけの一行いっかうに

向むかつて叱言こことを言いひ掛かける 叱言こことの條すぢは龍神たつがみの

守まもると聞きえし太平柿たいへいがき 國依別くによりわけが畏かしこくも

盗ぬすんで食くつたが罪つみなりと 執着しふちやくしん心の鬼神おにがみが

力ちから限かぎりに罵倒ばたふして 琉りうと球きうとの寶玉ほうぎよくを

渡わたさじものと繩なはを張はる 魔神まがみの張はりし鐵條網てつてうまう

手ても無なく切きつて呉くれんずと 磊落らいらく不羈ふきの神司かむつかさ

國依別くによりわけが言靈ことたまの 打うち出だす誠まことの砲擊はうげきに

流石さすがの魔神まがみも辟易へきえきし おひおひ姿すがたを縮小しゆくせうし

豆まめの如ごとくになり果はてて 遂つひにあえなく消きえにける。

あゝ惟神かむながらかむながら々々 御靈みたま幸さちはひましまして

金剛こんがう不壞ふゑの如意寶珠によいほつしゆ 國依別くによりわけが丹田たんてんに

祕ひめ隠かくしたる言靈ことたまの 力ちからに刃向はむかふ楯たてはなし

我われは正義せいぎの銚ほことりて 天地てんちの神かみの大道だいだうを

高天原たかあまはらの神かみの國くに 豊葦原とよあしはらの瑞穂國みづほくに

大海原おほうなばらの底そこまでも 照てらし渡わたさにや置おくべきか

國くに依より別の言靈ことたまは 筑紫つくしの日向ひむかの橘たちばなの

小戸をどの青木ケ原あはぎがはらと鳴なる 神伊邪那岐大神かむいざなぎのおほかみが

珍うづの伊吹いぶきになりませる 祓戸はらひ四柱よはしら大御神おほみかみ

瀬織津姫せおりつひめや伊吹戸主いぶきどぬし 珍うづの大神おほかみ始めとし

速秋津姫神はやあきつひめのかみ 速佐須良姫神はやさすらひめのかみ

此處ここに四柱よはしら宣傳使せんでんし 此神等このかみたちの生宮いきみやと

なりて現あらはれ來りけり 大龍別おほたつわけや大龍姫おほたつひめの

珍うづの命みことの龍神たつがみよ 是これの天地てんちは言靈ことたまの

助たすくる國くにぞ生いける國くに 幸さちはひみます國くになるぞ

天あまの岩戸いはとの開あけ放はなれ 根底ねそこの國くにも明あきらかに

澄すみ照てり渡わたる今いまの世よに 潮満珠しほみつたまや潮干しほひるの

ふた 二つの珠を何時までも 抱きて何の益がある

このよ 此世を救ふ瑞御靈 神の任しの兩人に

をし 惜まず隠さず轟々と 汝が姿を現はして

は や獻れ惟神 神は我等と俱にあり

たとへちひろ 假令千尋の水底に 何時迄包み隠すとも

あななひけつ 三五教の我々が 此處に現はれ來し上は

ただひととき 只一時も一息も 躊躇ひ給ふ事勿れ

あゝ 惟神々々 御靈幸はひましませよ

ひと 一、二、三、四、五、六、七、八、九、十たらり

もも 百、千、萬の神人を 浦安國の心安く

かきはときは 堅磐常磐に守らんと 神の任しの此旅路

うべ 諾なひ給へ逸早く 早く早くと宣りつれば

いままでつつ 今迄包みし黒雲は 四邊隈なく晴れ渡り

なみ 浪を照らして一團の 火光は徐々兩人が

佇む前まへに近ちかづきて

忽たちまち變かはる二柱ふたはしら

尊たふとき女神めがみと相現あひげんじ

満面まんめん笑えみをふく含みつつ

言依別ことよりわけや國依別くによりわけの

二人ふたりの前まへに手てを束つかね

地つちより湧わき出づる玉手箱たまてばこ

各おのおの一個いっこを兩りやうの手てに

捧ささげて二人ふたりに獻たてまつり

綾羅れうらの袖そでを翻ひるがへし

忽たちまち起おこる紫むらさきの

雲くもに乗じやうじて久方ひさかたの

大空おほぞら高たかく天あまの原はら

日ひの稚宮わかみやに登のほり行ゆく

執し着ぢやく心の深ふかかりし

大龍おほたつわけ別わけや大龍おほたつひめ姫ひめの

珍うづの命みことの兩神りやうしんも

愈いよいよ茲こゝに三千年みちとせの

三寒さんかん三熱さんねつ苦行くぎやうを終をへ

神かみの惠めぐみに救すくはれて

茲こゝに尊たふとき天津神あまつかみ

皇大神すめおほかみの御右おんみぎに

坐あまして清きよき神國かみくにの

常世とこよの春はるに會あひ給たまふ

實げにも尊たふとき物語ものがたり

語かたるも嬉うれし今日けふの宵よひ

陰曆いんれき六月ろくごわつ第二日だいにち

松雲閣しよつんかくに横臥わうぐわして

團扇片手に拍子とり　　さも諄々と述べて置く

筆執る人は「北村」氏　　神の稜威も「隆光」る

三五教の御教の　　榊となれば望外の

喜びなりと記し置く　　あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ。

國依別の言靈に龍若彦と稱する怪物は忽ち雲散霧消し、再び現はれ來る大龍別、

大龍姫は各手に琉、球の玉を納めたる玉手箱を、言依別、國依別の手に恭しく捧

げ三千年の三寒三熱の苦行を茲に終了し、一切の執着を去つて、悠悠として紫の

雲に乗り、天津日の稚宮に上り、大神の右に座し、天の水分神となつて降雨を調

節し給ふ大神と成らせ給うたのである。

清き正しき言靈は一名金剛不壞の如意寶珠とも言ふ。此天地は言靈の幸はひ助

け、生き働く國である。宇宙間に於て最も貴重なる寶は聲あつて形なく、無にし

て有、有にして無、活殺自由自在の活用ある七十五聲の言靈のみである。之を靈

的に稱ふる時は即ち金剛不壞の如意寶珠となる。天照大御神の御神勅に「言向け和せ、宣り直せ」とあり、之は神典古事記に明かに示されてある。天の下四方の國を治め給ふは五百津美須麻琉の玉にして、此玉の活動く時は天ヶ下に饑饉もなく、病災も無く戦争も無し又風難、水難、火難を始め、地異天變の虞なく、宇宙一切平安無事に治まるものである。

又、今此處に言依別、國依別の二柱の龍神より受取りたる琉、球の二寶は、風雨水火を調節し、一切の萬有を攝受し或は折伏し、よく攝取不捨の神業を完成する神器である。

ここに言依別命を始め、一同は湖水に向つて天津祝詞を奏上し、天の數歌を歌ひ上げ宣傳歌を歌ひ乍ら、心地よげに元來し道を下りつつ、槻の洞穴に一先づ歸る事となつた。

言依別の一行は
千疊岩の碁列せる

龍の湖水を後にして
奇勝絶景縫ひ乍ら

足に任せて降り行く
登りに引き替へ下り坂

思うたよりも速かに
何時の間にかは龍神の

守り居たると傳へたる
太平柿の邊まで

歸り来れば常楠は
フト立ち留り一行を

顧み乍ら『教主さま
國依別神さまが

大蛇の群に襲はれて
太平柿の頂上より

身を躍らして青淵に
ザンブと許り飛び下り

假死状態となり果てて
渦に巻かれて流れたる

改心記念の靈場ぞ
負けぬ氣強い國依別の

神の司は反對に
龍若彦に逆理屈

いとも立派に喰はして
凹ませ給ひし健氣さよ

あゝ惟神々々
斯うなる上は常楠も

神の心が分らない
善惡正邪の標準を

如何して分けたら宜からうか
お裁き頼む』と宣りつれば

言依別は打ち笑ひ

□ 國依別の言靈は

天地の道理に適ひたり

善に墮すれば惡となり

惡の極みは善となる

善惡同體此眞理

胸に手を當てつらつらと

直日に見直し聞直し

人の小さき智慧もちて

善惡正邪の標準が

分らう道理のあるべきや

此世を造りし大神の

心に適ひし事ならば

何れも至善の道となり

其御心に適はねば

□ 即ち惡の道となる

人の身として同胞を

裁く權利は寸毫も

與へられない人の身は

只何事も神の手に

任せ奉るに如くはない

いと細やかに説きつれば

國依別や若彦も

常楠翁も勇み立ち

心欣々一行は

黄昏過ぐる宵の口

楠と槻との森林に

極めて廣き天然の

ホテルにこそは歸りけり
あゝ惟神々々
御靈幸はひましませよ。

(大正一一・七・二五 舊六・二 北村隆光録)

第一四章 草枕〔七九六〕

雲くもにそびゆる比治山ひぢやまの麓ふもとに清きよき比沼ひぬま眞ま奈な井い
豊國とよくに姫ひめの永遠とことはに鎮しづまりぬます聖場せいぢやうに
朝あさな夕ゆふなに仕つかへたる心こころの色いろの照てる子こ姫ひめ
身み魂たまもきよすぐれて清子きよこ姫ひめ神かみの御言みことを蒙かうむりて
三五あななひけつ教せんの宣傳使でんし梅子うめこの姫ひめを始はじめとし

初稚姫や玉能姫

玉治別の一行が

海洋萬里の波の上

永久に浮べる龍宮の

一つ島なる諏訪の湖

麻邇の寶珠を永久に

守り玉ひし玉依姫の

神の命の御手より

手づから受けて八咫鳥

黄金の翼に跨りて

大空高く翔めぐり

十重に二十重に包みたる

天の岩戸も秋山彦の

人子の司の珍館

常磐の松の茂り生ふ

御苑に降りますと聞き

二人の女神は大神に

許しをうけて【久次】の

錦織なす里を越え

四方の【峰山】紅葉して

行く手の道も【長善寺】

【大野】、【山田】を乗り越えて

神の【宮津】に着きにけり

天津御神の【神宮】を

右に拜してスタスタと

【岩淵】、【文珠】、【紅葉坂】

荒波たける磯端を

【由良】の港に辿りつき

秋山彦の門前に

佇み様子を伺へば

後の祭か十日菊

麻邇の寶珠は逸早く

綾の聖地に安々と

着かせ玉ひしと聞くよりも

二人の女神は氣を焦ち

月の顔「丸八江」の

田舎を過ぎて「田邊」宿

日は又空に「餘の内」

「池の内」をば乗り越えて

山と山との谷間の

日蔭も見えぬ「眞倉」郷

片方の「上杉」月照りて

心も開く「梅迫」や

「西八田」、
「縁垣」、
「味方原」

綾の大橋打渡り

小雲の流れに心膽を

洗ひて進む聖域に

太しき建てる神館

十曜の神紋キラキラと

月の光に反射して

繪にもかかれぬ美はしさ

秋は漸く深くして

木々を染めなす「綾の里」

錦の宮の御前に

やうやう辿りて伏し拜み

玉照彦や玉照姫の

二柱神の御前に
現はれ出でて神勅を

再度請へば言依別の
瑞の命の口を借り

言葉静かに宣らすやう
汝はこれより聖地をば

一日も早く立出でて
南に向ひ瀬戸の海

浪かき分けて琉球の
神の御島に渡れよと

宣らせ玉ひし言の葉を
畏み奉り二人連れ

錦の宮を伏し拜み
小雲の流れを溯り

山路を驅り「鷹栖」や
「山家」、「音無瀬」、「才原」の

細谷路を辿りつつ
流れも「廣瀬」の丸木橋

渡りて進む「和知」、
「本庄」、「中山」、「新田」、「胡麻」の郷

尋ね行くのは「殿田」川
乗せて嬉しき「船岡」の

其行先は「千妻」や
「曾我谷」、「園部」の花の里

「小山」、「松原」後にして
羽はなけれど「鳥羽」の驛

道も「廣瀬」や「八木」の町
深き「川關」、「千代川」の

大川【小川】を打渡り 神の御稜威も【大井】村

【天田】神徳嬉しみて 玉照彦の生れませる

【穴太】の山の奥深く 高熊さして登りゆく

あゝ惟神々々 御靈幸はひましませよ

朝日の直刺す神の山 夕日の日照らす神の峰

三つ葉躑躅の其下に 小判千兩埋けおいた

黄金の鶏の暁を 告ぐる神代を松林

折柄吹来る秋風に 木々の梢は自ら

微妙の音楽奏でつつ 小鳥の歌ふ聲清く

あちらこちらの山柿の 赤き顔してブラブラと

玉照彦の御姿を 今見る如き照子姫

神の寶座も清子姫 岩窟の中に忍び入り

木花姫の神勅を 三七二十一日の

秋の夜長に細々と 教へ諭され兩人は

深き御徳を拜しつつ

山を降りて谷路を

スタスタ降る【山の神】

水音高き瀧の邊に

又もや身魂を洗ひつつ

來勿止神に送られて

松の木の大きさを

封じて暗き【堺山】

息急き登る雄々しさよ

三五の月の光をば

頭上に浴びて【六箇谷】

【犬飼】、【法貴】、【湯屋ヶ谷】

崎嶇たる山路分け乍ら

【止止呂美坂】や【細の川】

又もや渡る【中河原】

【木部】の里をば打過ぎて

思ひも深き【池田】郷

【神田】草鞋も【桑津】村

足や【伊丹】の郷こえて

【稲野】、【常吉】向う脛

秋の芒に傷つけて

屢休む【柴野村】

日は早空に【西の宮】

茲に一夜を宿りつつ

朝日と共に【打出】て

【葦尾】痛めん憂もなく

無事に進むは大神の

ましさく【本庄】、【御影町】

【生田の森】に名も高き 稚姫君の祀りたる

玉能の姫の神館 一夜を爰に明かしつつ

心も勇む駒彦にいと親切に歡待なされ

【兵庫】の【港】に進み行く 濱邊に繋ぎし新船を

代價を呉れて買ひ取りつ 誠【明石】の海の面

波【高砂】の浦を越え 【家島】、【西島】、【小豆島】

左手に眺めて【豊の島】 【兒島半島】のそば近く

進む折しも暗礁に 船乗りあげて兩人は

如何はせんと村肝の 心を苦しむ折柄に

月照る波を分け乍ら 此方に向つて馳來る

一つの船に助けられ 茲に二人の姫神は

危き所を救はれて 神のまにまに龍宮の

石松茂る磯端に 船を繋ぎて上陸し

莓の實る山路を 一行四人の男女連れ

常楠翁つねくすをうの住家すみかなる 目出度めでたき人ひとに大槻おほつきの
天然てんねんホテルに着つきにけり。

(大正一一・七・二七 舊六・四 松村眞澄録)

第一五章 情意投合じやういとうがふ(七九七)

虻あぶ、蜂はちの兩人りやうにんは生田いくたの森もりに立寄たちより、駒彦こまひこに面會めんくわいして、言依別ことよりわけの教主けうしゆが國依別くによりわけと
共に高砂たかさこの島しまに神務しんむを帶おび、急遽きふきよ聖地せいちを立たちて出發しゆつぱつせられ、瀬戸せとの海うみを、西南指せいなんさ
して行ゆかれたりと云いふ消息せうそくを、例れいの高姫たかひめが聞ききつけ、春彦はるひこ、常彦つねひこの一行いっかう三人さんにん、言
依別よりわけの後あとを追おひしと聞ききしより、茲ここに虻あぶ、蜂はちの二人ふたりは、取とる物ものも取敢とりあへず、一隻いっさうの
輕舟けいしうに身みを任まかせ、高姫たかひめが教主けうしゆに對たいし、如何いかなる妨害ぼうがいを加くはふるやも計はかり難がたしと、一
生懸命やうけんめいに高姫たかひめの後あとを探たづねて漕こぎ出いだし、兒島半島こじまはんとうの沿岸えんがんに差さしかかる時とき、暗礁あんせうに乘のり

上げたる一隻の船を見付け、何人ならんと星の光に透かし見れば、比沼の眞奈井の寶座に仕へ居たる、清子姫、照子姫の二人であつた。

茲に二人を我舟に救ひ上げ、半破れし其舟を見棄て、荒波を勢よく漕ぎつけて、

漸く琉球の那覇の港に安着し、一行四人は何者にか引かる様な心地して、其日

の夕べ頃常楠、若彦兩人が一時の住居となしたる槻の木洞窟の前に辿りついた。

虻公は既に言依別命より清彦と云ふ名を賜り、蜂公は照彦と云ふ名を賜つて、

准宣傳使の職に就いて居たのである。二人は思ひ掛なく言依別命に抜擢されたの

を、此上なく打喜び、其師恩に酬いん爲、言依別命に對しては、如何なる苦勞も、

假令身命を抛つても惜まざるの決心をきめて居たのであつた。

當の目的物たる高姫一行を、海上にて見失ひたれ共、照子姫、清子姫の遭難を

救ひたるは、全く神の御攝理として稍満足の體であつた。

此照子姫、清子姫は其祖先は行成彦命であつて、四代目の孫に當つて居る。神

勅を受けて、比沼眞奈井に豊國姫出現に先立つて現はれ、比治山に草庵を結び、

時を待つて居たのである。そこへウライナイ教の黒姫に出會し、いろいろとウライナ

イ教の教理を説き聞かされ、半之れを信じ、半之を疑ひ、何程黒姫が辨舌を以て説きつくる共、清子姫、照子姫は魔窟ヶ原の黒姫が館には一回も足をむけず、又高姫などにも會はなかつた。只黒姫の言葉を反駁もせず、善惡を取捨して表面服従して居たのみであつた。此二女の黒姫に對する態度は、其時の勢上已むを得ず、之れ以上最善の態度を執ることが出来なかつたのである。

時に豊國姫命の神勅、此二人に降り、諏訪の湖の玉依姫より麻邇寶珠を受取り、梅子姫其他一行が、由良の港の秋山彦が館に歸り來り、神素盞鳴大神、國武彦命の出でますと聞きて、二人は旅装を整へ、由良の港の秋山彦の館に出で來りし頃は、最早麻邇寶珠は聖地に送られ、神素盞鳴大神、國武彦命の御行方も分らなくなつた後の祭りであつたから、二人は時を移さず、陸路聖地に向ひ、錦の宮の玉照彦、玉照姫の神司に謁し、琉球の島に渡るべく、再び聖地を立ち、玉照彦命の出現地なる高熊山に立籠もり、三週間の改めて修業をなし、木花姫の神教を蒙りて、意氣揚々と山坂を越え、生田の森に立寄り、それより兵庫の港を船出して、琉球に向はんとし、神の仕組か、思はずも兒島半島の手前に於て暗礁に乗りあげ、

危険極まる所へ、三五教の新宣傳使、清彦、照彦の舟に助けられ、漸く那覇港に四人連れ安着し、槻の洞穴の前迄進んで来たのである。

四人の男女は小さき船にて長途の航海をなす間、何時とはなしに意氣投合し、互に意中の人を心に深く定めて居た。清子姫は清彦に、照子姫は照彦に望みを囑して居た。然るに清彦は又照子姫に、照彦は清子姫に望みを囑し、將來夫婦となつて神業に参加し度く思つて居たのである。清彦は四十四五才、照彦は四十二三才の元氣盛り、清子姫は二十五才、照子姫は二十三才になつて居た。年齢に於て二十年許り違つて居る。されど神徳を蒙りて誠の道を悟りたる清彦、照彦は、全身爽快の氣分漲り、血色もよく比較的若く見え、夫婦として一見餘り不釣合の様にも見えなかつたのである。

四人は一夜を此處に明かさんと、洞穴の奥深く進んだ。サヤサヤした葦蕈の疊、土間に敷きつめられ、食器など行儀よく並べられてあつた。

清彦「あゝこれは何人の住家か知らぬが、穴居人種の多い此島に、木株のこんな天然の館があるとは、大したものだ。何でもこれは此邊りの酋長の住家が分らな

いぞ。斯様な所にうつかりと安眠して居る所へ、澤山の眷族を連れ、歸り來つて立腹でもしようものなら、どんな事が突發するか知れたものだない。入口は一方、グツグツして居ると、徳利攻めに會うて苦しまねばならぬ。コリヤ一人宛、互に入口に立番をし、もしも怪しき奴がやつて來たら合圖をすると云ふ事にしようかなア

照彦「それもさうだ。併し乍ら先づ路々むしつて來た此の葎を夕食に濟ませ、其上の事にしても餘り遅くはあるまい。そろそろそこらが暗くなつて來たようだと懐より火燧を取り出し、そこらに積み重ねたる肥松の割木に火をつけ明りを點じ、夕食を喫し、家へ歸つた様に氣分になつて、四人は奥の方に安坐し、種々と感想談に耽つて居た。

清彦「こうして我々男女四人、此島に渡つた以上は、何れも獨身生活は不便なものだ。恰度諾册二尊が自轉倒島に天降り玉うた様なものだ。此大木を撞の御柱と定めて、……あなにやしえー乙女……とか……えー男……とか云つて、惟神の神業を始めたら如何でせう。……照彦さま、私は媒酌人となつて、清子姫様と結婚の式

をあげられたらどうです。ナア清子姫さま、あなたも以時迄も獨身で斯様な蠻地に暮す譯にも参りますまい」

清子姫「ハイ、有難う御座います。併し乍ら少し考へさして頂きたう御座います」

清彦「清子さま、あなたは照彦さまがお氣に入らぬのですか」

清子姫「イーエ、勿體ない、左様な譯では御座いませぬ」

と涙ぐまし氣に俯むく。

照彦「コレコレ清彦、御親切は有難いが、モウ結婚の事は言つて呉れな。清子さ

まは此照彦がお氣に召さぬのだよ。無理押しに決行した所で、【うま】の合はぬ

夫婦はキツと後日破鏡の歎きに會はねばならぬから、此話は止めて貰はう。就

ては照子姫さまを、お前の奥さまに御世話したいと思ふのだが、どうだ」

清彦「それは實に有難い、併し乍ら照子姫さまの御意見を承はりたい。其上でな

くば、何とも返答する事が出来ないワ」

照子姫「照彦さまの御親切は有難う御座いますが、妾は何だか……どこが如何と

いふ事はありませぬが、清彦さまは蟲が好きますせぬワ。妾の意中の人は露骨に言

ひますが、照彦さまで御座います。あなたならばどこまでも、偕老同穴の契を結んで頂きたう御座います」

照彦「コレハコレ八大變な迷惑で御座る。實の所は此照彦、清子姫様と夫婦の約束が結びたいのです。それに清子さまは何とか、かんとか仰有つて、私を御嫌ひ遊ばす様な形勢です」

清子姫は「ホ、ホ、ホ、」と袖で顔をかくし、

清子姫「妾も本當は清彦さまと夫婦になつて、神界の御用が致したう御座います。

照彦さまと夫婦になるのは、何だか身魂が合はない様な氣分が致します」

清彦「互に目的物が斯う複雑になつて居ては仕方がない。ハテ困つたな。此方が

好だと言へば向ふが嫌ひだと云ふ、此方が嫌ひだといへば一方が好だと云ふ。此

奴アどうやら人間力で決める事は出来ないワイ。言依別命様でも御座つたならば、

判断をして定めて貰ふのだけれど、斯様な結構な洞穴館に、誰も居らぬことを思

へば、言依別の神様は、琉、球の寶玉を手に入れ、早くも出發された後と見える。

ハテ……困つたなア」

四人は互に顔を見合せ、青息吐息の眞最中、洞穴の入口に二三人の聲が聞えて

来た。清彦は耳敏くも之を聞付け、

清彦「ヤアあの聲はどうやら、高姫の聲らしいぞ。一寸調べて来るから、三人仲

よく待つて居て下さい」

と早くも洞穴の入口に立つた。

外には高姫、春彦、常彦と共に怖相に洞穴を覗いて居る。月明かりに三人の顔

はハツキリと見えた。されど高姫の方からは、清彦の姿は少しも見えない。清彦

は傍の小石を拾ひ、左右の手に持つて中よりカチカチと打つて見せた。

高姫「大變な大きな空洞であるが、何か此中に獣でも棲まつてゐるやうな氣配が

致しますぞ。……常彦、一寸お前、中へ這入つて調べて来て下さらぬか」

清彦中より「カチカチカチ」、

常彦「ハハ、ここはカチカチ山の古狸が住居して居る洞穴と見えますワイ。……

……オイ春彦、お前、斥候となつて一つ探險して来たら如何だ」

春彦「お前に命令が下つたのだ。狸の巢窟へ「キ」常彦が這入るのは當然だよ。

マア君子くんしは危あやふきに近ちかよらずだ。命めい令れいも受うけないことを、危きけん險けんを冒をかして失しつぱい敗ぱいしては、

それこそ犬いぬに喰くはれた様やうなものだ

高たか姫ひめ「春はる彦ひこ、お前まへも一いつ緒しよに探たん險けんに這はい入いつて來くるのだよ

春はる彦ひこ「たかが知しれた此この洞どう窟くつ、さう二人ふたりも這はい入いる必要ひつえうはありますまい

高たか姫ひめ「ア、さうだらう。そんなら一人ひとりで良よいから、春はる彦ひこさま、お前まへ豪がう膽たん者ものだから

這はい入いつて下ください

春はる彦ひこ頭あたまをかき乍ながら、

春はる彦ひこ「へー……ハイ

とモジモジして居ゐる。「カチカチ カチカチ ウー」と唸うなり聲こゑが聞きえて來くる。

春はる彦ひこ「モシモシ高たか姫ひめさま、此こ奴いつア一人ひとりでは如ど何うしても往ゆきませぬワ。あの聲こゑを聞き

いて御ご覽らん、數すう十じゅう匹びきの猛まう獸じうがキツと潛ひそんで居ゐますよ。グツグツして居ゐると、一いちも取と

らず二にも取とらずと虹あぶ蜂はち取とらずになつて了しまひますぜ

高たか姫ひめ「其その虹あぶ蜂はちで思おもひ出だしたが、彼あ奴いつは何なんでも言こと依より別わけ命のみことから、清きよ彦ひこ、照てる彦ひこと云いふ名な

を頂いたき宣せん傳でん使しになり、飽あく迄まで我われ々われに反はん抗かう的てき態たい度どを執とると云いつて居ゐたさうだが、今いま

どこに如何して居るだらう。言依別命が此琉球へ渡り、琉と球との寶玉を手に入
れ、自分の隠した七個の玉と共に、高砂島へ持ち渡つて、高砂島の國王となる計
畫だと聞いて居る。自轉倒島では此高姫の日の出神の生宮が、目の上の瘤となつ
て思はしく目的が立たぬので、高姫の居ない地點で野心を遂行すると云ふ考へで、
大切な寶玉を盗み出し、自轉倒島を立去つたのだから、假令言依別、天を翔けり
地を潛るとも、草を分けても探し出し、寶玉を取返し、さうして彼が面皮を剥い
て、心の底より改心さしてやらねば、我々の系統としての役目が濟まぬ。ア、年
が寄つてから、又しても又しても海洋萬里の波を渡り、苦勞を致さねばならぬの
か。これも全く言依別の肉體に惡の守護神の憑依してゐるからだ。……ア、惟神
靈幸倍坐世。一時も早く言依別の副守護神を退却させ、誠の大和魂に立返つて、
日の出神の命令を聞く様にして下さいませ」
と半泣聲になり、鼻を啜つて兩手を合せ、一生懸命に祈願して居る。清彦は此態
を見て俄に可笑しくなり、「プーッ、プーッ」吹き出し、終ひには大聲をあげて、
清彦「ワツハ、ハ、ハ、ハ」

と笑ひ轉けた。

高姫「誰だ。日の出神の生宮が神界の爲、一生懸命御祈願を申し上げてるのに、

ウフ、アハ、と笑ふ奴は……よもや狸ぢやあるまい。何者だ。サアこうなる

上は高姫承知致さぬ。此入口を青松葉でくすべてでも往生さしてやらねば措かぬ。

……コレ常彦さま、春彦さま、そこらの、青いものを持つて來なさい。コラ大變

な劫經た古狸が居るのだ。四つ足が劫經ると人語を使ふやうになるからなア」

清彦俄に女の聲を出し、

清彦「コレハコレハ高姫様、常彦、春彦の御兩人様、遠方の所遙々と能くこそ御

越し下さいました。ここは琉球王の假館、木の丸殿と云ふ所で御座います。王様

は……言依別神様とやらが、自轉倒島から遙々御越しになり、琉と球との寶玉を

御受取り遊ばし、臺灣に一寸立寄り、それから南米の高砂島へ御越しになりましたし

た不在中で御座います。妾は蛇……オツトドツコイ、危い猛獸毒蛇の澤山に棲息

する此島に留守を守つて居る大蛇姫と云ふ、夫は夫は厭らしい女で御座います。

サア御遠慮は要りませぬ。此洞穴には澤山な古狸や大蛇が住居を致し、今日の所

綺麗な男が二人、綺麗な女が二人、四魂揃うて守護を致してをります。併し乍ら何れも本當の人間では御座いませぬ。皆化物で御座いますから、其お心算で御這入りを願ひます。メツタにあなた方を鹽をつけて頭から咬んだり、蛇が蛙を呑むやうにキユウキユウと呑み込むやうな事は御座りませぬ。如意寶珠の玉でも呑み込むと云ふ不可思議力を備へた貴女、早く御這入り下さいませ」

高姫「這入れなら這入つてもあげませう。併し一遍外へ姿をあらはし、案内をなさらぬか」

清彦「外へ出るが最後、蛇公の正體が現はれますワイ。アツハ、ハ、ハ」

高姫「最前から何だか可笑しいと思つて居つた。お前は淡路の東助の門番をして居つた泥坊上りの蛇公ぢやないか。如何して又斯んな所へやつて來たのだ。お前はドハイカラの教主から、清彦と云ふ名を貰うたぢやないか。自轉倒島では最早泥坊が出來ないと思つて、こんな所まで海賊を働き漂着して來たのだらう。サアお前一人ではあるまい、大方蜂も來て居るだらう。其他の同類は残らず此處へ引張つて來なさい。天地根本の誠の道を説いて聞かせ、大和魂をねりなをして助け

て上げよう。事と品によつたら此高姫が家來にしてやらぬ事もない」

清彦「今お前さまに這入られると、實は困つた事があるのだ。今日は情意投合……

……オツトドツコイ情約履行をしようと言ふ肝腎要な吉日だ。お前さまのやうなお

婆アさまは我々壯年者の心理は分るまい。あゝエライ所へエライ奴が來たものだ。

月に村雲花に嵐、美人の前に皺苦茶婆ア……」

と小聲に呟いた。高姫は此言葉の一端を耳に入れ、

高姫「ナニ、美人に皺苦茶婆アと言つたなア。コリヤ何でも祕密の伏在する此洞

穴、モウ斯うなる以上は強行的に押入り、隅から隅まで調べてやらねばなるまい。

ヒヨツとしたら天火水地の寶玉も隠してあるか分らない。……常彦、春彦、妾に續

け」

と言ひ乍ら、清彦が「待つた待つた」と大手を擴げて遮るのも聞かず、むりやり

に飛び込んで了つた。

奥には肥松の明りが瞬いて居る。三人の顔はハツキリと輪廓まで現はれて居る。

高姫「コレハコレハ皆さま、御樂しみの最中、御邪魔を致しまして申譯のない事

で御座いました。花を欺く美男子と美人、そこへ白髪交りの齒脱婆アが参りました、嘸、折角の興がさめた事で御座いませう。此洞穴に似合はぬ……お前さまは美しい方だが、此島の方か、但は、蛇、蜂の兩人に拐かされてこんな所へ押込められたのか、様子がありさうに思はれる。サア包まずかくさず仰有つて下さい。日の出神の生宮が此場へ現はれた以上は、蛇、蜂の兩人位何と云つても駄目ですよ」

清子姫、照子姫兩人は行儀よく兩手をつき、

兩女「ハイ有難う御座います。聖地に於て御高名著しき、あなた様が高姫様で御座いましたか。妾は比沼の眞奈井の寶座に仕へて居りました清子姫、照子姫の兩人で御座います」

高姫「かねがね黒姫さまから承はつて居つた、比治山の隠家にムつた淑女はお前さまの事であつたか。如何して又かやうな所へお越し遊ばしたのだ。大方蛇、蜂兩人の小盗人に拐はかされて、斯んな所へ來なさつたのだらう。グツグツして居ると此奴アをしかねまい代物です。最前も小聲に情約履行の間際だとか何と

か吐はきいて居ゐました。サア、妾わたしが來きた以上いじやうは最早もはや大丈夫だいぢやうぶ、高姫たかひめと一緒いっしょに此琉球このりうきうの島しまを探險たんけんし、結構けつこうな寶玉ほうぎよくの所在ありかを求もとめ、言依別ことよりわけの後あとを追おうて、其七そのななつの寶玉ほうぎよくを手てに入れて聖地せいちに歸かへり、大神様おほかみさまの御神業ごしんげふをお助たすけしようではありませぬか」

二人ふたりは顔赭かほあからめて、無言むごんの儘俯ままつつむいて居ゐる。清彦きよひこは高姫たかひめの胸倉むなぐらをグツととり、

清彦きよひこ「コラ婆アばば、小盗人こぬすびととは聞捨ききすてならぬ。三五教あななひけうの宣傳使せんでんし清彦きよひこ、照彦てるひこの兩人りやうにんだ」

高姫たかひめ「ヘン、馬鹿ばかにするない。お前達まへたちが胸倉むなぐらを取とつて威喝ゐかつした所ところで、そんな事ことに

ビクとも致いたす高姫たかひめぢやありません。蛇あぶ、蜂はちの小泥坊こどろぼうが恐おそろしくて、こんな所ところま

で活動くわつどうに來こられますか。今は宣傳使せんでんしでも、昔むかしはヤツパリ泥坊どろぼうをやつて居ゐたぢや

ないか」

清彦きよひこ「昔むかしは昔むかし、今いまは今いまだ。改心かいしんすれば其日そのひから眞人間まにんげんにしてやらうと神様かみさまが仰有おつしや

るぢやないか。俺おれが泥坊どろぼうなら高姫たかひめは大泥坊おほどろぼうだ」

高姫たかひめ「オイ常彦つねひこ、春彦はるひこ、何をグツグツして居ゐるのか、高姫たかひめが此通このとほり胸倉むなぐらを取とられ

て居ゐるのに平氣へいきで見みて居ゐると云いふ事ことがありますか」

常彦つねひこ「左様さやうでムごいます。あなたも餘あまり我がが強つよいから、神様かみさまが清彦きよひこさまの手てを借かつ

て身魂研きをなさるのだと思つて、ジツとして御神徳を頂いて居ります。……な
ア春彦さま、キツと善が勝つと神さまが仰有いますから、今善惡の立別けが始ま
るのですで……高姫さま、シツカリやりなさい。……清彦さま、何方も負けて下
さるなや」

照彦はムツクと立上り、行司氣取りになつて、そこにあつた芭蕉の葉の端をむ
しり唐團扇の様な形にして、右の手に捧げ、

照彦「東西……東は高姫山に、西は清彦川……何れも一番勝負、アハ、ハ、ハ、ハ」

と笑つて居る。高姫は金切聲を出して、爪を立て、一生懸命に掻きむしらうとす
る。強力な清彦に両方の手首をグツと握られ、如何ともすること能はず、目計り
しろくろ白黒させ前歯のぬけた口から、臭い息と唾とを盛に吐き出して、清彦の顔に注い
でゐる。清彦も堪りかねえ両方の手をパツと放した。照彦は中に割つて入り、
照彦「御見物の方々、此勝負は照彦が來年迄お預かりと致します」
高姫「清子姫さま、照子姫さま、お前さまは、斯んな亂暴な男を何と思つてゐら
れますか」

清子姫「ハイ、御二人共申分のない、立派なお方で御座います。中にも清彦さまはどこともなしに蟲の好く御方ですよ。なア照子姫さま」
照子姫「あなたの御言葉の通り、御二人とも本當に立派な方ですワ。妾は何だか照彦さまの方が、中でもモ一つ立派な方だと思ひます、ホ、ホ、ホ、ホ、」
と俯むく。

高姫「清彦が妾の胸倉を取つたのも道理、二人の男に二人の女、好いた同志が今晩こそは、此離れ島で何々しようと思つてる所へ、此婆アがやつて来たものだから腹が立つたでせう。御無理もありません。併し乍ら縁と云ふものは汚いものぢやな。行成彦命の系統をうけた御兩人さまが、人もあらうにこんなお方の女房にならうとは、イヤモウ理外の理、高姫感じ入りました。併し言依別命さまは此處へ來られたか、御存じでせうな」

清子姫、照子姫一時に、

兩女「ハイ、おいでになつた相で御座います」

清彦「おいでになるはなつたが、龍の腮の二つの玉を手に入れ、意氣揚々として、

遠の昔臺灣島へ行き、それから南米の高砂島へ渡られたといふことだ。我々もその琉と球との二つの玉を手に入れる爲にやつて来たのだが、一足遅れた爲に、後の祭り、せめても腹いせに男女四人が、撞の御柱を巡り合ひ、美斗能麻具波比をなせと宣り玉ひ、此島の守り神とならうと思つて居る所ですよ」

高姫「何とお前は男にも似合はぬ、チツポけな肝玉だな。此廣い世界に斯んな島を一つ治めて満足してゐる様な事では、到底三千世界の御用は出来ませぬぞや。併し乍ら身魂相應な御用だから、何程鳥に孔雀になれと言つたつてなれる氣遣ひはなし、仕方がないなア」

と揚げ面し、冷笑を浮べて居る。

照彦「高姫さま、餘り見下げて下さいませ。私だつて琉と球との玉を手に入れ、言依別さまの隠された七つの玉を、假令半分でも探し出し、そして、高砂島は申すに及ばず、筑紫の島から世界中の覇權を握る位な考へは持つて居るのだが、肝腎な琉と球との寶玉を言依別に取られて了つたのだから、後を付け狙うと云つても見當がつかぬだないか。それだから百日百夜水行でもして、二夫婦の者が玉の

所を探しに行かうといふ考へだ。百日の水行をすれば世界が見えすくと三五教の神様が仰有るのだから、玉の所在はもとより、言依別の行方も分るのだ。あなたは日の出神の生宮なら、猶更分るでせう」

高姫「きまつた事だよ。分かればこそ、ここ迄従いて来たのだ……サア言依別命、餘り遠くは行くまい。グツグツしていると又面倒だ。……常彦さま、春彦さま、早く

参りませう。なる事ならば、照子姫さま、清子姫さま、あなた丈は私のお供なさいませぬか。蛇、蜂兩人の女房になるのは一つ考へ物です」

清彦「エー又婆アの癖に構ひやがる。サア早く出て行け」

高姫「出て行けと言はなくても、こんな所にグツグツしてをれるか。……サア常彦、春彦、早く早く」

とせき立てて、立ち去らうとする。

常彦「モシモシ高姫さま、何程急いだつて、なる様により成りませぬで。今夜はここで宿めて貰つて、明日の朝ゆつくり行きませうか……ナア春彦、お前も大分に草臥れただらう」

春彦はるひこ 草臥くたびれたと云いつた所ところで、船ふねの中なかに浮ういて居ゐるのだ。目的もくてきが立たつてから、何なに

程ほどゆつくり休やすまうとままだ。サア行ゆかう□
と厭いやさうにしてる常彦つねひこの手てを取とり、引摺ひきずるやうにして、高姫たかひめと共ともに此この洞穴どうけつを脱ぬけ
出だし、路々みちみち祝詞のりとを奏上そうじやうし乍ながら、苺いちじや石松いしまつの茂しげる珊瑚岩さんごがんの碁列ごれつせる濱邊はまべを指さして一いち
目散もくさんに驅かけつけ、乗のり來きし船ふねに身みに任まかせ、一いつ生しやう懸命けんめい南みなみを指さして大海原おほうなばらを漕こぎ出だした。

(大正一一・七・二七 舊六・四 松村眞澄録)

第五篇 清泉靈沼

第一六章 琉球の神(七九八)

高姫一行が立去つた後の洞穴は、水入らずの男女四名、互に秘密を半打明けて一種異様の氣分に打たれてゐる。

斯る處へ言依別命は、國依別、若彦、常楠、チャール、ベース其他の土人を引伴れ、此洞穴指して一先づ歸り來り、入口より中を覗けば燈火がついて居る。さうして奥の方に何か人影が見えてゐる。國依別は一同に向ひ、

國依別「ヤア皆さま、御苦勞で御座いました。誰か氣の利いた土人と見えるが、燈火をつけて待つてゐる様です」

と云ひ乍ら一足先に入つた。清彦は此姿を見て、

清彦「ヤア」

とばかりに驚き、側に驅寄つて、

清彦「これはこれは國依様でムいますか。ヤア言依別の教主様、大勢の方々、

よくマア御いで下さいました。御承知の通りの荒屋、葎が澤山に御座いますれば、

悠乎と御召り遊ばして御話を願ひます」

國依別「ヤアお前は清彦ぢやないか。何時の間にやら我輩の邸宅を横領して、主

人氣取りになつて了つたのだな…… 教主様、其他御一同様、清彦が御留守宅へや

つて来て居ります」

清彦「どうぞ奥へ御通り下さいませ」

國依別「主客顛倒とは此事だ。ヤア奥には照彦其他二人の頗る美人が居るではな

いか。中々抜目の無い男だね」

言依別「ア、若彦さま、常楠さま、サア奥へ御進み下さい」

常楠と若彦は琉、球の玉を奉じ、洞穴内の最も高き處に安置し、拍手を打ち一

生懸命に何事か小聲に唱へてゐる。

清彦、照彦、清子姫、照子姫は両手をつき、

「是は是は教主様、不思議な所で御目にかかりました。先づ先づ御無事で御目出

度うムいます」

言依別「ヤア有難う。御神徳を以て龍の腮の琉、球の寶玉はうまく手に入りました。

就ては貴女方どうして又斯様な處へ來たのですか」

清子姫「ハイ、妾は比沼の眞奈井の寶座に於て、照子姫様と楔を修して居りました

た。處が瑞の寶座は俄に鳴動を始め、四邊に芳香薰じ、微妙の音樂聞え來ると思ふ間もなく、忽然として現はれ玉ひし豊國姫の御神姿、言葉靜かに宣らせ玉ふやう……この寶座は、妾寸時神界の都合によつて或地點に立向ひ、神靈不在となれば、汝等二人は一刻も早く此場を立去り、由良の港の秋山彦が館に、龍宮の麻邇の寶珠集まり玉へば之を奉迎せよ……神素盞鳴大神、國武彦命も御でましになつてゐる……との事に、旅装を整へ由良港へ参りしも後の祭となり、其儘聖地上り、玉照彦、玉照姫様の神勅や、貴方様の御教示を拜して高熊山に登り、三週間の行を爲し、いろいろの神界の御經綸を承はつて、漸くこに参つたものであります。ところが途中に於て船を暗礁に乗り上げ、生命危い所を御兩人様に助けられ、結構なる御神徳をうけましたものであります。』

言依別『それは皆さま、結構で御座いました。吾々とても琉、球の寶玉を斯の如く無事に拜領し來れば、これよりは益々神徳著く、御神業も完全に成就する事と悦んで居ります。』

國依別『モシモシ常楠さま、貴方の血縁の兩人が此處に御越しになつてゐるとい

ふのも、不思議の經綸ぢやありませんか。照彦に清彦、照子姫に清子姫、これ又一つの不思議、…常楠に常彦、…これも亦不思議。畏れ多い事だが言依別様に國依別、若彦さまにチャール、ベース、名までよく情意投合してゐる様ですなア。

アハ、ハ、ハ、

常彦「お前は清彦、照彦の兩人、ようマアこんな處まで探ねて来てくれた。親なればこそ、子なればこそだ」

清彦、照彦兩人は一度に、

兩人「吾々は斯様なところでお父さまに御目に掛らうなどは、夢にも思つてみませんでした。教主様の後をつけ狙つて高姫一行が参つたと聞き、心も心ならず、御後を慕つて御用の末端にもと思ひ、出て参りました。併し乍ら最早教主様は此島を既に既に御用了り、御出立の跡ならんと落膽致して居りましたが、併しここで御目に掛りましたのは何より有難い事で御座います」

言依別「あゝさうであつたか。それは大いに心配を掛けたなア。併し高姫さまは執拗にも斯様なところまで、吾々の後を追つて来たのかなア」

清彦「高姫さまは假令高砂島の果までも貴方の御後を尋ね廻り、七つの寶玉の所在を探して教主様を改心させなならぬと言つて、今の今とてこの洞穴に御越しに相成り、常彦、春彦と共に、大變に我々兩人に毒吐いた揚句、一刻も猶豫ならぬ。言依別の後を追つてやらうと云つて、慌しくここを立去られた所で御座います。モウ今頃は何處かの濱邊から、船に乗つて漕ぎ出してゐる位でせう」

言依別「何處までも玉にかけたら執念深い高姫だなア。ア、仕方が無い」と雙手を組んで思案に暮れる。

言依別「さうすれば高姫さまは、又我々の渡る高砂島へも行くに違ひ無い。琉球の寶玉を持つて參れば、又しても罪を作らず様なものだ。是から國依別と兩人が玉の精靈を我が身魂に移し、形骸丈は……若彦さま、御苦勞だが二つとも貴方が守護して、再度山の麓なる玉能姫の館へ持歸り、夫婦揃うて此玉を保管をし乍ら、神界の御用をして下さい。貴方も此御神業が成就した上は、玉能姫の夫として同棲されても差支は有りますまい」

若彦はハツと驚き、有難涙に暮れ乍ら、

若彦「情の籠つた教主の御言葉、有難く存じます。左様なれば此玉を保護致し、生田の森の神館へ持帰り、貴方の聖地へ御歸り遊ばす迄大切に守護致します」
言依別「早速の御承知、一日も早く御歸り下さい。……又常楠翁は此琉球島の土人の神となり、王となつて永遠に此處に鎮まり神業に盡して貰ひたい。……清彦、照彦は常楠と共に本島を守護致し、餘力あれば臺灣島へも渡つて三五教を廣め、國魂神となつて土民を永遠に守つて下さい。言依別はこれより國依別と共に、高砂島へ渡り、夫より常世國を廻つて波斯の國、産土山脈の齋苑の館に立向ふ考へだ。随分神様の御恵を頂いて壯健無事に御神業に参加されよ」
と宣示する。一同はハツとばかりに有難涙を出し、頭を地につけて涕泣稍久しうしてゐる。

ここに言依別は琉の珠の精靈を腹に吸ひ玉ひ、國依別は球の珠の精靈を吸ひ、終つて二個の玉手箱を若彦に渡した。若彦は押頂いて、直にチャール、ベースの二人に船を操らせ寶玉を保護し、荒浪をわけて、再び自轉倒島の生田の森に引き返す事となつた。

これより若彦、玉能姫は生田の森に於て夫婦の息を合せ、神界の爲に大功を顯はしたのである。

言依別命は國依別を伴ひ、琉球全體の守護權を、常楠、清彦、照彦に一任し、悠々として土人二名を引伴れ、船を操らせ乍ら、萬里の波濤を蹶つて高砂島に向つて出發された。又清子姫、照子姫は言依別の後を追ひ暗夜に紛れて船に乗り、高砂島へ進む事となつた。

清彦、照彦はこの二人の美女が何時の間にか、此島より消え去りしに一時は落膽したが、よく顧みれば、自分には紀の國に妻子ある事を思ひ出し、天則違反の行動となるに思ひ當り、この戀を斷念する事となつた。然るに清彦、照彦二人の妻子は、夫を捨てて何處へか姿を隠したる事後に至つて判然し、常楠の命に依つて貴人の娘を妻となし、清彦は琉球の北の島を、照彦は南の島を管掌し、永遠にその子孫を傳へたのである。

又常楠はハリス山の山深く進み入つて生神となり、俗界より姿を隠して了つた。今に到る迄不老不死の仙術を體得し、琉球島の守護神となつてゐる。あゝ惟

神靈幸倍坐世。

（大正一一・七・二七 舊六・四 外山豊二録）

第一七章 沼の女神（七九九）

ことよりわけのみこと、國依別は高砂島へ、若彦は自轉倒島へ、照子姫、清子姫は言依別の後を慕うて立去つた後の清彦、照彦は、父の常楠と共に此離れ島に残され、恰も遠島に流されし如き淋しみを感した。これより親子三人の交際は益々親密を加へ、よく父子兄弟の順序行はれ、數多の土人の益々崇敬の的となつて居た。

此島に琉球沼と云ふ至つて廣き藺の密生した沼がある。或夜清彦の夢に……清子姫照子姫の二人、沼の對岸に現はれ、白き細き手をさし延べて清彦に向ひ、

「琉球へおじやるなら、草鞋穿いておじやれ、琉球は石原、小石原」

と歌つて踊りしと夢見て目が醒めた。

土人のエムとセムとの從者に向つて清彦は、

清彦「此島に琉球沼と云ふ廣大無邊な清泉を湛へた沼があるか」

と尋ねて見た。エム、セムの二人は言下に首を縦にふり乍ら、

エム「有ります有ります、確に立派な沼があつて、藺が周邊に密生し、比較的淺

く、さうして外の沼とは違つて、水底は小砂利を以て敷つめた様な氣分の良い沼

です。その中央に珊瑚礁で作られた立派な岩があり、其岩には大きな穴が明いて

居る。其穴を這入ると中は千疊敷で、時々立派な美人が其穴より二人現はれ、金

扇を擴げて踊り狂ひ舞ふとの事です」

セム「此里の者は傳説に聞く計り、恐れて近寄つた者はありません」

清彦「お前知つて居るなら、そこまで案内をして呉れないか」

エム「御案内は致しますが、うっかり沼の中へでも這入つて貰つたら大變です」

清彦「照彦、お前も行かうぢやないか。清子姫、照子姫と寸分違はぬ美人が扇を

擴げて我々兄弟兩人を待つて居るぞよ」

照彦「兄貴、それは夢だないか。餘り清さま照さまに精神を取られて居るものだ

から、そんな夢を見たのだよ。キツと大蛇の御化にきまつてゐる。私はマア止めておかうか」

清彦「ハテ氣の弱い。兔も角經驗の爲に行つて見たら如何だ。別に外に忙しい用がある」と云ふのではない。物は經驗ぢやないか。將來此島の霸王とならうと思へば、隅々までも探險しておく必要があるだらう。……お父さま、如何でせう。我々兄弟、エムとセムを案内者として一度探險に行つて來たいと思ひますが……」

常彦「何を言つても、ここは世界の秘密國だ。御苦勞だが一つ調べて貰ひたい。

……エム、セムの兩人、お前御苦勞だが、二人の案内をしてやつて呉れ」

エム、セムの二人は一も二もなく承諾をした。茲に四人は常楠と共に天津祝詞を奏上し、成功を祈願し終つて、草鞋脚絆の輕装にて、一本の杖を携へ、芭蕉の葉で編んだ一文字笠を頭に頂き乍ら、一天雲なき青空を草を分けて、琉球沼の畔に辿り着いた。里程は殆ど今の十里位である。湖邊に着いた頃は太陽は既にセークス山の頂きに没し、山の影は湖面を蔽ふ頃であつた。

清彦は沼の畔に立つて、湖面を眺め歌つて見た。

清彦きよひこ 神かみの教をしへに清きよめられ

魂たまを研みがいた清彦きよひこや

身魂みたまも四方よもに照てり渡わたる

照彦てるひこ宣傳せんでん使し

琉球りゅうきゅうの沼ぬまに永久とこしへに

鎮しづまりゐます心こころも清きよき清子きよこ姫ひめ

身魂みたまもてれる照子てるこ姫ひめ

清きよと清きよとの清きよい仲なか

照てると照てるとの明あかい仲なか

エムとセムとの案内あないにて

お前まへに會あはんとこがれこがれて 出でて來きたやさしい男をとこ

セークス山ざんに日ひが隠かくれ 早はや鳥羽うば玉たまの夜よは近ちかづいた

清きよい清きよい朝日あさひの如ごとく 明あかき明あかき天津日あまつひの

照てり輝かがやく如ごとく 實げに麗うるはしき男をとこと男をとこ

夢ゆめの中なかなる女をんなを尋たづね 夢ゆめに夢ゆめ見る心こころ地ちして

此處こゝまで訪たづねて來きた男をとこ 沼ぬまの女神めがみよ心こころあらば

男をとこの切せつない思おもひを汲くめよ 夢ゆめの中なかとは言いひ乍ながら

お前まへは私わしを清きよい心こころで 呼よんだでないか

白しろきたただむき淡雪あはゆきの 若わかやる胸むねを素すだたき

たたきまながり眞玉手玉手 互にさしまき腿長に
水火を合して此島の 守りの神とならうでないか
夢の中なる清子姫 照子の姫よ遙々と
訪ね来れる清彦や 照彦の眞心を
仇に思ふな沼の主

と歌つた。

照彦は清彦の歌の終るを待ち兼ねた様に、

照彦「かくれた かくれた日輪様は セークス山の頂きに
沼を包んだ涼しい影に 我等が心も涼しくなつた
心は照る照る身魂は清く 小石の竝んだ沼の底
小魚の躍りもよく見える 踊るは小魚のみでない
照彦心も勇み立ち 思はず手足が踊り出す

照れよ照れ照れ心の光
 清い身魂に宿つた神の
 分の靈魂の清彦兄貴
 兄弟二人が姉妹を
 訪ねて来たのも外でない
 昨夜兄貴が見た夢の
 沼の女に會ひたさに
 木の丸殿を立出でて
 エムとセムとに送られて
 草野を分けてやつて来た
 男心を汲み取つて
 早く姿を現はせよ
 沼に泛んだ珊瑚礁
 エムとセムとの話を聞けば
 黄金の扇打ひろげ
 天女の様な乙女子が
 何時も現はれますと聞く
 私等二人は琉球の
 國の頭に任せられて
 此處に現はれ照りわたる
 月日の光を身に受けて
 二人と二人の心を合せ
 北と南の夫婦島
 千代の契を結ばうと
 お前にこがれて来た男
 仇に返すな沼の主

と歌ひ終つて、四人は美はしき砂の布きつめた様な浅き沼を、小さき雑魚を驚かせ乍らバサバサと、時ならぬ波を立てて進んで行く。

遙彼方に黒ずんで浮いて居る珊瑚礁の影、日は漸く地平線下に没し、そろそろ暗の帳は下されて来た。涼しき風は一行の面を撫で、水深は最早太腿の所まで浸された。忽ち島はポーツと明くなつた。四人は何となく心勇み明りを目當に進んで行く。

忽ち現はれた八尋鰐、此處よりは水深俄に増して到底前進する事が出来ない。八夕と當惑して居る矢先、八尋鰐は橋の様になつて其前に横たはつた。幾十とも知れぬ鰐は珊瑚礁を基點として、長き橋を架けた様に單縦陣を作り、四人の男に此上を渡れ……と言はぬ許りの意思を示した。

清彦外三人は神言を奏上し乍ら、鰐の背を覺束なげに踏みこえ踏みこえ、漸くにしてポツと明い珊瑚礁に辿り着いた。振りかへり見れば今迄現はれた八尋鰐の姿は水泡の如く消え果て、後には波靜かに魚鱗の如く漂うて居た。

清彦は珊瑚礁に安着した祝ひに、心も何となくいそいそし乍ら、又も歌ひ踊つ

て居た。

清彦「ここは琉球の中心地點 夢の中なる戀妻の

堅磐常磐に隠れたる 高砂島か珍島か

珍の女神の御玉の住處 琉球へおじやるなら

草鞋穿いておじやれ 琉球は石原小石原

唄つて聞かした二人のナイス 今はいづくに身をかくす

はるばる訪ねて來た男 出迎へせぬとは無禮ぞや

私も男の端ではないか 龍の化身か天女の果か

但は清子照子の幻像か 眞偽の程は我々の

戀に迷うた眼には 八ツキり分らない

夢に踊つたお前の姿 白い肌や白い腿

太い乳房をブラブラと 見せたる時の心持

俺はどうしても忘れぬ 戀の暗路に迷うた男

琉球の沼で兄弟が 戀の虜とならうとは

夢にも思はぬ清彦が 赤き心を知るならば

夢を破つて現實の 清子の姫や照子姫

早く姿を現はせよ お前に會ひたさ顔見たさ

千代も八千代も添ひたさに 父の前にて言擧げし

弟までも誘うて やつて來たのは阿呆らしい

清姫、照姫心あらば 夢の姿を現實に

早く現はせ自轉倒の 神の島をば後にして

遙々訪ねて來た男 兒島半島の磯端近く

波に揉まれて暗礁に 船を乗りあげ玉の緒の

消ゆる命を助けた俺達兄弟 瑞の寶座に仕へて居つた

お前二人を女房にしようとして 兄弟二人が目星をつけて

互に戀を争ひつ 其煩さに烏羽玉の

暗に紛れて逃げ出した お前は清さま照さまだらう

言依別の後追うて 萬里の波濤を横ぎりつ

高砂島へ渡り越したと思つたお前 やはり琉球が戀しうて

五月蠅い二人を振棄て 水で圍んだ此沼の

珊瑚礁をば寶座とし 千代に八千代に永久に

此岩窟に身を潜め 戀を葬るお前の心

とは言ふものの魂は ヤツパリ我々兄弟を

忘れかねてか昨夜の夢に 黄金の扇子を打ひるげ

心も清き清彦を 笑を湛へて招いたぢやないか

神の結んだ尊い夫 出迎へせぬとは没義道だ

戀に上下の隔てはなかる 三國一の婿が來た

早く鐵門を押しあけて 二人の男を迎へ入れ

お前の初戀うまうまと 叶へてやらう又私の

初戀ならぬ二度目の戀路 國に残した妻子はあれど

何時の間にやら人の妻 行方も知らぬ妻子の身の上

かうなる上はよもや 天則違反に問はれはすまい

何の躊躇も要るものか

と歌ひ終つた。此時岩窟の中より、岩の戸を取外して現はれ出でた、ダラダラ筋の被衣をつけた四人の男、四人の前に目禮し、無言の儘差し招き、うす暗い岩窟を先に立つて下つて行く。四人は後に從ひ、細き岩窟を稍腰を屈めて、右に左に上りつ下りつ、パツと明るい廣場に辿り着いた。

迎への男は手眞似で、ここに暫く休息せよと示した。四人は恰好の岩の突起に腰を打ちかけ、暫く息を休むることとなつた。迎への男は其儘どこともなく姿を隠した。嚟曉たる音楽の音四邊より響き来る。

暫くあつて二人の美人桃色の顔容に纓絡の付いたる冠を戴き、玉串を兩手に捧げ、悠々として此場に現はれ來り、一人は稍丸顔に少しく身體太り、一人は少しく年若く顔は細型に體もそれに應じて稍細く、三十二相の具備したる觀自在天の如き容色端麗にして、其崇高き事譬ふる物なき許りであつた。清彦、照彦は餘り

の美はしさと莊嚴さと、どこともなく犯す可らざる威嚴の備はるあるに、稍怖氣
づき、呆然として其姿を看守のみであつた。先に立つた女神は清子姫である。
花の如き唇を淑やかに開いて清彦に向ひ、歌つて言ふ。

清子姫 妾は聖地エルサレム 神の都に仕へたる

天使の長と現れませる 廣宗彦が四代の孫

身魂も清き清子姫 汝が父の常楠は

國彦、國姫が三代目の曾孫 元を糾せば古より

切つても切れぬ神の綱 戀の懸橋永久に

落ちず流れず清彦が 妻となるべき清子姫

お前は身魂の因縁を 顧みずして照子姫に

思ひをかけし戀男 モウ斯うなる上は

定まる縁と諦めて 清子姫の夫となり

夫婦仲よく此島に いや永久に住居して

國くにの司つかさとならうでないか
榎つぎの洞ほらにて出會であうた女をんな

姿すがたも顔かほも少すこしも變かはらぬ清子きよこ姫ひめ
最も早はやお前まへの怪あやしの夢ゆめは

醒さめたであらう
あなにやし好男えいをとこ

あなにやし好乙女えいをとめよと
八千代やちよを契ちぎる玉椿たまつばき

幾千代いくちよ迄までも添そひ遂とげて
神かみの御旨みむねに叶かなへまつれよ

我戀わがこふる清彦きよひこの司つかさ
これぞ全まつたく言依別ことよりわけの

教主けうしゆの定め玉たまひし
二人ふたりの縁えにし

よもや否應いやおうありますまいぞ
色好いろよき應答いらへを松蟲まつむしの

泣ないて暮くらした我心わがこころ
仇あだには棄すてな三五あななひの

神かみの司つかさの清彦きよひこよ
朝日あさひは照てるとも曇くもるとも

月つきは盈みつとも虧かくるとも
假令たとへ大地だいちは沈しづむとも

神かみの結むすんだ此縁このえにし
お前まへが心こころの怪あやしき曲者くせものに

破やぶられさうな事ことはない
□

「サアサアおじや」……と手を執れば、清彦は案に相違の面持にて、清子の姫をよつく凝視め、俄に姫が戀しくなり、手を引かれ乍ら歌ひ出した。

清彦「神の結んだ二人のえにし 深い仕組は知らずして

汚れ果てたる身魂を持ち乍ら お前は好ぢや嫌ひぢやと

小言を云うた恥かしさ 照子の姫に彌まさる

今のお前の姿を眺め 頓に戀しくなつて來た

ホンニお前は美しい 實に愛らしい妹ぢやぞえ

夢に牡丹餅、地獄で佛 何に譬ん今日の喜悅

夢の中なるナイスに出會ひ 未だ夢見る心地して

胸の鼓動はドキドキと まだ治まらぬ清彦が

心の切なさ嬉しさよ 是も夢ではあるまいか

夢なら夢でも是非はない いついつまでも此儘に

夢は醒めざれ夢に夢見る 浮世の夢は

天國淨土のパラダイス

芙蓉の山に永久に

鎮まりぬます木花咲耶姫

神の恵の露にぬれ

此儘此處で我と汝と

夫婦の契いや永く

相生の松の色深く

褪せずにあれや惟神

御靈幸はひましまして

心清彦、清子姫

幾久しくも夢の浮世の

夢は覺めざれ』

と歌ひつつ奥深く導かれ行く。音樂の聲頻りに響き來り、得も言はれぬ芳香四邊を包む。

照子姫は莞爾として照彦に向ひ、

照子姫 ♪ ア、好男好男 心の色も照彦が

離久の暗を吹き拂ひ 神の結びし妹と背の

えにしを契る今日の生日の足日こそ 神の都のエルサレム

源遠く廣宗彦の

珍の血筋と生れたる

照子の姫は今茲に

汝の來るを待受けて

心も清き藺草をば

刈り干し來り香も高き

藺草の疊織りなして

今迄待ちし戀の淵

心に浮ぶ日月は

沼の清水の面清く

照子の姫の眞心を

いとも詳さに現はしぬ

離久の夢も今さめて

神の結びし我夫に

巡り會ひしも古の

深きえにしの循り來て

汝と再び添臥しの

夢路を辿る新枕

身魂の筋を白浪の

淵に沈んだお前の心

照子の姫を餘所にして

心も清き清子姫

秋波を送り玉ひたる

心の空の情なさよ

恨み歎つぢやなけれども

盡きぬえにしに搦まれて

結ぶの神の結びてし

二人の仲は此沼の

いと浅あさからぬ契ちぎ合あひ 久遠くをんの夢ゆめは今いま爰ここに

漸やうやく晴はれてたらちねの 神かみの身み魂たまのいそいと

歡よろこぎ玉たまへる今日けふの日ひよ 千代ちよも八千代やちよも永久とこしへに

汝なれは我わが身の背せとなりて いくしきみませ吾あれも亦また

汝なれをこよなき夫せとなして 神かみの依よさしの神業かむわざに

仕つかへ奉まつらむあが願ねがひ 汝なれが心こころの岩いはの戸とを

開ひらいて語かたれ胸むねの奥おく あゝ惟かむながらかむながら神々々

御靈みたま幸さちはひましまして 此この岩窟いはやどのいいや堅かたく

彌いや永久とこしへに變かはりなく 天あまの御柱みはしらつき固かため

國くにの御柱みはしら永遠とこしへに 固かたく契ちぎらん夫婦めをとなか仲なか

あゝ照彦てるひこよ照彦てるひこよ 天津あまつ御空みそらに月つきは照てる

日ひは照てる曇くもる世よの中なかに 二人ふたりの仲なかは永久とこしへに

心こころに浮うかぶ日ひ月つきは 互たがひに照彦てるひこ、照子てるこ姫ひめ

月つき日は照てる照てる常世とこよは曇くもる 愛あいと愛あいとの互たがひの胸むねに

神の情の雨が降る

と言ひ終つて、照彦の手を取り奥深く導き入る。照彦は手を曳かれ乍ら、此やさしき美はしき女神の後に従ひ、精神恍惚として、前後も辨へず、只々感謝喜悅の涙に咽び乍ら歌ひ出した。

照彦 琉球の沼の水清く 塵をも止めぬ清子姫

心の色も清彦が 水火を合せて神業に

仕へ奉るぞ目出度けれ 汝の心も照子姫

引かれて進む照彦は 初めて晴れた戀の暗

二人の妻に手を引かれ 黄金の橋を渡るよな

涼しき心地の二人の男の子 雲井の空に彌高く

神の救ひの舟として 金銀銅の三橋を

昔の神の渡りたる 清き思ひに充たされて

天てん教けう山ざんに降くだるごと 日ひ頃ころ戀こひたる我わが思おもひ

こここに愈い撞よの御み柱しら巡めぐり合あひ ああななににややしし好え男をとこ

ああななににややしし好え乙をとめ女をとと 千ち代よの契ちぎの礎いし固ずめかたる

清きよけき神かみの行おこなひを 繰くり返かへす如ごとき心こ地ちして

引ひかれ行ゆく身みぞ樂たのしけれ 月つきは盈みつとも虧かくるとも

假た令へ大だい地ちは沈しづむとも 三さん五ごの月つきの御み教をしへは

堅か磐きは常とき磐はに照てれよかし 我われ等ら二ふ人たりの其その仲なかは

三さん五ごの月つきの何いつ時まで迄までも 天あま津つ御み空そらにいと圓まるく

琉りう球きうの沼ぬまに影かげ映うつし 天あめに輝かがく照てる彦ひこや

沼ぬまに映うつりし照てる子こ姫ひめ 天あめと地つちとは永とこ久しへに

照てる照てる光ひかる花はなは咲さく 彌い永とこ久しへに桃ももの實みの

落おちちずずににああれれや夫め婦をと仲なか 神かみの結むすびし此このえにし

幾いく億おく萬まん年ねん末すゑまでも 二ふ人たりは手てに手てを取とりかはし

天あま津つ御み空そらの星ほしの如ごとく 濱はまの眞ま砂さの數かず多おほく

御子を生め生め永久に
人子の司となりなりて

此浮島の守り神
あゝ惟神々々

御靈幸はひましまして
二人の夢は何時迄も

醒めずにあれや永久に
神の御前に願ぎまつる

と歌ひ終つた。忽ち奥の間の隔ての戸を引開けて中より現はれた、清彦、清子姫

の二人、顔色麗しく笑を湛へて、清子姫は照子姫の手を取り、清彦は照彦の手を

取り、琉球疊を布きつめた、岩窟に似合はぬ美はしき居間に導いた。バナナ、い

ちご、柿、木茄子、林檎其外種々の美はしき果物、沼の特産物たる赤貝の肉、石

茸なぞ數多竝べられ、ここに二夫婦は芽出度く夫婦の契を結ぶ事となつた。

是より清彦、清子姫の二人は此沼を中心として、さしもに廣き琉の島の守り神

となり、子孫永遠に榮へて、神の如くに敬はれ、數多の土人は其徳に悦服し、世

は太平に治まつたのである。次に照彦は照子姫と共に、南の島に渡り、同じく此

島の守り神となつて子孫繁榮し、土人に神の如く、親の如く尊敬された。

南みなみの島しまを一名球いちめいきうの島しまと云いふ。今いまの八重山群島やへやまぐんたうは球きうの島しまの一部いちぶが残のこつて居ゐるのである。照彦てるひこ夫婦ふうふは時々ときどき球きうの島しまより、遠とほく海路うなぢを渡わたり、臺たい灣わん島たうの北ほく部にまで、其勢そのせいり力よくを擴充くわくじゆうして居ゐた。

(大正一一・七・二八 舊六・五 松村眞澄録)

第一八章 神格化〔八〇〇〕

清彦きよひこ、清子きよこ姫ひめ、照彦てるひこ、照子てるこ姫ひめの二夫ふたふう婦ふは茲ここに芽出度めでたく結婚けつこんの式しきを擧あげた。槻つきの洞どう穴けつに在ある父ちちの常楠つねくすに報告ほうこくし、且かつ親子おやこの杯さかづきを結むすぶべく此岩窟このがんくつを立出たちいで、エム、セムふたりの二人ふたりを初はじめ四五ごの從者じゆうしやと共に鱒魚わにの船ふねに身みを委まかせ、さしもに廣ひろき琉球りうきう沼ぬまを渡わたつて茫々ぼうぼうたる草野くさのを分わけ、辛からうじて其日そのひの夕ゆふ間暮まぐれ、常楠つねくすが洞穴どうけつの館やかたに辿たどり着ついた。常楠つねくすは四五ごの土人どじんと共に祭壇さいだんの前まへに、清彦きよひこ、照彦てるひこの幸福かうふくを祈いのりつつ、言依別ことよりわけ一行かうの海上無事かいじやうぶじを祈いのる眞最中まつさいちゆうであつた。二人ふたりの兄弟きやうだいは二人ふたりの美うるはしき新妻にひつまを伴ともなひ、

數多の供人を従へ意氣揚々として茲に歸つて來た。常楠は一心不亂になつて祈願に餘念がなかつた。兄弟夫婦は其傍に端坐して感謝祈願の言葉を奏上した。常楠は祝詞の奏上を了り後振り返り見れば、清彦、照彦は容色端麗なる二人の美女と共に行儀よく坐つて居た。

清彦「父上様、只今無事に歸りました」

照彦「嘸お待兼で御座いましたでせう」

常楠「ヤア思つたよりは早く歸つて來て下さつた。ヤアお前は此間此處を立去つ

た清子姫、照子姫の二人ではなかつたか。縦から見ても横から見ても瓜二つ、寸

分違はぬ綺麗な女、どうして御座つたか。此常楠も氣が氣でならなかつた。マア

マア無事で何よりもお目出度い」

清子姫「貴方が噂に高き常楠の御父上で御座いますか。妾は清彦さまの女房にな

りました。どうぞ末永く可愛がつて下さいませ」

照子姫「妾は照彦さまの妻で御座います。お父様、初めて……否再びお目に懸り

ます。好くも御無事で居て下さいました。どうぞ末永く我子として愛して下さい

ませ。何分不束な者で御座いますれば、お構ひなくお叱り下さいまして、幾久し

く御召使ひの程をお願申します」

常楠は涙を浮べ乍ら、

常彦「ア、二人共好く言つて下さつた。此常楠も是にて最早心残り是在りませぬ。

夫婦仲好くどうぞ神業を完全にお務め下さい」

清子姫と照子姫は「ハツ」と計りに首を下げ、嬉しさと懐さの涙に暮れて居る。

常楠は祝意を表し且つ自分の素性を明かす可く、銀扇を擴げて老の身にも似ず、

聲爽かに歌ひ始めた。

常楠「千早振る古き神代の其昔 神の都のエルサレム

國治立大神の いや永久に鎮まりて

世を知食す其砌 遠津御祖の國彦が

妻國姫と諸共に 神の御祭り麻柱て

仕へ奉りし甲斐もなく 醜の建びの強くして

子孫は四方に散亂し

吾が父母の玉彦や

玉姫二人は自轉倒の

島に姿を隠しつつ

我れを生して何處ともなく

清き姿を隠し給ひぬ

親に離れし雛鳥の

寄る邊渚の常楠は

自轉倒島を遠近と

巡り巡つて紀の國に

細き煙を立て乍ら

情なき浮世を送る折

天の岩戸の大變に

逢ひしが如く親と子は

世の荒浪に吹き捲られて

分れ分れに世を送る

頃しもあれや先つ年

尊き神の計らひに

絡み合ひたる親子の對面

秋彦、駒彦始めとし

心の色も清彦や

照彦四人に巡り會ひ

盡きぬ縁を喜びつ

月日を送る其中に

熊野の瀧の楔場に

三五教の若彦と

心清むる折もあれ

木花姫のあれまして

常楠、若彦兩人は

琉と球との神寶の

いや永久に隠されし

秘密の國の琉球島

龍の腮の寶玉を

受取りまして言依別の

瑞の命に獻ぜよと

言葉嚴かに宣り給ふ

其神勅を畏みて

汐の八百路を打渡り

雨に浴し風に梳づり

大海原の潮をかぶり

浪に呑まれ漸々に

琉と球との此島に

上りて見れば昔より

人跡絶えし深山路の

谷間に清き玉の海

老錆果てし常楠も

玉の勢若彦と

日毎夜毎に上り來て

天津祝詞を奏上し

大龍別や大龍姫の

珍の命を言向けて

琉と球との寶玉を

三五教の言依別に

奉らんと村肝の

心定めし龍神の

胸も開けし時もあれ

浪路をわけて渡り来る
 言依別の大教主
 國依別と諸共に
 假りの宿りと定めたる
 此洞穴に現れまして
 此處に四人の神司
 ハーリス山の谷間を
 心いそいそ進みつつ
 龍の腮の寶玉を
 恙も無しに手に入れて
 歸り來れる嬉しさよ
 倅の清彦、照彦は
 如何なる神の引合せか
 我れの住家を訪ね來て
 清子の姫や照子姫
 四人は早くも假の家に
 來り居ませる不思議さよ
 言依別の大教主
 國依別を伴ひて
 浪路を渡り高砂の
 島に出でんと宣らせつつ
 此常楠が浪の上
 伴ひ來りし若彦に
 琉と球との寶玉を
 持たせて遙かに自轉倒の
 島に歸させ給ひつつ
 此常楠を琉球の
 島の守り神と神定め

倅清彦、照彦を
左守右守の神として

波を渡りて出で玉ふ
清彦、照彦兩人は

清子の姫や照子姫
此處に目出度く妹と背の

契を結び永久に
此浮島を守らんと

思ひし事も水の泡
清子の姫や照子姫

闇に紛れて何處となく
姿隠させ玉ひしより

清彦、照彦兩人が
心の中の苦しさは

如何ならんと父母の
我苦しみは一入ぞ

天と地との神々に
朝な夕なに眞心を

籠めて祈りし甲斐ありて
今日は嬉しき清子姫

照子の姫の若嫁に
巡り會うたる嬉しさよ

あゝ惟神々々
御靈幸倍ましまして

夫婦の仲は睦まじく
千代も八千代も永久に

鴛鴦の契の何時迄も
變らであれやどこ迄も

常磐とぎはの松まつの色いろ深く
褪あせずなにあれや夫婦めをとなか仲

最早もはや此世このよに残りのこなし
我われはこれよりハリスの

山やまの尾をの上へを乗のり越こえて
此神島このかみじまを永久とこしへに

守まもらん爲ために萬代よろづよも
命いのちなが永ながらへ山人やまびとの

群むれに加くははり長をさとなり
世よを永久とこしへに守まもりなん

汝清彦なんぢきよひこ、清子きよこ姫ひめ
光ひか治ぢき照子てるこ姫ひめ

心こころも清きよく照彦てるひこと
彌いや永久とこしへに何時いつ迄までも

南みなみの島しまに出いでまして
神かみの御業みわざに仕つかへかし

朝日あさひは照てるとも曇くもるとも
月つきは盈みつとも虧かくるとも

假令たとへ大地だいちは沈しづむとも
我われの身魂みたまの此島このしまに

止とどまる限かぎり心安うらやすの
浦安國つらやすくにと幸さちはひて

神かみの惠めぐみの露つゆの雨あめ
堅磐かきはとぎは常磐とぎはに降ふらせなん

最早もはや此世このよに残りのこなし
孰いづれもサラバいと言いふより早はやく

天あまの數歌かずうた歌うたひ上げ
合掌がっしやうするや常楠つねくすは

全身ぜんしん忽たちち雪ゆきの如ごとく 眞ま白しろになりて木きの丸まる殿どのの入口いりぐちを
 一ひと足あし二ふた足あし跨またげ出いでしと思おもふ間まに 忽たちち姿すがたは白しろ煙けぶり
 磯いそ吹ふく風かぜの音おと高たかく 空そらに聞きゆる計ばかりなり
 兄けう弟だい夫ふう婦ふうは驚おどろいて 木きの丸まる殿どのを走はしり出いで
 空そらを仰あふいで手てを合あはせ 父ちちよ父ちちよと呼よぶ聲こゑも
 吹ふき來くる風かぜに遮さへぎられ 尋たづぬる由よしも泣なく計ばかり
 天てんを仰あふぎ地ちに伏ふして 親おや子の果は敢かなき此この別わかれ
 嘆なげき居あるこそ哀あはれなれ あゝ惟かむ神ながら々々かむながら
 御み靈たま幸さち倍はへましませよ。

(大正一一・七・二八 舊六・五 谷村眞友録)

終り